始

万葉集

上

昭和一〇・五・二十 帝國圖書

67-419.

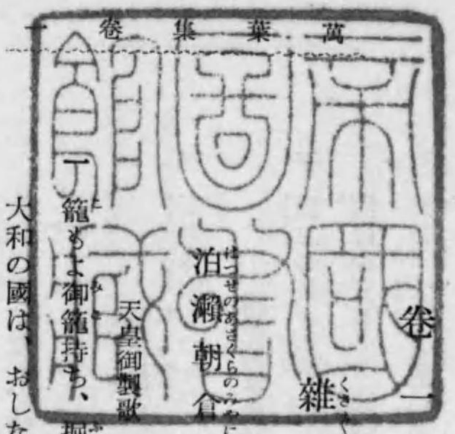
解題

日本に生れて萬葉集を讀まざるは最も不幸な人である。斯かる至寶を顧みざるは寧ろ罪惡に屬する。萬葉集は日本最古の歌集である。古きが故に尊しとするは、文獻學者骨董家流の不正不公平なる判斷である。萬葉集の至寶たる所以は、その最古なるが爲に非ずして、實に最優秀の歌集なるが爲である。地に日本國在つて爰に幾千年、眞に歌の意義に適へる歌のみを以て構成されたる歌集は、萬葉集を措いて他に無いのである。萬葉集總て二十卷、歌の數四千四百餘首、詠者の年代は仁德天皇元年より淳仁天皇天平寶字二年に至り、凡て四百四十六年に亙つてゐる。撰者は橘諸兄ともいひ、大伴家持ともいひ、或は兩人の撰ともいひ、或は今の一、二、十三、十一、十二、十四の六卷が本來の萬葉集で、餘は家々の歌集が混じたものともいひ、家持の書き集めたものとも云ふ。兎も角、この書は勅撰などいふ公のものでなくして、私に編輯したものなる事は明である。又一箇人の輯めたものとも思はれぬ、而して家持の輯めた部分が多い、と云ふ事は爭はれぬ。家持は天平、天平勝寶、天平寶字頃の人である。萬葉集には天皇の御製もあれば一防人一遊女の歌も又乞食の歌までもある。その編輯法、たゞ歌の價値を思うて、階級の如何を顧みぬ所、已に心持が好い。この書の成つた頃は、まだ假名と云ふものゝ無かつた時代であるから、漢字のみを操縱して記載してある。例へば「我が門に千鳥(ちどり)蹈鳴く起きよ〳〵我が一夜妻(ひとよづま)人に知らゆな」と今ならば書くのを

「吾門爾千鳥數鳴起余起余我一夜妻人爾所知名」と書いてある。本書は讀み易き爲に皆現今の記載法に改め、その訓み方は鹿持雅澄の萬葉集古義の說に隨つた。又漢文のある所は皆書流しにしてある。君よ、その机上に山なす新刊雜誌をおろして、暫く萬葉集に耽れ。そこには神祇天皇に對して感じたる崇嚴の情を高調に發露した柿本人麿も居る。始めて客觀的の詩境に立脚した山部赤人も居る。飽くまで自我を把持し物每に執着した煩悶詩人山上憶良も居る。その他當代の尊卑男女はいづれも眞の聲を擧げて熱烈なる情感を君の前に歌ふであらう。

萬葉集を假字まじりに書き改めたものは數部世に出て居る。それらのものや、國歌大觀などと對照する便宜をはかつて、歌の上に番號を附することにした。古義は著者の意見によつて順序を變へたところもある。從つて本書は、順序をそれにして、番號を大觀のと同じくしてある。

萬葉集 上編



巻一 雜歌

泊瀨朝倉宮御宇天皇代（雄略天皇）

天皇御製歌

籠もよ御籠持ち、掘串もよ御掘串持ち、此岳に菜摘ます兒、家告らせ名告らさね、虛見津大和の國は、おしなべて吾こそ居れ、敷きなべて吾こそ座せ、我をこそ背とは告らめ、家をも名をも

高市岡本宮御宇天皇代（舒明天皇）

天皇香具山に登りまして國見し給へる時御製歌

二　大和には群山あれど、取りよろふ天の香具山、登り立ち國見をすれば、國原は煙立ち立つ、海原は鷗立ちたつ、美し國ぞ秋津洲、大和の國は

天皇内野に御遊獵し給へる時、中皇命の間人連老をして獻らしめ給ふ歌

三　八隅知し我が大君の、朝には取撫で賜ひ、夕にはい倚り立たしゝ、御執らしの梓の弓の、鳴弭の音すなり、朝獵に今立たすらし、夕獵に今立たすらし、御執らしの梓の弓の、鳴弭の音すなり

反歌

四　玉刻春宇智の大野に馬列めて朝蹈ますらむその草深野

讃岐國安益郡に幸せる時、軍王山を見て詠み給へる歌

五　霞立つ長き春日の、暮れにける別も知らず、村肝の心を痛み、鵠子鳥うら歎居れば、玉襷懸けの宜しく、遠つ神我大君の、行幸の山越の風の、獨居る我が衣手に、朝夕に還らひぬれば、大夫と思へる我も、草枕旅にしあれば、思ひ遣る方便を知らに、綱の浦の海人少女等が、焼く鹽の思ひぞ焼くる、我が下情

反歌

六　山越の風を非時み寢る夜落ちず家なる妹を懸けて慕びつ

明日香川原宮御宇天皇代（皇極天皇）

額田王の歌

七　秋の野の美草刈り葺き宿れりし兎道の宮所の假廬し思ほゆ

後崗本宮御宇天皇代（齊明天皇）

額田王の歌

八　熟田津に船乘せむと月待てば潮も叶ひぬ今は漕ぎてな

紀の温泉に幸せる時、額田王の詠み給へる歌

九　御室の山見つゝ行け吾が夫子がい立たしけむ嚴樫が本

中皇命の紀伊温泉に往ませる時の御歌

一〇　君が代も我が代も知らむ磐代の岡の草根をいざ結びてな

一一　君が夫子は假廬作らす草なくば小松が下の草を刈らさね

一二　吾が欲りし兒島は見しを底深き阿胡禰の浦の珠ぞ拾はぬ

中大兄（後の天智天皇）三山の御歌

一三　香具山は畝火を愛しと、耳梨と相諍ひき、神代より斯くなるらし、古も然かなれこそ、
　　虚蟬も嬬を相爭ふらしき

反歌

一四　香具山と耳梨山と會戰し時立ちて見に來し印南國原

一五　渡津海の豐旗雲に入日刺し今夜の月夜清く照りこそ

近江大津宮御宇天皇代　（天智天皇）

天皇の内大臣藤原朝臣に詔して、春山の萬花之艶、秋山の千葉之彩を競憐はしめ給ふ時、額田王歌以ちて判り給へる其の歌

一六　冬隱り春さり來れば、鳴かざりし鳥も來鳴きぬ、咲かざりし花も咲けれど、山を茂み入りても聽かず、草深み取りても見ず、秋山の木の葉を見ては、黄葉づをば取りてぞ偲ぶ、青きをば置きてぞ歎く、其處し樂し、秋山吾は

額田王の近江國に下り給へる時詠み給へる歌

一七　味酒三輪の山、青丹吉奈良の山の、山の間ゆい隱るまで、道の隈い積るまでに、委曲に見つゝ行かむを、數々も見放かむ山を、情なく雲の、隱さふべしや

反歌

一八　三輪山を然かも隱すか雲だにも情あらなむ隱さふべしや

井戸王の即ち和へ給へる歌

一九　綜麻形の林の岬のさ野榛の衣に著くなす目に著く我が兄

右の一首の歌は今案ずるに、和ふる歌に似ず、但舊本此次に載す、故に以て猶載す、

天皇の蒲生野に御遊獵し給へる時、額田王の詠み給へる歌

二〇　赤根刺　紫野行き　標野行き　野守は見ずや君が袖振る

皇太子の答へませる歌（後の天武天皇）

二一　紫草の匂へる妹を惡くあらば人妻故に吾戀ひめやも

明日香清御原宮御宇天皇代　（天武天皇）

十市皇女の伊勢神宮に參で給へる時、波多の横山の巖を見て吹黄刀自が詠める歌

二二　河の上の五百箇磐群に草生さず常にもがもな常少女にて

麻續王伊勢國伊良虞島に流たへ給ひし時、時人哀傷み詠める歌

二三　打麻乎麻續王海人なれや伊良虞の島の珠藻刈ります

麻續王此の歌を聞かして感傷み和へ給へる歌

二四　空蟬の命を惜しみ浪に濕で伊良虞の島の珠藻刈り食む

右日本紀を案ずるに曰く、天皇の四年乙亥夏四月戊戌朔乙卯、三品麻續王、罪ありて因幡に流され、一子伊豆島に流され、一子血鹿島に流されき、是に伊勢國伊良虞島に配さると云へるは、若し疑ふらくは後人歌の辭に緣りて誤り記せるか、

天皇御製歌

二五　三吉野の御金の嶺に、時無くぞ雪は降りける、間無くぞ雨は降りける、其の雪の時無きが如、其の雨の間無きが如、隈も落ちず思ひつゝぞ來る、其の山道を

或本の歌

二六　三芳野の御金の山に、時じくぞ雪は降るちふ、間なくぞ雨は降るちふ、其の雪の時じくが如、其の雨の間無きが如、隈もおちず思ひつゝぞ來る、其の山道を

右句々相換れり、此に因りて重ねて載せたり、

天皇吉野宮に幸せる時御製歌

二七　良き人の良しと能く見て良しと言ひし芳野能く見よ良き人能く見

藤原宮御宇天皇代（持統天皇）

天皇御製歌

二八　春過ぎて夏來るらし白妙の衣乾したり天の香具山

近江の荒都を過ぐる時、柿本朝臣人麿が詠める歌

二九　玉襷畝火の山の、橿原の日知の御代よ、生れましゝ神の盡、樛の木の彌繼嗣に、天の下知ろし召しゝを、虛見津大和を置きて、青丹吉奈良山越えて、如何樣に思ほしけめか、天離る鄙にはあらねど、石走る近江の國の、樂浪の大津の宮に、天の下食ろし召しけむ、天皇の神の尊の、大宮は此處と聞けども、大殿は此處と云へども、霞立つ春日か霧れる、夏草か繁く成りぬる、百磯城の大宮處、見れば悲しも

反歌

三〇　樂浪の志賀の唐崎幸くあれど大宮人の船待ち兼ねつ

三一　左散難彌の志賀の大曲淀むとも昔の人に亦も逢はめやも

高市連黑人が近江の都の荒れたるを感傷み詠める歌

三二　古の人に我あれや樂浪の古き京を見れば悲しき

三三　樂浪の國つ御神の裏さびて荒れたる都見れば悲しも

紀伊國に幸せる時、川島皇子の詠みませる御歌（或云山上臣憶良歌）

三四　白浪の濱松が枝の手向草幾代までにか年の經ぬらむ

勢能山を越え給ふ時、阿閇皇女の御詠みませる御歌

三五　是やこの大和にしては我が戀ふる紀路に有りちふ名に負ふ勢能山

吉野宮に幸せる時、柿本朝臣人麿が詠める歌

三六　八隅知し吾が大君の、聞こし食す天の下に、國はしも多にあれども、山川の清き河内と、御心を吉野の國の、花散らふ蜻蛉の野邊に、宮柱太敷き座せば、百磯城の大宮人は、船並めて朝川渡り、舟競ひ夕河渡る、此川の絶ゆる事なく、此山の彌高からし、落ち水激つ瀧の宮所は見れど飽かぬかも

反歌

三七　見れど飽かぬ吉野の川の常滑の絶ゆる事なく復た還り見む

三八　安見知之吾が大君、神隨神さびせすと、吉野川水激つ河内に、高殿を高知り座して、登り立ち國見をすれば、疊なづく青垣山、山神の奉る貢と、春方は花挿頭し持ち、秋立てば黃葉挿頭し、遊副川の神も、大御食に仕へ奉ると、上つ瀨に鵜川を立て、下つ瀨に小網刺し渡し、山川も依りて仕ふる、神の御代かも

反歌

三九　山川も依りて仕ふる神隨水激つ河内に船出せすかも

伊勢國に幸せる時の歌

四〇　安胡の浦に船乘すらむ少女等が珠裳の裾に潮滿つらむか

四一　釧卷く手節の崎に今もかも大宮人の玉藻苅るらむ

四二　潮動に伊良虞の島邊榜ぐ船に妹乘るらむか荒き島回を

右の三首は柿本朝臣人麿が京に留まりて詠める

四三　吾が夫子は何處行くらむ奥つ藻の名張の山を今日か越ゆらむ

右の一首は當麻眞人麻呂が妻

四四　吾妹子をい佐見の山を高みかも大和の見えぬ國遠みかも

右の一首は石上大臣の從駕つかへまつりて詠める

輕皇子安騎野に宿りませる時、柿本朝臣人麿の詠める歌

四五　八隅知し我大君、高照る日の皇子、神隨神さびせすと、太敷かす京を置きて、隱國の泊瀨の山は、眞木立つ荒山道を、石根の楷枝押し靡べ、坂鳥の朝越えまして、陽炎の夕さり來

れば、み雪降る安騎の大野に、旗薄裏に押し靡べ、草枕旅宿りせす、古思ほして

短歌

四六　安騎の野に宿る旅人打靡き寐も寢らめやも古念ふに

四七　眞草刈る荒野にはあれど黃葉の過ぎにし君が形見とぞ來し

四八　東の野に陽炎の立つ見えて顧みすれば月傾きぬ

四九　日並の皇子の命の馬並めて御獵立たしゝ時は來向ふ

藤原の宮營に役民の詠める歌

五〇　八隅知し我大君、高照る日の皇子、荒妙の藤原が上に、食國を見し給はむと、大宮は高知らさむと、神隨思ほすなべに、天地も依りてあれこそ、石走る近江の國の、衣手の田上山の、眞木幸く檜の嬬手を、武士の八十氏川に、玉藻なす浮べ流せれ、そを取ると勞働ぐ御民も、家忘れ身もたな知らに、鴨自物水に浮居て、我が造る日の御門に、知らぬ國依巨勢道より、我國は常世にならむ、圖負へる神龜も、新代と泉の川に、持ち越せる眞木の嬬手を、百不足筏に作り、上すらむ勤はく見れば、神隨ならし

明日香宮より藤原宮に遷りましゝ後、志貴皇子の詠みませる御歌

五一　婦女の袖吹き反す明日香風京都を遠み徒に吹く

藤原宮の御井の歌

五二　八隅知し我大君、高照る日の皇子、荒妙の藤井が原に、大御門始め給ひて、埴安の堤の上に、在立たし見し給へば、大和の青香具山は、日の經の大御門に、青山と繁榮さび立てり、畝火の此瑞山は、日の緯の大御門に、瑞山と山さび座す、耳梨の青淸山は、背面の大御門に、宜しなべ神さび立てり、名細吉野の山は、影面の大御門よ、雲居にぞ遠くありける、高知るや天の御蔭、天知るや日の御影の、水こそは常磐にあらめ、御井の淸水

短歌

五三　藤原の大宮仕へあれつくや少女が友は乏しきろかも

右の歌作者未詳

太上天皇の難波宮に幸せる時の歌

六六　大伴の高師の濱の松が根を枕きて寢る夜は家し偲ばゆ

右の一首は置始東人

六七　旅にして物戀しきに家言も聞えざりせば戀ひて死なまし

右の一首は高安大島

六八　大伴の美津の濱なる忘貝家なる妹を忘れて思へや

右の一首は身人部王

六九　草枕旅行く君と知らませば岸の埴生に染はさましを

右の一首は清江娘子が長皇子に進れる歌

大寶元年辛丑太上天皇吉野宮に幸せる時の歌

七〇　大和には鳴きてか來らむ呼子鳥象の中山呼びぞ越ゆなる

右の一首は高市連黑人

七一　巨勢山の列列椿熟に見つゝ偲ばな巨勢の春野を

右の一首は坂門人足

或本の歌

七二　河上の列列椿つらつらに見れども飽かず巨勢の春野は

右の一首は春日藏首老

三野連が入唐の時、春日藏首老詠める歌

七三　大船の對島の渡海中に幣取り向けて早還り來ね

山上臣憶良が大唐に在りし時、本鄕憶びて詠める歌

七四　いざ子等早日本邊に大伴の御津の濱松待ち戀ひぬらむ

太上天皇紀伊國に幸せる時、調首淡海が詠める歌

七五　朝裳吉紀人乏しも眞土山行來と見らむ紀人乏しも

二年壬寅太上天皇參河國に幸せる時の歌

七六　引馬野に匂ふ榛原入り亂り衣匂はせ旅の驗に

右の一首は長忌寸奥麻呂

七七　何處にか船泊てすらむ安禮の崎撈回み行きし棚無し小舟

右の一首は高市連黑人

七八　流らふる雪吹く風の寒き夜に我が夫の君は獨か寢らむ

右の一首は譽謝女王

七九　宵に逢ひて朝面無み隱にか氣長き妹が廬せりけむ

右の一首は長皇子

八〇　大夫が得物矢手挾み立向ひ射る的形は見るに清潔けし

右の一首は舍人娘子が從駕つかへまつりて詠める

慶雲三年丙午難波宮に幸せる時の歌

八一　葦邊行く鴨の羽交に霜降りて寒き夕は大和し思ほゆ

右の一は首志貴皇子

六五　霰打安良禮松原住吉の弟日娘と見れど飽かぬかも

右の一首は長皇子

大行天皇の難波宮に幸せる時の歌

七一　大和戀ひ寐の寢らえぬに情無く此渚の崎に田鶴鳴くべしや

右の一首は忍坂部乙麻呂

七二　玉藻刈る沖邊は搒がじ敷妙の枕の邊忘れかねつも

右の一首は式部卿藤原宇合

七三　吾妹子を早見濱風大和なる吾を松の木に吹かざるな勤

右の一首は長皇子

大行天皇吉野宮に幸せる時の歌

七四　三吉野の山の嵐の寒けくにはたや今夜も我が獨寢む

右の一首或の云く、天皇御製歌

七五　宇治間山朝風寒し旅にして衣貸すべき妹もあらなくに

右の一は首長屋王

寧樂宮御宇天皇代

和銅元年戊申、天皇御製歌（元明天皇）

七六　大夫の靫の音すなり物部の大臣楯立つらしも

御名部皇女の和へまつれる御歌

七七　我大君物な思ほし皇神の嗣ぎて給へる君無けなくに

三年庚戌春三月、藤原宮より寧樂宮に遷りませる時、長屋の原に御輿停めて古郷を迴望し給ひて詠みませる御歌（一書云太上天皇御製）

七八　飛鳥の明日香の里を置きて去なば君があたりは見えずかもあらむ

藤原京より寧樂宮に遷りませる時の歌

七九　天皇の御命畏み、柔びにし家を置き、隱國の泊瀬の川に、船浮けて吾が行く川の、川隈の八十隈落ちず、萬度顧みしつゝ、玉桙の道行き暮し、青丹吉奈良の都の、佐保川にい行き至りて、我が寢たる衣の上よ、朝月夜清かに見れば、栲の穗に夜の霜降り、磐床と川の氷凍り、冴ゆる夜を息む事なく、通ひつゝ造れる家に、千代までに座さむ君と、吾も通はむ

反歌

八〇　青丹吉寧樂の家には萬代に吾も通はむ忘るると思ふな

右の歌は作主未詳

五年壬子夏四月、長田王を伊勢齊宮に遣さるる時、山邊の御井にて詠める歌

八一　山邊の御井を見がてり神風の伊勢少女ども相見つるかも

八二　心裏さぶる心さまねし久方の天の時雨の流らふ見れば

八三　海の底沖津白浪立田山何時か越えなむ妹があたり見む

右の二首は、今案ずるに御井にして作る所に似ず、若し疑ふらくは當時誦せりし古歌か、

長皇子と志貴皇子と佐紀宮に倶宴し給ふ時の歌

八四　秋さらば今も見る如妻戀ひに鹿鳴かむ山ぞ高野原の上

右の一首は長皇子

卷一終

卷二

相聞

難波高津宮御宇天皇代（仁德天皇）

皇后の天皇を思ばして詠みませる御歌四首

八五　君が行氣長くなりぬ山尋ね迎へか行かむ待ちにか待たむ

右一首の歌、山上憶良臣の類聚歌林に載す、古事記に曰く、輕太子、輕大郎女に奸く、故其の太子、伊豫の湯に流さる、此の時衣通王、戀慕に堪へずして往時を追ひ歌つて曰く

九〇　君が行氣長くなりぬ山たづの迎へを行かむ待つには待たじ

ここに山多豆と云ふは、これ今の造木といふ者なり、右一首の歌は、古事記と類聚歌林と說く所同じからず、歌主も亦異れり、因日本紀を檢するに曰く、難波高津宮御宇大鷦鷯天皇、廿二年春正月、天皇皇后に語りまして、八田皇女をめしいれて妃となさむとす、時に皇后聽しまさず、爰に天皇歌よみまして皇后に乞はしたまふ、云々、三十年秋九月乙卯朔乙丑、皇后、紀伊

國に遊行して熊野岬に到り、其の處の御綱葉を取りて還りたまふ、こゝに天皇、皇后の在さざるを伺ひて、八田皇女を娶りて宮中に納れたまふ、時に皇后難波の濟に到り、天皇八田皇女を合しつと聞きたまひて、大く恨みたまふ云々、亦曰く遠飛鳥宮御宇雄朝嬬稚子宿禰天皇二十三年春正月甲午朔庚子、木梨輕皇子、太子と爲る、容姿佳麗、見る者自ら感ず、同母妹、輕大娘皇女も亦艶妙なり云々、遂に竊通ぬ、乃ち悒懐少しく息む、廿四年夏六月、御羹の汁凝りて氷と作れり、天皇異みて其の所由を卜はす、卜者曰く、内の亂有り、蓋親親相姦するかと云々、仮りて大娘皇女を伊與に移すといへり、今案ずるに、二代二時此の歌を見ざるなり、

八六　斯くばかり戀ひつゝあらずは高山の磐根し枕きて死なましものを

八七　在りつゝも君をば待たむ打靡く吾が黑髪に霜の置くまでに

或本の歌に曰く

八八　居明して君をばまたむぬばたまの吾が黑髪に霜はふるとも

右の一首、古歌集中に出づ

八八　秋の田の穂の上に霧らふ朝霞何方の方に我が戀ひ止まむ

近江大津宮御宇天皇代　（天智天皇）

天皇の鏡女王に賜へる御歌一首

九一　妹が邊繼ぎても見むに大和なる大島の嶺に家居らましを

鏡女王の和へ奉れる歌一首

九二　秋山の木の下隱り行く水の吾こそ增らめ思ほさむよは

内大臣藤原卿の鏡女王を嫂ひ給ふ時、鏡女王の内大臣に贈り給へる歌一首

九三　玉匣歸るを否み明けて行かば君が名はあれど吾が名し惜しも

内大臣藤原卿の鏡女王に報賜へ給へる歌一首

九四　玉匣三室の山の狹名葛さ寢ずは遂に有りがてましを

内大臣藤原卿采女安見兒を娶たる時詠み給へる歌一首

九五　吾はもや安見兒得たり人皆の得難にすとふ安見兒得たり

久米禪師が石川郎女を嫂ふ時の歌五首

九六　水薦刈る信濃の眞弓吾が引かば貴人さびて否と言はむかも　禪師

九七　水薦刈る信濃の眞弓引かずして弦著くる業を知ると言はなくに　郎女

九八　梓弓引かば隨意依らめども後の心を知りがてぬかも　郎女

九九　梓弓弓弦取り著け引く人は後の心を知る人ぞ引く　禪師

一〇〇 東人の荷前の箱の荷の緒にも妹が情に乘りにけるかも　　禪師

大伴宿禰の巨勢郎女を嫂ふ時の歌一首

一〇一 玉葛實ならぬ木には千早振神ぞ著くちふならぬ木毎に

巨勢郎女が報贈ふる歌一首

一〇二 玉葛花のみ咲きて成らざるは誰が戀ならも吾は戀ひ思ふを

明日香清御原宮御宇天皇代（天武天皇）

天皇の藤原夫人に賜へる御歌一首

一〇三 吾が里に大雪降れり大原の古りにし里に降らまくは後

藤原夫人の和へ奉れる歌一首

一〇四 吾が岡の龍神に乞ひて降らしめし雪の摧けし其處に散りけむ

藤原宮御宇天皇代（持統天皇、文武天皇）

大津皇子の伊勢神宮に竊下りて上り來す時、大伯皇女の詠みませる御歌二首

一〇五 吾が夫子を大和へ遣るとさ夜更けて曉露に吾が立ち霑れし

一〇六 二人行けど行き過ぎ難き秋山を如何でか君が獨越えなむ

大津皇子の石川郎女に贈り給へる御歌一首

一〇七 足引の山の雫に妹待つと吾が立ち沾れぬ山の雫に

石川郎女が和へ奉れる歌一首

一〇八 吾を待つと君が沾れけむ足引の山の雫にならましものを

大津皇子石川郎女に竊婚ひ給へる時、津守連通が其事を占ひ露はせれば、皇子詠みませる御歌一首

一〇九 大船の津守が占に告らむとは兼ねてを知りて我が二人寢し

日並皇子の尊の石川郎女に贈り給へる御歌一首

一一〇 大名兒を彼方野邊に刈る草の束の間も吾忘れめや

吉野宮に幸せる時、弓削皇子の額田王に贈り給へる御歌一首

一一一 古に戀ふる鳥かも弓弦葉の御井の上より鳴き渡り行く

額田王の和へ奉れる歌一首

一一二 古に戀ふらむ鳥は霍公鳥蓋や鳴きし吾が戀ふる如

吉野より苔生せる松が柯を折りて遣り給へる時、額田王の奉れる歌一首

二三　三吉野の玉松が枝は愛しきかも君が御言を持ちて通はく

但馬皇女の高市皇子の宮に在せる時、穂積皇子を思ひて詠みませる御歌一首

二四　秋の田の穂向の縁れる片縁りに君に縁りなな事痛かりとも

穂積皇子に勅ちて近江の志賀の山寺に遣さるる時、但馬皇女の詠みませる御歌一首

二五　後れ居て戀ひつゝあらずは追ひ及かむ道の阿回に標結へ吾が夫

但馬皇女の高市皇子の宮に在せる時、穂積皇子に窃接ひ給ひし事既形れて後に詠みませる御歌一首

二六　他言を繁み言痛み生ける世に未だ渡らぬ朝川渡る

舎人皇子の舎人娘子に贈へる御歌一首

二七　丈夫や片戀せむと嘆けども醜の丈夫尚戀ひにけり

舎人娘子が和へ奉れる歌一首

二八　歎きつゝ丈夫の戀ふれこそ吾が髪結の漬ぢて濕れけれ

弓削皇子の紀皇女を思びて詠みませる御歌四首

二九　吉野川行く瀬の早み少時くも不行む事なく有りこせぬかも

三〇　吾妹子に戀ひつゝあらずは秋萩の咲きて散りぬる花ならましを

三一　夕さらば潮滿ち來なむ住吉の淺香の浦に玉藻刈りてな

三二　大船の泊つる泊のたゆたひに物思ひ痩せぬ人の兒故に

三方沙彌が園臣生羽之女に娶ひて幾時も經らねば、病み臥せる時の歌三首

三三　總束けばぬれ總束かねば長き妹が髪此頃見ぬにかゝげつらむか　三方沙彌

三四　人皆は今は長みと總束けと言へど君が見し髪亂りたりとも　娘子

三五　橘の蔭履む路の八衢に物をぞ思ふ妹に逢はずて　三方沙彌

石川女郎が大伴宿禰田主に贈れる歌一首

三六　風流士と吾は聞けるを宿貸さず吾を歸せり愚鈍の風流士

大伴田主、字を仲郎と曰へり、容姿佳麗、風流秀絶なり、見る人聞く者歎息せざるなし、時に石川女郎あり、自ら雙栖の感を成し、恒に獨守の難きを悲しむ、意に書を寄せむと欲して、未良信に逢はず、こゝに方便をなして賤しき嫗に似せて、已鍋子を提げて、寢側に到り、哽音蹋足して、戸を叩き諮ひて曰く、東隣の貧女火を取らんとして來れりと、こゝに仲郎、暗き裏に冒隱の形をしらず、慮の外に拘接の計にたへず、念の任に火を取り跡に就き歸り去りぬ、明けて後女郎、既に自媒の愧づべきことを恥ぢ、復心契の果さざるを恨む、因りてこの歌を作り、以て贈り諺戲す、

大伴宿禰田主が報贈ふる歌一首

三七　風流士に吾はありけり宿貸さず歸せし吾ぞ風流士にある

石川女郎更た大伴宿禰田主に贈れる歌一首

三八　吾が聞きし耳に能く似つ葦の若末の足痛む吾が夫自愛め賜ぶべし

右は中郎の足疾によりて此の歌を贈りて問ひ訊ふなり、

大津皇子の宮の侍石川女郎が大伴宿禰宿奈麿に贈れる歌一首

三九　古りにし嫗にしてや斯くばかり戀に沈まむ手童の如

長皇子の皇弟に贈り給へる御歌一首

三〇　丹生の川瀬は渡らずてゆく〳〵と戀痛む吾弟いで通ひ來ね

柿本朝臣人麿が石見國より妻に別れて上來る時の歌二首幷短歌

三一　石見の海角の浦回を、浦なしと人こそ見らめ、潟なしと人こそ見らめ、能しゑやし浦はなくとも、能しゑやし潟は無くとも、鯨魚取海邊を指して、和多豆の荒磯の上に、か青なる玉藻沖つ藻、朝羽振る風こそ來寄せ、夕羽振る浪こそ來寄せ、浪の共彼縁りかく依り、玉藻なす依り寢し妹を、露霜の置きてし來れば、此道の八十隈毎に、萬度顧みすれど、彌遠に里は放りぬ、彌高に山も越え來ぬ、夏草の思ひ萎麿えて、偲ぶらむ妹が門見む、麿け

此山

反歌

三二　石見のや高角山の木の間より我が振る袖を妹見つらむか

或本の反歌

三三　石見なる高角山の木の間よも吾が袖振るを妹見けむかも

三四　小竹が葉は御山も清に亂れども吾は妹思ふ別れ來ぬれば

或本の歌一首幷短歌

三八　石見の海角の浦回を、浦なしと人こそ見らめ、潟なしと人こそ見らめ、よしゑやし浦はなくとも、よしゑやし潟はなくとも、鯨魚取り海邊を指して、柔田津の荒磯の上に、か青なる玉藻沖つ藻、明け來れば浪こそ來寄せ、夕されば風こそ來寄せ、浪の共彼依りかく依り、玉藻なす靡き吾が寢し、敷妙の妹が袂を、露霜の置きて來れば、此道の八十隈毎に、萬度顧みすれど、彌遠に里放り來ぬ、益高に山も越え來ぬ、はしきやし吾が嬬の兒が、夏草の思ひ萎えて、嘆くらむ角の里見む、靡け此山

反歌

三九　石見の海高角山の木の際より吾が振る袖を妹見つらむか

右歌體同じと雖も、句々相替れり、此に因りて重ねて載す、

一三五　角鄣經石見の海の、言喧ぐ辛の崎なる、海中石にぞ深海松生ふる、荒磯にぞ玉藻は生ふる、玉藻なす靡き寐し兒を、深海松の深めて思へど、さ寢し夜は幾だもあらず、延ふ蔓の別れし來れば、肝向ふ心を痛み、思ひつゝ顧みすれど、大船の渡の山の、黄葉の散の亂に、妹が袖清にも見えず、妻隱る屋上の山の、雲間より渡らふ月の、惜しけども隱ひ來つゝ、天傳ふ入日刺しぬれ、大夫と思へる我も、敷妙の衣の袖は、通りて沾れぬ

反歌二首

一三六　靑駒が足搔を早み雲居にぞ妹が當を過ぎて來にける

一三七　秋山に散らふ黄葉少時はな散り亂りそ妹が當見む

柿本朝臣人麿が妻依羅娘子が人麿と相別るゝ歌一首

一四〇　な思ひと君は言へども逢はむ時何時と知りてか吾が戀ひざらむ

挽歌

後崗本宮御宇天皇代　（齊明天皇）

有馬皇子の自傷みまして松が枝を結び給へる御歌二首

一四一　磐代の濱松が枝を引き結び眞幸くあらば復た歸り見む

一四二　家にあれば笥に盛る飯を草枕旅にしあれは椎の葉に盛る

長忌寸意吉麻呂が結松を見て哀咽み詠める歌二首

一四三　磐代の岸の松が枝結びけむ人は歸りて復見けむかも

柿本朝臣人麿呂歌集に云ふ、大寶元年辛丑紀伊國に幸せる時、結松を見て詠める歌一首

一四六　後見むと君が結べる磐代の子松がうれを又見けむかも

一四四　磐代の野中に立てる結び松情も解けず古思ほゆ

山上臣憶良が追ひて和ふる歌一首

一四五　翼なす有通ひつゝ見らめども人こそ知らね松は知るらむ

近江大津宮御宇天皇代　（天智天皇）

天皇の聖躬不豫せす時、大后の奉れる御歌一首

一四七　天の原振さけ見れば大君の御壽は永く天足らしたり

天皇崩御ませる時、大后の詠みませる御歌二首

一四八　青旗の木旗の上を通ふとは目には見ゆれど直に逢はぬかも

一四九　人は縱し思ひ止むとも玉葛影に見えつゝ忘らえぬかも

天皇の崩ませる時、婦人が詠める歌一首

一五〇　空蟬し神に堪へねば、離り居て朝嘆く君、放れ居て吾が戀ふる君、玉ならば手に卷き持ち て、衣ならば脫ぐ時もなく、吾が戀ひむ君ぞ昨夜、夢に見えつる

天皇の大殯の時の歌四首　　額田王

一五一　斯からむと豫て知りせば大御船泊てし泊に標結はましを

一五二　八隅知之吾大君の大御船待ちか戀ふらむ志賀の辛崎　　舍人吉年

大后の御歌一首

一五三　鯨魚取近江の海を、沖放けて榜ぎ來る船、邊附きて榜ぎ來る船、沖つ櫂痛くな撥ねそ、邊つ櫂痛くな撥ねそ、若草の夫の命の、思ふ鳥立つ

石川夫人が歌一首

一五四　神樂浪の大山守は誰が爲めか山に標結ふ君も座さなくに

山科の御陵より退散れる時、額田王の詠み給へる歌一首

一五五　八隅知之吾大君の、恐きや御陵仕ふる、山科の鏡の山に、夜はも夜の盡、晝はも日の盡、

哭のみを泣きつゝ在りてや、百磯城の大宮人は、去別れなむ

明日香清御原宮御宇天皇代　（天武天皇）

十市皇女の薨ぎませる時、高市皇子の尊の詠みませる御歌三首

一五六　三諸の神の神杉斯くのみに有りとし見つゝ寢ねぬ夜ぞ多き

一五七　神山の山邊眞蘇木綿短木綿かくのみ故に長くと思ひき

一五八　山吹の立ち茂みたる山清水酌みに行かめど道の知らなく

天皇の崩ませる時、大后の詠みませる御歌一首

一五九　八隅知之我大君の、夕されば召し給ふらし、明來れば問ひ給ふらし、神岳の山の黃葉を、今日もかも問ひ給はまし、明日もかも召し給はまし、其山を振放け見つゝ、夕されば奇に悲しみ、明來れば心不樂暮し、荒妙の衣の袖は乾る時もなし

〔一書に曰く〕

天皇の崩ませる時、太上天皇の御製歌二首

一六〇　燃ゆる火も取りて包みて袋には入ると言はずやも知るといはなくも

一六一　北山に棚引く雲の青雲の星離り行き月も離りて

天皇の崩ましゝ後八年九月九日御齋會奉爲れる夜、夢裏に詠み給へる御歌一首

一六二　明日香の清御原の宮に、天の下知ろし召しゝ、八隅知之我大君、高照る日の皇子、何方に
思ほし召せか、神風の伊勢の國は、沖つ藻も靡かふ波に、鹽氣のみ香れる國に、味凝奇に
乏しき、高照る日の皇子

藤原宮御宇天皇代（持統天皇、文武天皇）

大津皇子薨ぎましし後、大來皇女の伊勢齋宮より上京り給へる時詠みませる御歌二首

一六三　神風の伊勢の國にも有らましを何しか來けむ君も座さなくに

一六四　見まく欲り吾がする君も座さなくに何しか來けむ馬疲るゝに

大津皇子の屍を葛城二上山に移葬りまつれる時、大來皇女の哀傷み詠みませる御歌二首

一六五　空蟬の人なる我や明日よりは二上山を吾が夫と吾が見む

一六六　磯の上に生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君が在すと言はなくに

日並皇子尊の殯宮の時、柿本朝臣人麿が詠める歌一首并短歌

一六七　天地の初の時し、久方の天の河原に、八百萬千萬神の、神集ひ集ひ座して、神分ち分ちし
時に、天照す日靈の尊、天をば知し召すと、葦原の水穂の國を、天地の依合ひの極み、知

し召す神の命と、天雲の八重掻き分けて、神降り座せ奉りし、高照る日の皇子は、飛鳥の
淨の宮に、神隨太敷き座して、天皇の敷き座す國と、天の原岩戸を開き、神上り上り座し
ぬ、我大君皇子の尊の、天の下知し召しせば、春花の貴からむと、望月の滿はしけむと、
天の下四方の人の、大船の思ひ憑みて、天つ水仰ぎて待つに、何方に思ほし召せか、由緣
もなき眞弓の岡に、宮柱太敷き座し、御殿を高知り座して、朝毎に御言問はさず、月日の
數多くなりぬれ、其故に皇子の宮人、行方知らずも

反歌　二首

一六八　久方の天見る如く仰ぎ見し皇子の御門の荒れまく惜しも

一六九　茜刺す日は照せれど烏玉の夜渡る月の隱らく惜しも

或本件の歌を以て、後の皇子の尊の殯宮の時の反歌とせり、

皇子の尊の宮の舍人等が慟傷みて作める歌二十三首

一七一　高光る我が日の皇子の萬代に國知らさまし島の宮はも

一七二　島の宮勾の池の放鳥荒びな行きそ君座さずとも

或本の歌一首

一七〇　島の宮勾の池の放鳥人目に戀ひて池に潛かず

一七三 高光る吾が日の皇子の座しせば島の御門は荒れざらましを
一七四 外に見し眞弓の岡も君座せば常つ御門と宿直するかも
一七五 夢にだに見ざりしものをおほゝしく宮出もするかさ檜の隅回を
一七六 天地と共に終へむと思ひつゝ仕へ奉りし心違ひぬ
一七七 朝日照る佐太の岡邊に群れ居つゝ吾が泣く涙止む時も無し
一七八 御立たしゝ島を見る時潦流るゝ涙止めぞ兼ねつる
一七九 橘の島の宮には飽かねかも佐太の岡邊に宿直しに行く
一八〇 御立たしゝ島をも家と住む鳥も荒びな行きそ年替るまで
一八一 御立たしゝ島の荒磯を今見れば生ひざりし草生ひにけるかも
一八二 鳥塒立て飼ひし鴈の子巣立ちなば眞弓の岡に飛び歸り來ね
一八三 吾が御門千代常磐に榮えむと思ひてありし吾し悲しも
一八四 東の瀧の御門に侍へど昨日も今日も召すことも無し
一八五 水傳ふ磯の浦回の磯躑躅茂く咲く道を復見なむかも
一八六 一日には千度參りし東の瀧の御門を入りがてぬかも
一八七 由縁も無き佐太の岡邊に君座せば島の御橋に誰か住はむ

一八八 茜指す日の入りぬれば御立たしゝ島に下居て嘆きつるかも
一八九 朝日照る島の御門に欝悒しく人音もせねば眞心かなしも
一九〇 眞木柱太き心はありしかど此吾が心鎭めかねつも
一九一 毛衣を春冬片設けて出でましゝ宇陀の大野は思ほえむかも
一九二 朝日照る佐太の岡邊に鳴く鳥の夜鳴き變らふ此年頃を
一九三 奴等が夜晝と言はず行く路を吾は悉皆宮路にぞする

河島皇子の殯宮の時、柿本朝臣人麿が泊瀬部皇女に獻れる歌一首幷短歌

一九四 飛鳥の明日香の河の、上つ瀨に生ふる玉藻は、下つ瀨に流れ觸らふ、玉藻なす彼依り此く依り、靡かひし夫の命の、畳著く柔膚すらを、劔刀身に副へ寢ねば、烏玉の夜床も荒るらむ、其故に慰め兼ねて、蓋くも逢ふやと思ほして、玉垂の小市の大野の、朝露に玉藻は濕づち、夕霧に衣は沾れて、草枕旅宿かもする、逢はぬ君故

反歌一首

一九五 敷妙の袖易へし君玉垂の小市野に過ぎぬ又も逢はめやも

高市皇子の尊の城上の殯宮の時、柿本朝臣人麿が詠める歌一首幷短歌

一九九 挂文忌憚しきかも、言はまくも奇に畏き、明日香の眞神の原に、久方の天つ御門を、恐く

も定め給ひて、神さぶと磐隱ります、八隅知し我大君の、聞し召す背面の國の、眞木立つ不破山越えて、狛劔和蹔が原の、行宮に天降り座して、天の下治め給ひ、食國を定め給ふと、鳥が鳴く東國の、御軍士を召し給ひて、千早振人を和せと、從服はぬ國を治めと、皇子ながら任き給へば、大御身に太刀取り帶ばし、大御手に弓取り持たし、御軍士を誘率ひ給ひ、齊ふる鼓の音は、雷の聲と聞くまで、吹き鳴せる小角の音も、敵見たる虎か吼ゆると、諸人の驚愕ゆるまでに、捧げたる旗の靡きは、冬籠春さり來れば、野毎に附きて有る火の、風の共靡くが如く、取持たる弓弭の騷、御雪降る冬の林に、暴風かもい卷き渡ると、思ふまで聞の恐く、引放つ箭の繁けく、大雪の亂りて來れ、從服はず立向ひしも、露霜の消なば消ぬべく、行く鳥の競ふ間に、度會の齋宮ゆ、神風に伊吹き惑はし、天雲を日の目も見せず、常闇に覆ひ給ひて、定めてし水穗の國を、神隨太敷います、八隅知し我大君の、天の下申し給へば、萬世に然かしもあらむと、木綿花の榮ゆる時に、我大君皇子の御門を、神宮に裝ひ奉りて、遣はしし御門の人も、白妙の麻衣着て、埴安の御門の原に、茜刺す日の盡、鹿じ物い逼ひ伏しつゝ、烏玉の夕になれば、大殿を振放け見つゝ、鶉なすい逼ひ廻り、侍へど侍ひ兼ねて、春鳥の愁吟ひぬれば、嘆も未だ過ぎぬに、憶も未だ盡きねば、言さへぐ百濟の原ゆ、神葬葬り座して、朝も吉城の上の宮を、常宮と定め奉りて、神

隨鎭りましぬ、然れども我大君の、萬代と思ほし召して、作らしゝ香來山の宮、萬代に過ぎむと思へや、天の如振放け見つゝ、玉襷懸けて偲ばむ恐かれども

短歌　二首

二〇〇　久方の天知らしぬる君故に月日も知らに戀ひ渡るかも

二〇一　埴安の池の堤の隱沼の行方を知らに舍人は惑ふ

或書の反歌　一首

二〇二　哭澤の杜に神酒据ゑ祈まめども我大君は高日知らしぬ

弓削皇子の薨ぎませる時、置始東人が詠める歌一首幷短歌

二〇三　八隅知之我大君、高光る日の皇子、久方の天つ宮に、神隨神と座せば、そこをしも奇に恐こみ、晝はも日の盡、夜はも夜の盡、臥居嘆けど飽足らぬかも

反歌　一首

二〇四　大君は神にし座せば天雲の五百重が下に隱り給ひぬ

又短歌　一首

二〇六　樂波の志賀小波重々に常にと君が思ほえたりける

明日香皇女木瓜の殯宮の時、柿本朝臣人麿が詠める歌一首幷短歌

一九六　飛鳥の明日香の河の、上つ瀬に石橋渡し、下つ瀬に打橋渡す、石橋に生ひ靡ける、玉藻もぞ
絶ゆれば生ふる、打橋に生ひをゝれる川藻もぞ、枯るれば生ゆる、何故しかも我大君の、立
たせば玉藻の如く、轉伏せば川藻の如く、靡かひし宜しき君が、朝宮を忘れ給ふや、夕宮
を背き給ふや、空蟬と思ひし時に、春べは花折り挿頭し、秋立てば黃葉挿頭し、敷妙の袖
携はり、鏡なす見れども飽かに、望月の彌珍らしみ、思ほしゝ君と時々、幸まして遊び給
ひし、御食向ふ木題の宮を、常宮と定め給ひて、味澤相目言も絶えぬ、そこをしも奇に悲
しみ、鵠鳥の片戀ひしつゝ、朝鳥の通はす君が、夏草の思ひ萎えて、夕星の彼行きかく行
き、大船の猶豫ふ見れば、慰むる心もあらず、其故に詮術知らに、吾のみも名のみも絶え
ず、天地の彌遠永く、偲び行かむ御名に懸かせる、明日香河萬代までに、愛しきやし我大
君の、形見に此を

短歌　二首

一九七　明日香川筋渡し塞かませば流るゝ水も悠にかあらまし

一九八　明日香川明日さへ見むと思へやも我大君の御名忘れせぬ

柿本朝臣人麿が妻の死りし後、泣血哀慟み詠める歌二首幷短歌

二〇七　天飛也輕の道は、我妹子が里にしあれば、慇懃に見まく欲しけど、止まず行かば人目を多

み、數多く行かば人知りぬべみ、實葛後も逢はむと、大船の思ひ憑みて、陽炎の磐垣淵の、
隱りのみ戀ひつゝあるに、渡る日の暮れ行くが如、照る月の雲隱る如、沖つ藻の靡きし妹
は、黃葉の過て去にしと、玉梓の使の言へば、梓弓聲のみ聞きて、言はむ術爲む術知らに、
聲のみを聞きてありえねば、吾が戀ふる千重の一重も、慰むる心もありやと、吾妹子が止
まず出で見し、輕の市に我が立ち聞けば、玉襷畝火の山に、鳴く鳥の聲も聞えず、玉桙の
道行く人も、一人だに似てし行かねば、術をなみ妹が名呼びて、袖ぞ振りつる

短歌　二首

二〇八　秋山の黃葉を茂み迷はせる妹を求めむ山路知らずも

二〇九　黃葉の散りぬるなべに玉梓の使を見れば逢ひし日思ほゆ

二一〇　空蟬と思ひし時に、携へて吾が二人見し、走出の堤に立てる、槻の木の此方此方の枝の、
春の葉の茂きが如く、思へりし妹にはあれど、憑めりし兒等にはあれど、世の中を背きし
えねば、陽炎の燃ゆる荒野に、白妙の天領巾隱り、鳥自物朝立ち座して、入日なす隱りに
しかば、吾妹子が形見に置ける、若き兒の乞ひ泣く毎に、取り與ふ物し無ければ、男自物
脇狹み持ち、吾妹子と二人我が寐し、枕づく嬬屋の内に、晝はも心さび暮らし、夜はも氣
息衝き明かし、嘆けどもせむ術知らに、戀ふれども逢ふ由を無み、大鳥の羽易の山に、吾

が戀ふる妹は座すと、人の言へば石根さくみて、滯み來し吉けくもぞ無き、現身と思ひし妹が、陽炎の仄にだにも、見えぬ思へば

短歌　二首

二一　去年見てし秋の月夜は照せれど相見し妹は彌年放かる

二二　衾道を引手の山に妹を置きて山路を行けば生けるともなし

或本の歌に曰く

二三　現身と念ひし時に、手携ひ吾が二人見し、出で立ちの百枝槻の木、こちごちに枝させる如、春の葉の茂きが如く、念へりし妹にはあれど、恃めりし妹にはあれど、世の中を背きし得ねば、かぎろひの燎ゆる荒野に、白栲の天領巾隱り、鳥じ物朝立ちい行きて、入日なす隱りにしかば、吾妹子が形見に置ける、綠兒の乞ひ哭く毎に、取り委す物し無ければ、男じ物脇挿み持ち、吾妹子と二人吾が寢し、枕づく嬬屋の內に、晝はうらさび暮らし、夜は息づき明かし、嘆けどもせむ術知らに、戀ふれども逢ふ緣をなみ、大鳥の羽易の山に、汝が戀ふる妹はいますと、人の云へば石根さくみて、なづみ來しよけくもぞ無き、現身と念ひし妹が、灰にてませば

短歌

二四　去年見てし秋の月夜はわたれども相見し妹はいや年さかる

二五　衾路を引出の山に妹を置きて山路念ふに生けるともなし

二六　家に來て妻屋を見れば玉床の外に向ひけり妹が木枕

吉備津の采女が死れる時、柿本朝臣人麿が詠める歌一首幷短歌

二七　秋山のしたべる妹、萎竹の撓依る兒等は、何方に思ひ座せか、栲繩の長き命を、露こそは朝に置きて、夕は消ぬといへ、霜こそは夕に立ちて、朝は失すといへ、梓弓音聞く我も、髣髴に見し事悔しきを、敷妙の手枕纏きて、劔刀身に副へ寐けむ、若草の其夫の子は、寂しみか思ひて寐らむ、悔しみか思ひ戀ふらむ、時ならず過ぎにし子等が、朝露の如夕霧の如

短歌　二首

二八　樂浪の志我津の子等が罷りにし川瀨の道を見れば寂しも

二九　樂浪の大津の子が逢ひし日に髣髴に見しかば今ぞ悔しき

讃岐國狹岑島にて石中の死人を視て、柿本朝臣人麿が詠める歌一首幷短歌

三〇　玉藻吉讃岐國は、國柄か見れども飽かぬ、神柄か許多貴き、天地日月と共に、足り行かむ神の御面と、謂ひ繼げる中の港ゆ、船浮けて吾が榜ぎ來れば、時つ風雲居に吹くに、沖見れば重波立ち、邊見れば白波騷ぐ、鯨魚取り海を恐み、行く船の梶引き折りて、彼此の島

は多けど、名細之狭岑の島の、荒磯回に廬りて見れば、浪の音の繁き濱邊を、敷妙の枕に爲して、荒床に轉臥す君が、家知らば行きても告げむ、妻知らば來も問はましを、玉桙の道だに知らず、鬱悒しく待ちか戀ふらむ、愛しき妻等は

反歌　二首

二三二　妻もあらば摘みて食げまし佐美乃山野上の菟芽子過ぎにけらずや

二三三　沖つ波來依る荒磯を敷妙の枕と纏きて寢せる君かも

柿本朝臣人麿が石見國に在りて臨死とする時、自傷しみ詠める歌一首

二三三　鴨山の磐根し枕ける吾をかも知らにと妹が待ちつゝあらむ

柿本朝臣人麿が死れる時、妻依羅娘子が詠める歌二首

二三四　今日々々と吾が待つ君は石川の貝に交りてありと言はずやも

二三五　直に逢はゞ逢も兼ねてむ石川に雲たち渡れ見つゝ偲ばむ

丹比眞人が柿本朝臣人麿が意に擬へて報ふる歌

二三六　荒浪に寄せ來る玉を枕に置き吾此處にありと誰か告げけむ

或本の歌に曰く

二三七　天離る夷の荒野に君を置きて思ひつゝあれば生けるともなし

寧樂宮御宇天皇代

和銅元年歲次戊申　但馬皇女の薨ぎ給へる後穗積皇子の冬日雪落、御墓を遥望けて悲傷流涕み詠みませる御歌一首

二三八　降る雪は深にな降りそ吉隱の猪養の岡の塞なさまくに

四年歲次辛亥河邊の宮人が姫島の松原にて孃子の屍を見て悲歎み詠める歌二首

二三九　妹が名は千代に流れむ姫島の子松の梢に苔生すまでに

二三九　難波潟潮干なありそね沈みにし妹が姿を見まく苦しも

靈龜元年歲次乙卯秋九月、志貴親王の薨ぎませる時詠める歌一首

二三〇　梓弓手に取り持ちて、大夫が獵矢手挟み、立ち向ふ高圓山に、春野燒く野火と見るまで、燃ゆる火を如何にと問へば、玉桙の道來る人の、泣く涙大雨に降れば、白妙の衣濕ちて、立留り吾に語らく、何しかも猥言へる、聞けば哭のみし泣かゆ、語れば心ぞ痛き、天皇の神の皇子の、御駕の乘炬の光ぞ、許多照りたる

志貴親王の薨ぎませる後、悲傷み詠める歌二首

二三一　高圓の野邊の秋萩徒に咲きか散るらむ見る人なしに

二三二　三笠山野邊行く道は許多も繁く荒れたるか久にあらなくに

右の歌は笠朝臣金村歌集に出づ、

或本の歌に曰く

二三三　高圓の野邊の秋萩な散りそね君が形見に見つゝしぬばむ

二三四　三笠山野邊ゆ行く道許多も荒れにけるかも久にあらなくに

卷二終

卷三

雜歌

天皇（持統）雷岳に御遊ませる時、柿本朝臣人麿が詠める歌一首

二三五　大君は神にし座せば天雲の雷の上に廬せるかも

右、或本に云ふ、忍壁皇子に獻れるなり、その歌に曰く

王は神にしませば雲隱る雷山に宮敷きいます

天皇の志斐嫗に賜へる御歌一首

二三六　否といへど強ふる志斐のが強語此頃聞かずて朕戀ひにけり

志斐嫗が和へ奉れる歌一首

二三七　否と謂へど語れ〳〵と詔らせこそ志斐いは奏せ強語と宣る

長忌寸意吉麻呂が詔を應りて詠める歌一首

二三八　大宮の內まで聞ゆ網引すと網子調ふる海人の呼聲

長皇子の獵路野に遊獵し給へる時、柿本朝臣人麿が詠める歌一首幷短歌

二三九　八隅知之我大君、高光る吾が日の皇子の、馬並めて御獵たゝせる、弱薦を獵路の小野に猪鹿こそはい匐ひ拜め、鶉こそい匍匐ひもとほれ、鹿自物いはひ拜み、鶉なすいはひもとほり、恐みと仕へ奉りて、久方の天見る如く、眞十鏡仰ぎて見れど、春草の彌愛しき、我大君かも

反歌一首

二四〇　久方の天行く月を網に刺し我大君は蓋にせり

二四一　皇は神にしませば眞木の立つ荒山中に海をなすかも

或本の反歌一首

弓削皇子の吉野に遊せる時の御歌一首

二四二　瀧の上の三船の山に居る雲の常に有らむと我が思はなくに

或本の歌一首

二四四　み吉野の三船の山に立つ雲の常にあらむと我が思はなくに

右の一首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ、

春日王の和へ奉れる歌一首

二四三　大君は千歲にまさむ白雲も三船の山に絕ゆる日あらめや

長田王の筑紫に遣され水島を渡り給ふ時の歌二首

二四五　聞きし如眞貴く奇しくも神さび座すか此の水島

二四六　葦北の野坂の浦ゆ船出して水島に行かむ浪立つな勤

石川大夫が和ふる歌一首

二四七　沖つ波邊浪立つとも我が夫子が御船の泊浪立ためやも

又長田王の詠み給へる歌一首

二四八　隼人の薩摩の瀨戸を雲居なく遠くも吾は今日見つるかも

柿本朝臣人麿が羈旅の歌八首

二四九　三津の崎浪をかしこみ隱江の船寄せかねつ野島の崎に

二五〇　珠藻かる敏馬を過ぎ夏草の野島の崎に船近づきぬ

二五一　淡路の野島の崎の濱風に妹が結べる紐吹き返へす

二五二　荒栲の藤江の浦に鯨釣る海人とか見らむ旅行く吾を

二五三　稻日野も去過ぎがてに思へれば心戀しき賀古の島見ゆ

二五四　燭火の明石大門に入らむ日や漕ぎ別れなむ家の邊見ず

二五五　天離る夷の長路を戀ひ來れば明石の戸より大和島見ゆ

二五六　飼飯の海の庭好くあらし刈薦の亂れ出づ見ゆ海人の釣船

〔一本云〕　武庫の海の船にはあらし漁する海人の釣船浪の上ゆ見ゆ

鴨君足人が香具山の歌一首幷短歌

二五七　天降り着く天の香具山、霞立つ春に至れば、松風に池浪立ちて、櫻花木の闇繁み、沖邊には鴨妻喚ばひ、邊つ方に味鴨群騒ぎ、百磯城の大宮人の、退り出て遊ぶ船には、梶棹も無くて不樂しも、榜ぐ人無しに

反歌　二首

二五八　人漕かず有らくも著し頭漬する鷲と鶴と船の上に住む

二五九　何時の間も神さびけるか香具山の鉾杉の本に苔生すまでに

或本の歌に云ふ

二六〇　天降り着く神の香具山、打靡く春さり來れば、櫻花木の闇繁み、松風に池浪立ち、邊つへは味鴨群騒ぎ、奥邊は鴨妻喚ばひ、百磯城の大宮人の、退り出て榜ぎにし船は、竿梶も無くて不樂しも、榜がむと思へど

柿本朝臣人麿が新田部皇子に獻れる歌一首幷短歌

二六一　八隅知之吾大君、高照る日の皇子、敷き座す大殿のへに、久方の天傳ひ來る、雪自物往き

來ひつゝ、彌重き座ませ

反歌　一首

二六二　矢釣山木立も見えず降り亂る雪に騒ぎて朝參らく吉しも

刑部垂麿が近江國より上來る時詠める歌一首

二六三　吾馬痛く打ちてな行きそ日並べて見ても我が行く志賀にあらなくに

柿本朝臣人麿が近江國より上來る時、宇治河の邊に至りて詠める歌一首

二六四　物の部の八十氏河の網代木に猶豫ふ浪の行方知らずも

長忌寸奥麻呂が歌一首

二六五　苦しくも降り來る雨か神の崎狹野の渡に家もあらなくに

柿本朝臣人麿が歌一首

二六六　淡海の海夕浪千鳥汝が鳴けば情も靡ぬに古思ほゆ

志貴皇子の御歌一首

二六七　鼠は木末求むと足引の山の獵師に遇ひにけるかも

長屋王の故郷の歌一首

二六八　吾夫子が古家の里の飛鳥には千鳥鳴くなり君待ちかねて

阿部女郎が屋部坂の歌一首

二六九　忍びなば我が袖以ちて隱さむを燒けつゝかあらむ着ずてましけり

高市連黑人が羇旅の歌八首

二七〇　旅にして物戀しきに山下の赤の朱漆船沖に榜ぐ見ゆ

二七一　櫻田へ鶴鳴き渡る年魚市潟潮干にけらし鶴鳴き渡る

二七二　四極山打越え見れば笠縫の島榜ぎ隱る棚無し小舟

二七三　磯の崎榜ぎ回み行けば近江の海八十の湊に鶴多に鳴く

二七四　吾が船は比良の湊に榜ぎ泊てむ沖へな放かり小夜更けにけり

二七五　何處に吾は宿らなむ高島の勝野の原に此の日暮れなば

二七六　妹も我も一つなれかも三河なる二見の道ゆ別れかねつる

〔一本、黑人妻答歌云〕三河なる二見の道ゆ別れなば吾が夫も吾も獨かも行かむ

二七七　速來ても見てましものを山城の高槻の村散りにけるかも

石川女郎が歌一首

二七八　鹿の海人は海藻刈り鹽燒き暇なみ櫛笥の小櫛取りも見なくに

高市連黑人が歌二首

二七九　吾妹子に猪名野は見せつ名次山角の松原何時か示さむ

二八〇　いざ兒ども大和へ早く白菅の眞野の榛原手折りて行かむ

黑人が妻の答ふる歌一首

二八一　白菅の眞野の榛原往時來時君こそ見らめ眞野の榛原

春日藏首老が歌一首

二八二　角障經石村も過ぎず泊瀨山何時かも越えむ夜は更けにつゝ

高市連黑人が歌一首

二八三　住吉の榎津に立ちて見渡せば武庫の泊ゆ出づる船人

春日藏首老が歌一首

二八四　燒津邊に吾が行きしかば駿河なる安部の市路に遇ひし兒等はも

丹比眞人笠麻呂が紀伊國に往き勢能山を越ゆる時詠める歌一首

二八五　栲領布の懸けまく欲しき妹の名を此の勢能山に懸けば如何にあらむ

春日藏首老が卽ち和ふる歌一首

二八六　宜しなべ吾が夫の君が負ひ來にし此の勢能山を妹とは喚ばじ

志賀に幸せる時、石上卿の詠み給へる歌一首

二八七　此處にして家やも何處白雲の棚引く山を越えて來にけり

穗積朝臣老が歌一首

二八八　吾が命の眞幸くあらば復も見む志賀の大津に寄する白浪

間人宿禰大浦が初月の歌二首

二八九　天の原振放け見れば白眞弓張りて懸けたり夜路は行かむ

二九〇　倉橋の山を高みか夜隱に出で來る月の光乏しき

小田事主が勢能山の歌一首

二九一　眞木の葉の萎ふ勢能山忍ばずて吾が越え行けば木の葉知りけむ

角兒麻呂が歌四首

二九二　久方の天の探女が石船の泊てし高津は淺せにけるかも

二九三　鹽干の三津の海人の藻刈ぎ持ち玉藻刈るらむいざ行きて見む

二九四　風を疾み沖つ白浪高からし海人の釣船濱に歸りぬ

二九五　住吉の岸の松原遠つ神我大君の幸行處

田口益人大夫が上野國司に任けらるゝ時、駿河國淨見埼に至りて詠める歌二首

二九六　廬原の清見が埼の三保の浦の寬けき見つゝ物思ひもなし

二九七　晝見れど飽かぬ田子の浦大君の命畏み夜見つるかも

辨基が歌一首

二九八　信土山夕越え行きて廬前の角太が原に獨かも宿む

大納言大伴卿の歌一首

二九九　奥山の菅の葉凌ぎ降る雪の消なば惜しけむ雨な降りそね

長屋王の寧樂山に駐馬て詠み給へる歌二首

三〇〇　佐保過ぎて寧樂の手向に置く幣は妹を目離れず相見しめとぞ

三〇一　磐が根の凝重く山を越えかねて哭には泣くとも色に出でめやも

中納言安倍廣庭卿の歌一首

三〇二　兒等が家路彌々間遠きを野干玉の夜渡る月に競ひ敢へむかも

柿本朝臣人麻呂が筑紫國に下れる時、海路にて詠める歌二首

三〇三　名細寸稻見の海の沖つ浪千重に隱りぬ大和島根は

三〇四　大君の遠の朝廷と在り通ふ島門を見れば神代し思ほゆ

高市連黑人の近江の舊都の歌一首

三〇五　斯く故に見じと言ふものを樂浪の古き都を見せつゝ卒爾

伊勢國に幸せる時、安貴王の詠み給へる歌一首

三〇六　伊勢の海の沖つ白浪花にもが包みて妹が家裏にせむ

博通法師が紀伊國に往き三穗の石室を見て詠める歌三首

三〇七　旗薄久米の稚子が座しけむ三穗の石室は荒れにけるかも

三〇八　常磐なす石室は今も有りけれど住みける人ぞ常なかりける

三〇九　石室外に立てる松の木汝を見れば昔の人を相見る如し

門部王の東の市の樹を詠み給へる歌一首

三一〇　東の市の植木の木垂るまで逢はず久しみ宜べ戀ひにけり

桉作村主益人が豐前國より京に上る時作める歌一首

三一一　梓弓引き豐國の鏡山見ず久ならば戀しけむかも

式部卿藤原宇合卿に難波の堵を改造しめ給へる時詠める歌一首

三一二　昔こそ難波田舍と謂はれけめ今は京と都びにけり

土理宣令が歌一首

三一三　み吉野の瀧の白浪知らねども語りし繼げば古思ほゆ

波多朝臣少足が歌一首

三一四　小浪礒巨勢道なる能登湍河音の清けさ水激つ瀬毎に

暮春之月芳野離宮に幸せる時、中納言大伴卿の勅を奉はりて詠み給へる歌一首并短歌

三一五　み芳野の芳野の宮は、山故し貴くあらし、川故し清けくあらし、天地と長く久しく、萬代に變らずあらむ、行幸の宮

反歌

三一六　昔見し象の小河を今見れば彌清けく成りにけるかも

山部宿禰赤人が不盡山を望て詠める歌一首并短歌

三一七　天地の分れし時ゆ、神さびて高く貴き、駿河なる富士の高嶺を、天の原振放け見れば、渡る日の影も隱ろひ、照る月の光も見えず、白雲もい行き憚り、不時ぞ雪は降りける、語り繼ぎ言ひ繼ぎ行かむ、不盡の高嶺は

反歌

三一八　田兒の浦ゆ打出て見れば眞白くぞ不盡の高嶺に雪は降りける

不盡山を詠める歌一首并短歌

三一九　奈麻余美の甲斐の國、打縁する駿河の國と、こちごちの國の眞中ゆ、出で立てる不盡の高嶺は、天雲もい行き憚り、飛ぶ鳥も翔びも上らず、燃ゆる火を雪以ち消ち、落る雪を火以

ち消ちつゝ、言ひも兼ね名付けも知らに、靈しくも座す神かも、石花海と名づけてあるも、其山の包める海ぞ、富士川と人の渡るも、其山の水の激ぞ、日本の大和の國の、鎮とも座す神かも、寶とも成れる山かも、駿河なる不盡の高嶺は、見れど飽かぬかも

反歌

三二〇　不盡の嶺に降り置ける雪は六月の十五日に消ぬれば其夜降りけり

三二一　富士の嶺を高み恐み天雲もい行き憚り棚引くものを

右の一首、高橋連蟲麻呂の歌集中に出づ、類を以て此に載す、

山部宿禰赤人が伊豫の溫泉に至りて詠める歌一首幷短歌

三二二　皇神祖の神の命の、敷き座す國の盡、湯はしも多にあれども、島山の宜しき國と、凝々しかも伊豫の高嶺の、射狹庭の崗に立たして、歌思ひ辭思はしゝ、み湯の上の樹群を見れば、臣の木も生ひ繼ぎにけり、鳴く鳥の音も變らず、遠き代に神さび行かむ、行幸處

反歌

三二三　百磯城の大宮人の飽田津に船乘しけむ年の知らなく

神岳に登りて山部宿禰赤人が詠める歌一首幷短歌

三二四　三諸の神名備山に、五百枝刺し繁に生ひたる、栂の木の彌繼々に、玉葛絶ゆる事なく、在

りつゝも止まず通はむ、明日香の古き京師は、山高み河とほ白し、春の日は山し見が欲し、秋の夜は河し清けし、朝雲に鶴は亂れ、夕霧に蝦はさわぐ、見る毎に哭のみし泣かゆ、古思へば

反歌

三二五　明日香河川淀さらず立つ霧の思ひ過ぐべき戀にあらなくに

門部王の難波に在して漁火燭光を見て詠み給へる歌一首

三二六　見渡せば明石の浦に燒す火の秀にぞ出でぬる妹に戀ふらく

或娘子等裏める乾鰒を通觀僧に贈りて戲れに咒願を請ふ時、通觀が詠める歌一首

三二七　海若の沖に持ち行きて放つとも如何ぞ之が生還りなむ

太宰少貳小野老朝臣が歌一首

三二八　青丹吉寧樂の京師は咲く花の匂ふが如く今盛りなり

防人司佑大伴四繩が歌二首

三二九　安見知し我が大君の敷きませる國の中なる京師し思ほゆ

三三〇　藤浪の花は盛りになりにけり平城の京を思ほすや君

帥大伴卿の歌五首

三三一　吾が盛復變若めやも殆くに寧楽の都を見ずかなりなむ
三三二　わが命も常にあらぬか昔見し象の小河を行きて見むため
三三三　淺茅原委曲に物思へば故りにし郷し思ほゆるかも
三三四　忘草吾が紐に付く香具山の故りにし里を忘れぬがため
三三五　吾が行は久にはあらじ夢の回淵瀬とは成らずて淵にありこそ

沙彌滿誓が綿を詠める歌一首

三三六　白縫筑紫の綿は身に着けて未だは着ねど暖けく見ゆ

山上臣憶良が宴より罷る時の歌一首

三三七　憶良らは今は罷らむ子泣くらむ其も其母も吾を待つらむぞ

太宰帥大伴卿の酒を讃め給ふ歌十三首

三三八　驗なき物を思はずは一坏の濁れる酒を飲むべくあらし
三三九　酒の名を聖と負せし古の大き聖の言の宜しさ
三四〇　古の七の賢しき人等も欲りせし物は酒にしあらし
三四一　賢しみと物言はむよは酒飲みて醉哭するし益りたるらし
三四二　言はむ術爲む術知らに極りて貴き物は酒にしあらし

三四三　中々に人とあらずは酒壺に成りてしかも酒に染みなむ
三四四　あな醜賢しらをすと酒飲まぬ人を能く見ば猿にかも似む
三四五　價無き寶といふとも一坏の濁れる酒に豈益らめや
三四六　夜光る玉といふとも酒のみて情を遣るに豈如かめやも
三四七　世の中の遊の道に洽きは醉哭するにありぬべからし
三四八　今代にし樂しくあらば來む生には蟲にも吾はなりなむ
三四九　生るれば遂にも死ぬるものにあれば今生なる間は樂しくをあらな
三五〇　默然居りて賢しらするは酒飲みて醉泣するになほ如かずけり

沙彌滿誓が歌一首

三五一　世の中を何物に譬へむ旦開き榜ぎにし船の跡なき如し

若湯座王の歌一首

三五二　葦邊には鶴が音鳴きて湖風寒く吹くらむ津乎の埼はも

釋通觀が歌一首

三五三　み吉野の高城の山に白雲は行き憚りて棚引けり見ゆ

日置少老が歌一首

三五四　縄の浦に鹽焼く煙夕されば行過ぎ兼ねて山に棚引く

生石村主眞人が歌一首

三五五　大穴牟遅少名毘古那の座しけむ志都の石室は幾代經ぬらむ

上古麻呂が歌一首

三五六　今日もかも明日香の河の夕離らず蝦鳴く瀬の清けかるらむ

山部宿彌赤人が歌六首

三五七　縄の浦ゆ背向に見ゆる沖つ島榜回む舟は釣しすらしも

三五八　武庫の浦を榜回む小舟粟島を背向に見つゝ乏しき小舟

三五九　阿倍の島鵜の住む磯に寄する浪間なく此頃大和し思ほゆ

三六〇　潮干なば玉藻刈り籠め家の妹が濱曩乞はゞ何を示さむ

三六一　秋風の寒き朝明を佐農の岡越ゆらむ君に衣借さましを

三六二　鴨鳩居る磯回に生ふる名乗藻の名は告らしてよ親は知るとも

或本の歌に曰く

三六三　鴨鳩居る荒磯に生ふる名乗藻のよし名は告らせ親は知るとも

笠朝臣金村が鹽津山にて詠める歌二首

三六四　大夫の弓上振り起し射つる矢を後見む人は語り繼ぐがね

三六五　鹽津山打越え行けば我が乘れる馬ぞ躓く家戀ふらしも

角鹿の津にて船に乘れる時、笠朝臣金村が詠める歌一首幷短歌

三六六　越の海の角鹿の濱ゆ、大舟に眞楫貫下し、鯨魚取り海路に出でゝ、喘きつゝ我が榜ぎ行けば、大夫の手結が浦に、海未通女鹽焼く煙、草枕旅にしあれば、獨して見る驗無み、海神の手に卷かしたる、玉襷懸けて偲びつ、大和島根を

反歌

三六七　越の海の手結の浦を旅にして見れば乏しみ大和偲ぶつ

石上大夫が歌一首

三六八　大船に眞楫繁貫き大君の御命畏み磯廻するかも

和ふる歌一首

三六九　武士の臣の壯士は大君の任のまに〳〵聞くと云ふものぞ

右の作者いまだ審ならず、但笠朝臣金村の歌集中に出づ、

安倍廣庭卿の歌一首

三七〇　小雨降り棚曇る夜を潤れ濕づと戀ひつゝ居りき君待ちがてり

出雲守門部王の京を思ひ給ふ歌一首

三七一　飫宇の海の河原の千鳥汝が鳴けば吾が佐保河の念ほゆらくに

山部宿禰赤人が春日野に登りて詠める歌一首幷短歌

三七二　春日を春日の山の、高座の三笠の山に、朝離らず雲居棚引き、容鳥の間無く數鳴く、雲居なす心猶豫ひ、其鳥の片戀のみに、晝はも日の盡、夜はも夜の盡、立ちて居て思ひぞ吾が爲る、逢はぬ兒故に

反歌

三七三　高桉の三笠の山に鳴く鳥の止めば繼がるゝ戀も爲るかも

石上乙麻呂朝臣の歌一首

三七四　雨降らば蓋なむと思へる笠の山人になる蓋しめ霑れは漬づとも

湯原王の芳野にて詠み給へる歌一首

三七五　吉野なる夏實の河の川淀に鴨ぞ鳴くなる山かげにして

湯原王の宴席の歌二首

三七六　秋津羽の袖振る妹を玉匣奥に思ふを見給へ吾君

三七七　青山の嶺の白雲朝に日に常に見れども愛らし吾君

山部宿禰赤人が故太政大臣の藤原の家の山池を詠める歌一首

三七八　昔見し舊き堤は年深み池の渚に水草生ひにけり

大伴坂上郎女が祭神の歌一首幷短歌

三七九　久方の天の原より、生れ來し神の命、奥山の榊の枝に、白紙つく木綿とり付けて、齋瓮を忌ひ穿り据ゑ、竹玉を繁に貫き垂り、鹿猪じもの膝折り伏せ、手弱女の被衣取り懸け、斯くだにも吾は祈ひなむ、君に逢はぬかも

反歌

三八〇　木綿疊手に取持ちて斯くだにも吾は祈ひなむ君に逢はぬかも

筑紫娘子が行旅に贈れる歌一首（娘子、字を兒島と曰ふ）

三八一　家思ふと情進むな順風伺候り好くして出ませ荒き其路

筑波岳に登りて丹比眞人國人が詠める歌一首幷短歌

三八二　雞が鳴く東の國に、高山は多にあれども、二神の貴き山の、等立の見が欲し山と、神代より人の言ひ嗣ぎ、國見する筑波の山を、冬木成り時じく時と、見ずて行かば況して戀しみ、雪消する山路すらを、澁滯みぞ吾が來し

反歌

三八三　筑波嶺を外目のみ見つゝ有りかねて雪消の道を滯み來るかも

山部宿禰赤人が歌一首

三八四　吾が宿に韓藍蒔き生ほし枯れぬれど懲りずて又も蒔かむとぞ思ふ

仙柘枝の歌三首

三八五　霰降り吉志美が嶽を險しみと草取りかねて妹が手を取る

右の一首、或は云ふ、吉野人味稻の柘枝仙媛に與へし歌なりと、

三八六　此暮柘の小枝の流れ來ば魚梁は打たずて取らずかもあらむ

三八七　古に魚梁打つ人の無かりせば此處にもあらまし柘の枝はも

右の一首、若宮年魚麻呂の作、

羇旅歌一首并短歌

三八八　海若は靈しきものか、淡路島中に立て置きて、白浪を四國に回ほし、座待月明石の門ゆは、夕されば潮を滿たしめ、明けされば潮を干しむ、鹽騷の浪を恐み、淡路島磯隱り居て、何時しかも此夜の明けむと、侍ふに寢の寐がてねば、瀧の上の淺野の雉、明けぬとし立ち動むらし、いざ兒等敢べて榜ぎ出む、海上も靜けし

反歌

三八九　島傳ひ敏馬の埼を榜ぎ廻めば大和戀しく鶴多に鳴く

右の歌は若宮年魚麻呂之を誦せり、但未作者を審にせず、

譬喩歌

紀皇女の御歌一首

三九〇　輕の池の浦回廻ほる鴨すらも玉藻の上に獨り寢なくに

筑紫の觀世音寺造の別當沙彌滿誓が歌一首

三九一　鳥總立て足柄山に船木伐り樹に伐り行きつ可惜船材を

太宰大監大伴宿禰百代が梅の歌一首

三九二　烏珠の其夜の梅を手忘れて折らず來にけり思ひしものを

滿誓沙彌が月の歌一首

三九三　見えずとも誰戀ひざらめ山の端に猶豫ふ月を外に見てしか

金明軍が歌一首

三九四　標結ひて我が定めてし住吉の濱の小松は後も吾が松

笠女郎が大伴宿禰家持に贈れる歌三首

三九五 託馬野に生ふる紫草衣染め未だ着ずして色に出でにけり

三九六 陸奥の眞野の草原遠けども面影にして見ゆちふものを

三九七 奥山の磐本菅を根深めて結びし情忘れかねつも

藤原朝臣八束が梅の歌二首

三九八 妹が家に咲きたる梅の何時も何時も成りなむ時に事は定めむ

三九九 妹が家に咲きたる花の梅の花實にし成りなば兎も角もせむ

大伴宿禰駿河麻呂が梅の歌一首

四〇〇 梅の花咲きて散りぬと人は云へど吾が標結ひし枝ならめやも

大伴坂上郎女が親族と宴する日、吟へる歌一首

四〇一 山守の有りける不知に其山に標結ひ立てゝ結の辱しつ

大伴宿禰駿河麻呂が卽ち和ふる歌一首

四〇二 山守は蓋しありとも吾妹子が結ひけむ標を人解かめやも

大伴宿禰家持が同坂上の家の大嬢に贈れる歌一首

四〇三 朝に日に見まく欲しけき其玉を如何にしてかも手ゆ離れざらむ

娘子が佐伯宿禰赤麿に報ふる歌一首

四〇四 ちはやぶる神の社し無かりせば春日の野邊に粟蒔かましを

佐伯宿禰赤麿が更た贈れる歌一首

四〇五 春日野に粟蒔けりせば鹿待ちに繼ぎて行かましを社し有りとも

娘子が復報ふる歌一首

四〇六 吾は祭る神にはあらず大夫に屬きたる神ぞ好く祀るべき

大伴宿禰駿河麻呂が同じ坂上の家の二嬢を嫂ふ歌一首

四〇七 春霞春日の里の殖子水葱苗なりといひし枝はさしにけむ

大伴宿禰家持が同じ坂上の家の大嬢に贈れる歌一首

四〇八 石竹が其花にもが朝旦手に取持ちて戀ひぬ日なけむ

大伴宿禰駿河麻呂が同じ坂上の家の大嬢に贈れる歌一首

四〇九 一日には千重浪頻に思へども奈何ぞ其玉の手に卷き難き

大伴坂上郎女が橘の歌一首

四一〇 橘を宿に植ゑ生せ立ちて居て後に悔ゆとも驗あらめやも

大伴宿禰駿河麻呂が和ふる歌一首

四一一 吾妹子が宿の橘甚近く植ゑてし故に成らずは止まじ

市原王の歌一首

四三 頂に着続める玉は二つなし兎にも角にも君が隨意

某歌二首

四三六 人言の繁き此頃玉ならば手に卷き持ちて戀ひざらましを

四三七 妹も吾も清の河の河岸の妹が悔ゆべき心は持たじ

大網公人主が宴に吟へる歌一首

四三三 須磨の海人の鹽燒衣の藤衣間遠くしあれば未だ着穢れず

大伴宿禰家持が歌一首

四三四 足引の石根凝々しみ菅の根を引かば難みと標のみぞ結ふ

挽歌

上宮聖德皇子の竹原井に出遊せる時、龍田山に死れる人を見そなはして悲傷み詠みませる御歌一首

四三五 家にあらば妹が手纏かむ草枕旅に臥せる此旅人あはれ

大津皇子の被死え給へる時、磐余の池の陂にて流涕み詠みませる御歌一首

四三六 角障磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隱りなむ

河内王を豐前國鏡山に葬れる時、手持女王の詠み給へる歌三首

四三七 大君の親魂合へや豐國の鏡の山を宮と定むる

四三八 豐國の鏡の山の石戸立て隱りにけらし待てど來まさぬ

四三九 石戸破る手力もがも手弱き女にしあれば術の知らなく

石田王の卒せ給へる時、丹生王の詠み給へる歌一首并短歌

四四〇 菱竹の十緣る皇子、さ丹づらふ吾が大君は、隱國の泊瀬の山に、神さびて齋き坐すと、玉梓の人ぞ言ひつる、妖言か吾が聞きつる、狂言か我が聞きつるも、天地に悔しき事の、世の中の悔しき事は、天雲の遠隔の極、天地の至れる迄に、杖策きも衝かずも行きて、夕占問ひ石占以ちて、吾宿に御室を立てゝ、枕邊に齋忌瓮を居ゑ、竹玉を繁に貫き垂り、木綿襷肘に懸けて、天なる佐佐羅の小野の齋菅手に取持ちて、久方の天の川原に、出で立ち て潔身ぎてましを、高山の巖の上に、坐せつるかも

反歌

四四一 妖言の狂言とかも高山の巖の上に君が臥せる

四四二 石の上布留の山なる杉村の思ひ過ぐべき君にあらなくに

同じ石田王の卒せ給へる時、山前王の哀傷しみ詠みませる歌一首

四三　角障經磐余の道を、朝離らず行きけむ人の、思ひつゝ通ひけまくは、霍公鳥來鳴く五月は、菖蒲花橘を、玉に貫き髪に爲むと、九月の時雨の時は、黄葉を折り挿頭さむと、延ふ葛の彌遠永く、萬世に絶えじと思ひて、通ひけむ君を明日よは、外にかも見む

或本の反歌二首

四四　隱口の泊瀬少女が手に卷ける玉は亂れて有りといはずやも

四五　河風の寒き長谷を歎きつゝ君が歩行くに似る人も逢へや

柿本朝臣人麻呂が香具山にて屍を見て悲慟み詠める歌一首

四六　草枕旅の宿に誰が夫か國忘れたる家待たなくに

田口廣麿が死れる時、刑部垂麻呂が詠める歌一首

四七　百不足八十の隈路に手向せば過ぎにし人に蓋し逢はむかも

土形娘子を泊瀬山に火葬れる時、柿本朝臣人麻呂が詠める歌一首

四八　隱口の泊瀬の山の山の際に猶豫ふ雲は妹にかもあらむ

溺死ねる出雲娘子を吉野に火葬れる時、柿本朝臣人麿が詠める歌二首

四九　山の際ゆ出雲の兒等は霧なれや吉野の山の嶺に棚引く

四五〇　八雲刺す出雲の子等が黑髪は吉野の川の沖に浮さふ

葛飾の眞間娘子が墓を過れる時、山部宿禰赤人が詠める歌一首并短歌

四五一　古に有りけむ人の、倭文幡の帶解き交へて、廬屋立て妻問ひしけむ、葛飾の眞間の手兒名が、奥津城を此處とは聞けど、眞木の葉や茂みたるらむ、松が根や遠く久しき、言のみも名のみも吾は、忘らえなくに

反歌

四五二　吾も見つ人にも告げむ葛飾の眞間の手兒名が奥津城處

四五三　葛飾の眞間の入江に打靡く玉藻苅りけむ手兒名し思ほゆ

和銅四年辛亥、三穗の浦を過ぐる時、(姓名)が詠める歌二首

四五四　風速の美保の浦廻の白躑躅見れども不怜し亡き人思へば

四五五　勇威し久米の若子がい觸りけむ磯の草根の枯れまく惜しも

神龜五年戊辰、太宰帥大伴卿の故人を思戀び給ふ歌三首

四五八　愛しき人の纏きてし敷妙の吾が手枕を纏く人あらめや

右の一首は別れ去りて數旬を經て作れる歌、

四五九　還るべき時は來にけり京師にて誰が袂をか吾が枕かむ

四四〇　京師なる荒れたる家に獨り宿ば旅に益りて辛苦しかるべし

右の二首は京に向ふ時に臨み近づきて作れる歌、

神龜六年己巳左大臣長屋王の賜死え給へる後、倉橋部女王の詠み給へる歌一首

四四一　大君の命恐み大荒城の時にはあらねど雲隱ります

膳部王を悲傷める歌一首

四四二　世の中は空しきものとあらむとぞ此照る月は滿ち闕けしける

右の一首は作者未だ詳ならず

天平元年己巳、攝津國班田史生丈部龍麻呂が自經死きし時、判官大伴宿禰三中が詠める歌一首幷短歌

四四三　天雲の向伏す國の、武士と云はえし人は、皇祖の神の御門に、外重に立ち候ひ、內重に仕へ奉り、玉葛彌遠長く、祖の名も繼ぎ行くものと、母父に妻に子等に、語らひて立ちにし日より、垂乳根の母の命は、齋忌瓮を前に坐ゑ置きて、一手には木綿取り持ち、一手には和細布奉り、平けく眞幸く座せと、天地の神祇に乞ひ禱み、如何にあらむ歳月日にか、茵花香へる君が、鳥鳥のなづさひ來むと、立ちて居て、待ちけむ人は、大君の命恐み、押光る難波の國に、荒玉の年經るまでに、白妙の衣手干さず、朝夕に在りつる君は、何方に思

ひ座せか、空蟬の惜しき此世を、露霜の置きて往にけむ、時ならずして

反歌

四四四　昨日こそ君は在りしか思はぬに濱松の上の雲に棚引く

四四五　何時しかと待つらむ妹に玉梓の言だに告げず去にし君かも

天平二年庚午冬十二月、太宰帥大伴卿の京に向きて上道する時に詠み給へる歌五首

四四六　吾妹子が見し鞆の浦の室の樹は常世にあれど見し人ぞ亡き

四四七　鞆の浦の磯の室の木見む毎に相見し妹は忘らえめやも

四四八　磯の上に根蔓ふ室の木見し人を如何なりと問はゞ語り告げむか

右の三首は鞆浦を過ぐる日よめる歌、

四四九　妹と來し敏馬の埼を歸途に獨りし見れば涕催しも

四五〇　往時には二人吾が見し此埼を獨り過ぐれば情悲しも

右の二首は敏馬埼を過ぐる日よめる歌、

故郷の家に還り入りて卽ち詠み給へる歌三首

四五一　人もなき空しき家は草枕旅に勝りて辛苦しかりけり

四五二　妹として二人作りし我が山齋は木高く繁く成りにけるかも

四五三　吾妹子が植ゑし梅の樹見る毎に情咽せつゝ涙し流る

天平三年辛未秋七月、大納言大伴卿の薨せ給へる時の歌六首

四五四　愛しきやし榮えし君の座しせば昨日も今日も吾を召さましを

四五五　斯くのみに有りけるものを芽子が花咲きてありやと問ひし君はも

四五六　君に戀ひ最も術無み蘆鶴の哭のみし泣かゆ朝夕にして

四五七　遠長く仕へむものと思へりし君し座さねば心神もなし

四五八　若き子の匍匐徘徊り朝夕に哭のみぞ吾が泣く君無しにして

四五九　右の五首は資人金明軍が犬馬の慕心に勝へず感緒を申べて詠める歌、

見れど飽かず座しし君が黄葉の移りい去けば悲しくもあるか

右の一首は内禮正縣犬養宿禰人上に勑ちて卿の病を檢護せしむ、醫藥驗なく逝く水留らず、斯に因りて悲慟みて卽ち此歌を詠めり、

七年乙亥、大伴坂上郎女が尼の理願の死去れるを悲嘆み詠める歌一首幷短歌

四六〇　栲角の新羅の國ゆ、人言を善しと聞かして、問ひ放くる親族兄弟、無き國に渡り來まして、大君の敷き座す國に、内日指す京繁盛に、里家は多にあれども、何方に思ひけめかも、連もなき佐保の山邊に、哭く兒なす慕ひ來まして、布細の家をも造り、荒玉の年の緒長く、

住ひつゝ座しゝものを、生るれば死ぬちふ事に、免ろえぬものにしあれば、憑めりし人の盡、草枕旅なる間に、佐保河を朝川渡り、春日野を背面に見つゝ、足引の山邊を指して、晩闇と隱りましぬれ、言はむ術爲む術知らに、徘徊り唯獨りして、白妙の衣手干さず、嘆きつゝ吾が泣く涙、有間山雲居棚引き、雨に降りきや

反歌

四六一　留め得ぬ命にしあれば敷妙の家ゆは出でゝ雲隱りにき

右、新羅の國の尼、名を理願と曰へり、遠く王德に感じて聖朝に歸化せり、時に大納言大將軍大伴卿の家に寄住し既に數紀を經たり、ここに天平七年乙亥を以て忽に運病に沈み、はやく泉界に赴く、ここに大家石川命婦、餌藥の事に依りて有間溫泉に往きて此喪に會はず、但郎女獨留りて屍柩を葬り送ること既に訖りぬ、仍りて此歌を作りて溫泉に贈り入る、

十一年己卯夏六月、大伴宿禰家持が亡妾を悲傷み詠める歌一首

四六二　今よりは秋風寒く吹きなむを如何でか獨り長き夜を寢む

弟大伴宿禰書持が卽ち和ふる歌一首

四六三　長き夜を獨りや寢むと君が言へば過ぎにし人の思ほゆらくに

又家持が砌上の瞿麥の花を見て詠める歌一首

四六四　秋來らば見つゝ思べと妹が植ゑし宿の石竹咲きにけるかも
移朔りて後、秋風を悲嘆みて家持が詠める歌一首
四六五　虛蟬の代は常なしと知るものを秋風さむく思びつるかも
又家持が詠める歌一首幷短歌
四六六　我が宿に花ぞ咲きたる、そを見れど情も行かず、愛しきやし妹が有りせば、水鴨なす二人並び居、手折りても見せましものを、打蟬の借れる身なれば、露霜の消ぬるが如く、足引の山路を指して、入日なす隱りにしかば、夫思ふに胸こそ痛め、言ひもかね名付けも知らに、跡もなき世の中なれば、せむ術もなし

反歌

四六七　時はしも何時もあらむを心哀くい去く吾妹か若き子を置て
四六八　出で行かす道知らませば豫め妹を留めむ關も置かましを
四六九　妹が見し宿に花咲く時は經ぬ吾が泣く涙未だ干なくに
悲緒息まずて更詠める歌五首
四七〇　斯くのみにありけるものを妹も我も千歲の如く憑みたりけり
四七一　家離り座す吾妹を停みかね山隱りつれ情神もなし

四七二　世の中し常斯くのみとかつ知れど痛き情は忍びかねつも
四七三　佐保山に棚引く霞見る毎に妹を思ひ出泣かぬ日は無し
四七四　昔こそ外にも見しか吾妹子が墓と思へば愛しき佐保山
十六年甲申春二月、守積皇子の薨ぎ給へる時、內舍人大伴宿禰家持が詠める歌六首
四七五　掛けまくも奇に恐し、言はまくも齋忌しきかも、我が大君皇子の命、萬代に食し賜はまし、大日本久邇の京は、打靡く春さりぬれば、山邊には花咲きをゝり、河瀨には年魚子さ走り、彌日けに榮ゆる時に、妖言の狂言とかも、白妙に舍人裝ひて、和豆香山御輿立たして、久方の天知らしぬれ、展轉ひ濡沾ち泣けども、せむ術もなし

反歌

四七六　我が大君天知らさむと思はねば凡にぞ見ける和豆香山
四七七　足引の山さへ光り咲く花の散りぬる如き我大君かも
右の三首は二月三日によめる歌、
四七八　掛けまくも奇に恐し、吾が大君皇子の命、武士の八十伴緒を、召し集へあどもひ給ひ、朝獵に鹿猪踐み起し、夕獵に鶉雉履み立て、大御馬の口抑へ駐め、御心を見し明らめし、活道山木立の繁に、咲く花も變ろひにけり、世の中は斯くのみならし、大夫の心振起し、劔刀腰

に取り佩き、梓弓靫取り負ひて、天地と彌遠永に、萬代に斯くしもがもと、憑めりし皇子の御門の、五月蠅なす驟騒ぐ舍人は、白妙に衣服取り着て、常なりし咲ひ擧動、彌日けに變らふ見れば悲しきろかも

反歌

四七九 愛しきかも皇子の命の在り通ひ見しゝ活道の路は荒れにけり

四八〇 大伴の名に負ふ靫帶びて萬代に憑みし心何所か寄せむ

右の三首は三月廿四日に詠める歌

死せたる妻を悲傷み、高橋朝臣が詠める歌一首并短歌

四八一 白妙の袖指交へて、靡き寢し吾が黑髮の、眞白髮に變らむ極、新世に共にあらむと、玉緒の絶えじい妹と、結びてし言は果さず、思へりし心は遂げず、白妙の袂を別れ、柔びにし家ゆも出でて、綠兒の泣くをも置きて、朝霧の髣髴になりつゝ、山城の相樂山の、山の間ゆ往過ぎぬれば、言はむ術爲む術不知に、吾妹子とさ寢し妻屋に、朝庭に出で立ち偲び、夕には入り居嘆かひ、腋挾む兒の泣く毎に、男じもの負ひみ抱きみ、朝鳥の音のみ泣きつつ、戀ふれども効を無みと、言問はぬものにはあれど、吾妹子が入りにし山を、所緣とぞ思ふ

反歌

四八二 虛蟬の世の事なれば外に見し山をや今は所緣と思はむ

四八三 朝鳥の音のみし泣かむ吾妹子に今又更に逢ふ由を無み

右の三首は七月廿日、高橋朝臣のよめる歌なり、

卷三終

卷四

相聞

難波天皇（仁德）の妹の大和に在す皇兄に奉れる御歌一首

四八四　一日こそ人をも待ちし長き日を斯くのみ待てば有りがてなくも

岳本天皇（齊明か）御製歌一首幷短歌

四八五　神代より生れ繼ぎ來れば、人多に國には滿ちて、味凶群の騷ぎは行けど、吾が戀ふる君に
しあらねば、晝は日の暮るゝまで、夜は夜の明くる極、思ひつゝ寢ねがてにのみ、明しつ
らくも、長きこの夜を

反歌

四八六　山の端にあぢ群騷き行くなれど吾は不樂しゑ君にしあらねば

四八七　近江路の鳥籠の山なる不知哉川來經の此頃は戀ひつゝもあらむ

額田王の近江天皇（天智）を思ひ奉りて詠み給へる歌一首

四八八　君待つと吾が戀ひ居れば我が宿の簾動かし秋の風吹く

鏡女王の詠み給へる歌一首

四八九　風をだに戀ふるは乏し風をだに來むとし待たば何か嘆かむ

吹黃刀自が歌二首

四九〇　眞野の浦の淀の繼橋情ゆも思へや妹が夢にし見ゆる

四九一　河上の伊都藻の花の何時も何時も來ませ吾が背子時じけめやも

田部忌寸櫟子が太宰に任けらるゝ時の歌四首

四九二　衣手に取りとどこほり泣く兒にも益れる吾を置きて如何にせむ

四九三　置きて行かば妹戀ひむかも敷細の黑髮敷きて長き此夜を

四九四　吾妹子を相知らしめし人をこそ戀の益ればし恨めしみ念へ

四九五　朝日影匂へる山に照る月の飽かざる君を山越に置きて

柿本朝臣人麻呂が歌四首

四九六　三熊野の浦の濱木綿百重なす心は念へど直に逢はぬかも

四九七　古に有りけむ人も吾が如か妹に戀ひつゝ寢ねがてにけむ

四九八　今のみの行事にもあらず古の人ぞ益りて哭にさへ泣きし

四九九　百重にも來頻かぬかもと思へかも君が使の見れど飽かざらむ

舍人千年

田部忌寸櫟子

碁檀越が伊勢國に往く時、留まれる妻が詠める歌一首

五〇〇　神風の伊勢の濱荻折り伏せて旅寢やすらむ荒き濱邊に

柿本朝臣人麻呂が歌三首

五〇一　未通女等が袖振山の瑞籬の久しき時ゆ思ひき吾は

五〇二　夏野行く牡鹿の角の束の間も妹が心を忘れて念へや

五〇三　珠衣のさゐ〳〵鎭み家の妹に物言はず來にて思ひかねつも

柿本朝臣人麻呂が妻の歌一首

五〇四　君が家に吾が住坂の家路をも吾は忘らじ命死なずは

安部女郎が歌二首

五〇五　今更に何をか思はむ打靡き情は君に緣りにしものを

五〇六　吾が背子は物な思ひそ事しあらば火にも水にも吾無けなくに

駿河采女が歌一首

五〇七　敷細の枕ゆ泳る涙にぞ浮寢をしける戀の繁きに

三方沙彌が歌一首

五〇八　衣手の別る今夜ゆ妹も吾も痛く戀ひむな逢ふよしを無み

丹比眞人笠麻呂が筑紫國に下る時詠める歌一首幷短歌

五〇九　臣の女の匣に齋く、鏡なす見津の濱邊に、さにづらふ紐解き離けず、吾妹子に戀ひつゝ居れば、明闇の朝霧隱り、鳴く鶴の哭のみし泣かゆ、吾が戀ふる千重の一重も、慰むる情もあれやと、家の邊吾が立ち見れば、靑旗の葛木山に、棚引ける白雲隱り、天放る夷の國邊に、直向ふ淡路を過ぎ、粟島を背向に見つゝ、朝風に水手の聲呼び、夕風に楫の音しつゝ、浪の上をい行き割くみ、岩の間をい行き廻り、稻日都麻浦回を過ぎて、鳥じもの浮ひ行けば、家の島荒磯の上に、打靡き繁に生ひたる、莫告藻の何どかも妹に、告らず來にけむ

反歌

五一〇　白妙の袖解き更へて還り來む月日を數みて往きて來ましを

伊勢國に幸せる時、當麻麻呂大夫が妻の詠める歌一首

五一一　吾が妹子は何處行くらむ沖つ藻の隱の山を今月か越ゆらむ

草壤が歌一首

五一二　秋の田の穗田の刈時かか緣り合はゞそこもか人の吾を言なさむ

志貴皇子の御歌一首

五一三　大原のこの市柴の何時しかと吾が念ふ妹に今夜逢へかも

阿部女郎が歌一首

五一四　吾が背子が著せる衣の針目落ちず入りにけらしな我が情さへ

中臣朝臣東人が阿部女郎に贈れる歌一首

五一五　獨り寢て絶えにし紐を思々しみと爲む術知らに哭のみしぞ泣く

阿部女郎が答ふる歌一首

五一六　吾が持たる三線に搓れる絲もちて附けてましもの今ぞ悔しき

大納言兼大將軍大伴卿の歌一首

五一七　神樹にも手は觸る云ふをうつたへに人妻と言へば觸れぬものかも

石川郎女が歌一首

五一八　春日野の山邊の道を隨身なく通ひし君が見えぬ頃かも

大伴女郎が歌一首

五一九　雨障常爲す君は久方の昨夜の雨に懲りにけむかも

後人の追ひて和ふる歌一首

五二〇　久堅の雨も落らぬか雨障君に副ひて此日暮らさむ

藤原宇合大夫が遷任されて京に上る時、常陸娘子が贈れる歌一首

五二一　庭に立ち麻を刈り干し布慕ぶ東女を忘れ給ふな

京職大夫藤原大夫が大伴坂上郎女に贈れる歌三首

五二二　少女等が玉櫛笥なる玉櫛の魂消むも妹に逢はずあれば

五二三　好く渡る人は年にも有り云ふを何時の程ぞも吾が戀ひにける

五二四　烝被柔が下に臥せれども妹とし宿ねば肌し寒しも

大伴坂上郎女が和ふる歌四首

五二五　佐保河の小石踐み渡り夜干玉の黑馬の來夜は年にもあらぬか

五二六　千鳥鳴く佐保の河瀨の小浪止む時もなし吾が戀ふらくは

五二七　來むといふも來ぬ時あるを來じと云ふを來むとは待たし來じと云ふものを

五二八　千鳥鳴く佐保の河門の瀨を廣み打橋渡す汝が來と念へば

右、郎女は、佐保大納言卿の女なり、初一品穂槇皇子に嫁し寵せらるること儔なし、皇子薨ぜし後、藤原麻呂大夫この郎女を嫂ふ、郎女坂上の里に家す、仍りて族氏坂上郎女と號け曰へり、

又大伴坂上郎女が歌一首

五二九　佐保河の岸の高處の柴な刈りそね在りつゝも春し來らば立隱るがね

天皇の海上女王に賜へる御歌一首

五三〇　赤駒の越ゆる馬柵の標結ひし妹が情は疑もなし

右今案ずるに、此歌は擬古の作なり、但時の當れるを以て、便ち此歌を賜へるか、

海上女王の和へ奉る歌一首

五三一　梓弓爪引く夜音の遠音にも君が御言を聞かくし好しも

大伴宿奈麻呂宿禰が歌二首

五三二　打日指す宮に行く兒を眞悲しみ留むは苦し遣るは術なし

五三三　難波潟潮干の浪凝飽くまでに人の見む兒を吾し乏しも

安貴王の歌一首并短歌

五三四　遠嬬の此處に在らねば、玉桙の道を遠み、思ふ空安からなくに、嘆く空安からぬものを、御空行く雲にもがも、高飛ぶ鳥にもがも、明日往きて妹に言問ひ、吾が爲に妹も事無く、妹が爲め吾も事無く、今も見し如副ひてもがも

反歌

五三五　敷細の手枕纏かず間置きて年ぞ經にける逢はなく念へば

右安貴王、因幡八上采女を娶りて、係念極めて甚しく、愛情尤盛なり、時に勅して不敬の罪に斷じ、本郷に退却せしむ、ここに王の意、悒怛して聊此歌を作れり、

門部王の戀の歌一首

五三六　飫宇の海の潮干の潟の片念に思ひや行かむ道の長道を

右、門部王、出雲守に任ぜられし時、部内の娘子を娶れり、未幾時ならずして、既に往來を絶つ、累月の後更に愛づる心を起す、仍りて此歌を作りて娘子に贈り致す、

高田女王の今城王に贈り給へる歌六首

五三七　言清く甚もな言ひそ一日だに君いし無くば忍び敢へぬもの

五三八　他辭を繁み言痛み逢はざりき心ある如な思ひ吾が背

五三九　吾背子し遂げむと云はゞ人言は繁くありとも出でゝ逢はましを

五四〇　吾が背子に復は逢はじかと思へばか今朝の別れの術なかりつる

五四一　現世には人言繁し來む世にも逢はむ吾が背子今ならずとも

五四二　常止まず通ひし君が使來ず今は逢はじと猶豫ひぬらし

龜元年甲子冬十月、紀伊國に幸せる時、從駕の人に贈らむ爲め娘子に訛へらえて笠朝臣金村が詠める歌一首并短歌

五四三　大君の行幸の隨意に、物部の八十伴緒と、出で行きし愛し夫は、天飛ぶや輕の路より、玉襷畝火を見つゝ、麻裳よし紀路に入りたち、眞土山越ゆらむ君は、黄葉の散り飛ぶ見つゝ、

親しけく吾をば思はず、草枕旅を宜しと、思ひつゝ君はあらむと、推察にはかつは知れども、乍併に默然も得あらねば、吾が背子が行のまに〳〵、追はむとは千遍思へども、手弱女の吾が身にしあれば、道守の問はむ答を、言ひ遣らむ術を不知にと、立ちて躓く

反歌

五四四　後れ居て戀ひつゝあらずは紀伊の國の妹背の山にあらましものを

五四五　吾が背子が跡履み求め追ひ行かば紀伊の關守い留めなむかも

二年乙丑春三月、三香原の離宮にいでませる時、娘子を得て、笠朝臣金村が詠める歌一首并短歌

五四六　三香の原旅の宿に、玉桙の道の行合に、天雲の外のみ見つゝ、言問はむ緣の無ければ、情のみ咽せつゝあるに、天地の神祇事依せて、敷細の衣手易へて、自妻と憑める今夜、秋の夜の百夜の長く、有りこせぬかも

反歌

五四七　天雲の外に見しより吾妹子に心も身さへ緣りにしものを

五四八　今夜の早く明けなば術を無み秋の百夜を願ひつるかも

五年戊辰、大宰少貳石川足人朝臣が京に遷任るゝ時、筑前國蘆城の驛家に餞する歌三首

五四九　天地の神も助けよ草枕旅行く君が家に至るまで

五五〇　大船の思ひ憑みし君が去なば吾は戀ひむな直に逢ふまでに

五五一　大和路の島の浦回に寄する浪間も無けむ吾が戀ひまくは

右の三首は作者未詳

大伴宿禰三依が歌一首

五五二　我が君は汝をば死ねと思へかも逢ふ夜逢はぬ夜二つ經行くらむ

丹生女王の太宰帥大伴卿に贈り給へる歌二首

五五三　天雲の遠隔の極み遠けども情し行けば戀ふるものかも

五五四　古りにし人の賜せる吉備の酒病めば術なし貫簀賜らむ

太宰帥大伴卿の大貳丹比縣守卿の民部卿に遷任るゝに贈り給へる歌一首

五五五　君が爲め釀みし待酒安野に獨りや飲まむ友無しにして

賀茂女王の大伴宿禰三依に贈り給へる歌一首

五五六　筑紫船未も來ねば豫め荒ぶる君を見むが悲しさ

土師宿禰水通が筑紫より京に上る海路にて詠める歌二首

五五七　大船を榜の進みに岸に觸り覆らば覆れ妹に依りてば

五五八　千磐破る神の社に我が掛けし幣は賜らむ妹に逢はなくに

太宰大監大伴宿禰百代が戀の歌四首

五五九　事も無く生れ來しものを老次に斯かる戀にも吾は遇へるかも

五六〇　戀ひ死なむ後は何せむ生ける日の爲めこそ妹を見まく欲りすれ

五六一　思はぬを思ふと云はゞ大野なる三笠の森の神し知らさむ

五六二　暇なく人の眉根を徒に搔かしめつゝも逢はぬ妹かも

大伴坂上郎女が歌二首

五六三　黑髮に白髮交り老ゆまでに斯かる戀には未だ遇はなくに

五六四　山菅の實成らぬ事を吾に依せ言はれし君は誰とか寢らむ

賀茂女王の歌一首

五六五　大伴の見津とは云はじあかねさし照れる月夜に直に逢へりとも

太宰大監大伴宿禰百代等が驛使に贈れる歌二首

五六六　草枕旅行く君を愛しみ副ひてぞ來し四鹿の濱邊を

右の一首は大監大伴宿禰百代

五六七　周防なる磐國山を越えむ日は手向好くせよ荒き其道

右の一首は少典山口忌寸若麻呂

以前天平二年庚午夏六月、帥大伴卿忽ち瘡を脚に生じ、枕席に疾苦す、此に因りて驛を馳せて上奏し、望むらくは庶弟稻公、姪胡麻呂を請ひて遺言を語らまく欲りすといへれば、右兵庫助大伴宿禰稻公、治部少丞大伴宿禰胡麻呂兩人に勅して、驛を給ひ發遣し、卿の病を看しむ、而して數旬をへて、幸に平復するを得たり、時に稻公等病の旣に療えたるを以て、府を發して京に上る、是に於て大監大伴宿禰百代、少典山口忌寸若麻呂及び卿の男家持等、驛使を相送りて、共に夷守の驛家に到り、聊飲みて別を悲しみ、乃ち此歌を作る、

大宰帥大伴卿の大納言に任され京に入らむとする時、府官人等、卿を筑前國蘆城の驛家に餞する歌四首

五六八　三埼廻の荒磯に寄する五百重波立ちても居ても我が念へる君

右の一首は筑前掾門部連石足

五六九　宮人の衣染む云ふ紫草の情に染みて念ほゆるかも

五七〇　大和邊に君が立つ日の近づけば野に立つ鹿も響みてぞ鳴く

右の二首は大典麻田連陽春

五七一　月夜好し河音清けしいざ此處に行くも行かぬも遊びて歸かむ

右の一首は防人佑大伴四綱

太宰帥大伴卿の京に上り給へる後、沙彌滿誓が卿に贈れる歌二首

五七二 眞十鏡見飽かぬ君に後れてや旦夕に不樂びつゝ居らむ

五七三 野干玉の黑髮變り白髮けても痛き戀には遇ふ時ありけり

大納言大伴卿の和へ給へる歌二首

五七四 此處にありて筑紫か何處白雲の棚引く山の方にしあるらし

五七五 草香江の入江に求食る蘆鶴の痛たづゝし友無しにして

大宰帥大伴卿の京に上り給ひし後、筑紫守葛井連大成が悲嘆きて詠める歌一首

五七六 今よりは城の山路は不樂しけむ吾が通はむと思ひしものを

大納言大伴卿の新しき袍を攝津大夫高安王に贈り給へる歌一首

五七七 我が衣人になゆ着せそ網引する難波壯士の手には觸れゝど

大伴宿禰三依が悲別の歌一首

五七八 天地と共に久しく住はむと思ひてありし家の庭はも

金明軍が大伴宿禰家持に與れる歌二首

五七九 見奉りて未だ時だに更らねば年月の如思ほゆる君

五八〇 足引の山に生ひたる菅の根の懃見まく欲しき君かも

大伴坂上家の大娘が大伴宿禰家持に報へ贈れる歌四首

五八一 生きてあらば見まくも不知に何しかも死なむよ妹と夢に見えつる

五八二 丈夫も斯く戀ひけるを手弱女の戀ふる情に比へらめやも

五八三 月草の變ひ易く思へかも我が思ふ人の事も告げ來ぬ

五八四 春日山朝立つ雲の居ぬ日無く見まくの欲しき君にもあるかも

大伴坂上郎女が歌一首

五八五 出でゝ去なむ時しはあらむを殊更に妻戀ひしつゝ立ちて去ぬべしや

大伴宿禰稻公が田村大嬢に贈れる歌一首

五八六 相見ずは戀ひざらましを妹を見てもとな斯くのみ戀ひば如何にせむ

笠女郎が大伴宿禰家持に贈れる歌二十四首

五八七 吾が形見見つゝ偲ばせ新玉の年の緒長く吾も偲ばむ

五八八 白鳥の飛羽山松の待ちつゝぞ吾が戀ひ渡る此月頃を

五八九 衣手を折廻む里にある吾を知らずぞ人は待てど來ずける

五九〇 荒玉の年の經ぬれば今しはと勤よ吾が背子吾が名告らすな

五九一 吾が念を人に知らせや玉匣開き明けつと夢にし見ゆる

五九二　闇の夜に鳴くなる鶴の外のみに聞きつゝかあらむ逢ふとはなしに
五九三　君に戀ひ痛も術なみ楢山の小松が下に立ち嘆くかも
五九四　吾が宿の夕陰草の白露の消ぬがにもとな思ほゆるかも
五九五　吾が命の全けむ限忘れめやいや日にけには思ひ益すとも
五九六　八百日行く濱の沙も吾が戀に豈益らじか沖つ島守
五九七　宇都蟬の人目を繁み石走の間近き君に戀ひ渡るかも
五九八　戀にもぞ人は死する水無瀬河下ゆ吾痩す月に日にけに
五九九　朝霧の欝に相見し人故に命死ぬべく戀ひ渡るかも
六〇〇　伊勢の海の磯も轟に寄する浪貴き人に戀ひ渡るかも
六〇一　情ゆも吾は念はざりき山河も隔たらなくに斯く戀ひむとは
六〇二　暮來れば物念益る見し人の言問ふ姿面影にして
六〇三　念ふにし死するものにあらませば千遍ぞ吾は死に還らまし
六〇四　劔太刀身に取り副ふと夢に見つ何の前表ぞも君に逢はむ爲め
六〇五　天地の神し理無くばこそ吾が念ふ君に逢はず死せめ
六〇六　吾も念ふ人もな忘れ多奈和に浦吹く風の止む時なかれ

六〇七　人皆を寢よとの鐘は打つなれど君をし念へば寐ねがてぬかも
六〇八　相念はぬ人を思ふは大寺の餓鬼の後に額づく如し
六〇九　情ゆも我は念はざりき又更に吾が故郷に還り來むとは
六一〇　近くあれば見ねどもあるを彌遠く君が坐さば有りがてましも

右の二首は相別れて後更來贈れるなり

大伴宿禰家持が和ふる歌二首

六一一　今更に妹に逢はめやと念へかも許多吾が胸欝悒しからむ
六一二　中々に默もあらましを何すとか相見始めけむ遂げざらなくに

山口女王の大伴宿禰家持に贈り給へる歌五首

六一三　物思ふと人に見えじと愁に常に思へど有りぞかねつる
六一四　相念はぬ人をやもとな白妙の袖漬づまでに哭のみし泣かも
六一五　吾が背子は相念はずとも敷細の君が枕は夢に見えこそ
六一六　劔太刀名の惜しけくも吾は無し君に逢はずて年の經ぬれば
六一七　蘆邊より滿ち來る潮の彌益しに念へか君が忘れかねつる

大神女郎が大伴宿禰家持に贈れる歌一首

六一八　さ夜中に友喚ぶ千鳥物念ふと侘び居る時に鳴きつゝもとな

大伴坂上郎女が怨恨の歌一首幷短歌

六一九　押照る難波の菅の、懇切に君が聞して、年深く長くし云へば、眞十鏡磨ぎし情を、縱して
し其日の極、浪の共靡く玉藻の、兎に角に意は持たず、大船の憑める時に、千早振る神や
離けゝむ、空蟬の人か禁ふらむ、通はしゝ君も來ませず、玉梓の使も見えず、成りぬれば
痛もすべなみ、夜干玉の夜は終夜に、赤羅引く日も暮るゝまで、嘆けども效驗を無み、念
へども手段を不知に、手弱女と言はくも顯著く、手童の哭のみ泣きつゝ、徘徊り君が使を、
待ちやかねてむ

反歌

六二〇　始より長く謂ひつゝ恃めずは斯かる思ひに遇はましものか

西海道節度使判官佐伯宿禰東人の妻が夫君に贈れる歌一首

六二一　間無く戀ふれにかあらむ草枕旅なる君が夢にし見ゆる

佐伯宿禰東人が和ふる歌一首

六二二　草枕旅に久しくなれぬれば汝をこそ念へ莫戀ひそ吾妹

池邊王の宴に誦ひ給へる歌一首

六二三　松の葉に月は移りぬ黃葉の過ぎしや君が逢はぬ夜多み

天皇（聖武）の酒人女王を思ばして詠みませる御歌一首

六二四　道に逢ひて咲しし故に降る雪の消なば消ぬ程に戀思ふ吾妹

高安王の裏める鮒を娘子に贈り給へる歌一首

六二五　奥方行き邊に行き今や妹が爲め吾が漁れる藻臥束鮒

入代女王の天皇に獻らせる歌一首

六二六　君に因り言の繁きを古郷の明日香の河に潔身しに行く

佐伯宿禰赤麻呂が娘子に贈れる歌一首

六二七　初花の散るべきものを人言の繁きに因りて止息む頃かも

娘子が佐伯宿禰赤麻呂に報贈ふる歌一首

六二七　吾が袂纏かむと念はむ大夫は涙に沈み白髮生ひにけり

佐伯宿禰赤麻呂が和ふる歌一首

六二八　白髮生ふる事は念はじ涙をば兎にも角にも求めて行かむ

大伴四綱が宴席の歌一首

六二九　何すとか使の來る君をこそ兎にも角にも待ちがてにすれ

湯原王の娘子に贈へる歌二首

六三一 愛想なきものかも人は然かばかり遠き家路を還せし念へば

六三二 目には見て手には取らえぬ月内の楓の如き妹を奈何にせむ

娘子が報贈ふる歌二首

六三三 幾許思ひけめかも敷妙の枕片去る夢に見え來し

六三四 家にして見れど飽かぬを草枕旅にも夫の有るが乏しさ

湯原王の亦贈へる歌二首

六三五 草枕旅には嬬は居たらめど匣の内の珠とこそ念へ

六三六 我が衣形見に奉る布細の枕離らさず纏きてさ宿ませ

娘子が復報贈ふる歌一首

六三七 吾が背子が形身の衣嬬問ひに我が身は離けじ言問はずとも

湯原王の亦贈へる歌一首

六三八 唯一夜隔てし故に荒玉の月か經ぬると思ほゆるかも

娘子が復報贈ふる歌一首

六三九 吾が背子が斯く戀ふれこそ夜干玉の夢に見えつゝ寐ねらえずけれ

湯原王の亦贈へる歌一首

六四〇 愛しけやし間近き里を雲居にや戀ひつゝ居らむ月も經なくに

娘子が復報贈ふる和歌一首

六四一 絶ゆと云はば佗しみせむと燒大刀の諂ふ事は辛しや吾君

湯原王の歌一首

六四二 吾妹子に戀ひて亂れば反轉に懸けて緣せむと我が戀ひ始めし

紀女郎が怨恨の歌三首

六四三 世の中の女にしあらば直渡り痛足の河を渡りかねめや

六四四 今は吾は佗びぞしにける氣の緒に念ひし君を縱さく思へば

六四五 白妙の袖別る可き日を近み心に咽び哭のみし泣かゆ

大伴宿禰駿河麻呂が歌一首

六四六 丈夫の思ひ佗びつゝ度遍く嘆く嘆きを負はぬものかも

大伴坂上郎女が歌一首

六四七 心には忘るゝ日なく思へども人の言こそ繁き君にあれ

大伴宿禰駿河麻呂が歌一首

六四八　相見ずて氣長く成りぬ此頃は奈何に平安くや欝悒し我妹

大伴坂上郎女が歌一首

六四九　蔓葛の絶えぬ使の止息めれば事故しもあるごと思ひつるかも

右、坂上郎女は佐保大納言卿の女なり、駿河麻呂はこれ高市大卿の孫なり、兩卿兄弟の家、女孫姑姪の族、是を以て歌を題し送答し、起居を相問ふ、

大伴宿禰三依が離れて復逢へるを歎ぶ歌一首

六五〇　吾妹子は常世の國に住みけらし昔見しより變若ましにけり

大伴坂上郎女が歌二首

六五一　久堅の天の露霜置きにけり家なる人も待ち戀ひぬらむ

六五二　玉主に珠は授けてかつがつも枕と吾はいざ二人寢む

大伴宿禰駿河麻呂が歌三首

六五三　情には忘れぬものを偶々も見ぬ日數多く月ぞ經にける

六五四　相見ては月も經なくに戀ふと云はゞ虛言ろと吾を思ほさむかも

六五五　思はぬを思ふと云はば天地の神祇も知らさむいぶかるな努

大伴坂上郎女が歌六首

六五六　吾のみぞ君には戀ふる吾が背子が戀ふとふ事は言の慰ぞ

六五七　思はじと云ひてしものを翼酢色の變ひ易き吾が心かも

六五八　思へども驗もなしと知るものを奈何で幾許吾が戀ひ渡る

六五九　豫め人言繁し斯くしあらばしるや吾が背子行末も如何にあらめ

六六〇　汝をと吾を人ぞ離くなるいで吾君人の中言聞きこすな努

六六一　戀ひ〳〵て逢へる時だに愛しき言盡してよ長くと思はゞ

市原王の歌一首

六六二　網兒の山五百重隱せる佐堤の埼小網延へし子が夢にし見ゆる

安都宿禰年足が歌一首

六六三　佐保渡り吾家の上に鳴く鳥の聲懷しき愛しき妻の兒

大伴宿禰像見が歌一首

六六四　石の上零るとも雨に障まめや妹に逢はむと言ひてしものを

安倍朝臣蟲麻呂が歌一首

六六五　向ひ居て見れども飽かぬ吾妹子に立分れ行かむ手段知らずも

大伴坂上郎女が歌二首

六六六　相見ずて幾く久も有らなくに幾許吾は戀ひつゝもあるか
六六七　戀ひ〳〵て逢ひたるものを月しあれば夜は隱るらむ須臾は在り待て

右、大伴坂上郎女の母石川内命婦と、安倍朝臣蟲滿の母安曇外命婦と、同居の姉妹同氣の親なり、此によりて郎女と蟲滿と相見ること疎からず、相談ふこと既に密なり、聊戯歌を作りて以て問答を爲せり、

厚見王の歌一首

六六八　朝に日に色付く山の白雲の思ひ過ぐ可き君にあらなくに

春日王の歌一首

六六九　足引の山橋の色に出でゝ語らば繼ぎて逢ふこともあらむ

娘子が湯原王に贈れる歌一首

六七〇　月讀の光に來ませ足引の山を隔てゝ遠からなくに

湯原王の和へ給へる歌一首

六七一　月讀の光は淸く照らせれど惑へる情堪へじとぞ念ふ

安倍朝臣蟲麻呂が歌一首

六七二　倭文手纏數にもあらぬ吾身持ち奈何で幾許吾が戀ひ渡る

大伴坂上郎女が歌二首

六七三　眞十鏡磨ぎし心を縱してば後に云ふとも驗あらめやも
六七四　眞玉付く彼此兼ねて言ひは言へど逢ひて後こそ悔ばありと謂へ

中臣女郎が大伴宿禰家持に贈れる歌五首

六七五　女郎花咲澤に生ふる花勝見嘗ても知らぬ戀も爲るかも
六七六　海の底沖を深めて吾が念へる君には逢はむ年は經ぬとも
六七七　春日山朝居る雲の鬱しく知らぬ人にも戀ふるものかも
六七八　直に逢ひて見てばのみこそ靈剋る命に向ふ吾が戀止まめ
六七九　不欲と云はゞ强ひめや吾が背嘗の根の思ひ亂れて戀ひつゝもあらむ

大伴宿禰家持が交遊と久しく別るゝ歌三首

六八〇　蓋しくも人の中言聞かせかも許多待てど君が來まさぬ
六八一　中々に絶ゆとし云はゞ斯くばかり生の緒にして吾が戀ひめやも
六八二　思ふらむ人にあらなくに懃に心靈して戀ふる吾かも

大伴坂上郎女が歌七首

六八三　もの言ひの恐き國ぞ紅の色にな出でそ思ひ死ぬとも

六八四　今は吾は死なむよ吾が背生けりとも吾に縁るべしと言ふと云はなくに
六八五　人言を繁みや君を二鞘の家を隔てゝ戀ひつゝ居らむ
六八六　此頃は千歳や往きも過ぎにしと吾や然か念ふ見まく欲りかも
六八七　愛しと吾が念ふ心速河の塞きは塞くとも猶や崩えなむ
六八八　青山を横切る雲の顯著く吾と咲まして人に知らゆな
六八九　海山も隔たらなくに何しかも見言をだにも幾許乏しき

大伴宿禰三依が悲別の歌一首

六九〇　照らす日を闇に見なして泣く涙衣沾らしつ干す人なしに

大伴宿禰家持が娘子に贈れる歌二首

六九一　百磯城の大宮人は多けども心に乘りて念はゆる妹
六九二　愛想なき妹にもあるかも斯くばかり人の心を盡せる念へば

大伴宿禰千室が歌一首

六九三　斯くのみに戀ひや渡らむ秋津野に棚引く雲の過ぐとはなしに

廣河女王の歌二首

六九四　戀草を力車に七車積みて戀ふらく吾が心から

六九五　戀は今はあらじと吾は思へるを何處の戀ぞ攫みかゝれる

石川朝臣廣成が歌一首

六九六　家人に戀ひ過ぎめやも蝦鳴く泉の里に年の歴ぬれば

大伴宿禰像見が歌三首

六九七　吾が聞に繋けてな言ひそ刈薦の亂れて思ふ君が其噂ぞ
六九八　春日野に朝居る雲の重々に吾は戀ひ益る月に日にけに
六九九　一瀬には千遍障らひ行く水の後にも逢はむ今ならずとも

大伴宿禰家持が娘子の門に到りて詠める歌一首

七〇〇　斯くしてや猶や退らむ近からぬ道の間を苦惱み參來て

河内百枝娘子が大伴宿禰家持に贈れる歌二首

七〇一　端々に人を相見て如何にあらむ何れの日にか乂外に見む
七〇二　夜干玉の其夜の月夜今日までに吾は忘れず間なくし念へば

巫部麻蘇娘子が歌二首

七〇三　吾が背子を相見し其日今日までに吾が衣手は乾る時も無し
七〇四　栲縄の永き生命を欲しけくは絶えずて人を見まく欲りこそ

大伴宿禰家持が童女に贈れる歌一首

七〇五　葉根蔓今爲す妹を夢に見て心の内に戀ひ渡るかも

童女が來報ふる歌一首

七〇六　葉根蔓今爲る妹は無きものを何れの妹ぞ幾許戀ひたる

粟田娘子が大伴宿禰家持に贈れる歌二首

七〇七　思ひやる術の知れねば片椀の底にぞ吾は戀ひたりにける

七〇八　復も逢はむ因もあらぬか白妙の我が衣手に殯ひ止めむ

豐前國の娘子大宅女が歌一首

七〇九　夕闇は道たづ〳〵し月待ちて行ませ音が背子其間にも見む

安都扉娘子が歌一首

七一〇　御空行く月の光に唯一目相見し人の夢にし見ゆる

丹波大女娘子が歌三首

七一一　鴨鳥の遊ぶ此池に木の葉散りて浮べる心吾が念はなくに

七一二　味酒を三輪の祝が齋ふ杉手觸りし罪か君に遇ひ難き

七一三　垣穂なす人言聞きて吾が背子が情猶豫ひ逢はぬ此頃

大伴宿禰家持が娘子に贈れる歌七首

七一四　情には思ひ渡れど緣を無み外のみに爲て嘆きぞ吾が爲る

七一五　千鳥鳴く佐保の河門の清き瀬を馬打ち渡し何時か通はむ

七一六　夜晝といふ別知らに吾が戀ふる心は蓋し夢に見えきや

七一七　情もなく有るらむ人を片思ひに吾は思へばめぐしくもあるか

七一八　念はぬに妹が咲ひを夢に見て心の中に燃えつゝぞ居る

七一九　丈夫と思へる吾を斯くばかり寒れに寒れ片思を爲む

七二〇　村肝の心摧けて斯くばかり吾が戀ふらくを知らずかあるらむ

天皇（聖武）に獻れる歌一首

七二一　足引の山にし居れば風流無み吾が爲る事を咎め賜ふな

大伴宿禰家持が歌一首

七二二　斯くばかり戀ひつゝあらずは石木にも成らましものを物思はずして

大伴坂上郎女が跡見庄より宅に留れる女子の大孃に贈れる歌一首并短歌

七二三　常世にと吾が行かなくに、小金門に物悲しらに、思へりし吾が兒の刀自を、野干玉の夜晝と言はず、思ふにし吾が身は痩せぬ、嘆くにし袖さへ沾れぬ、斯くばかり妄し戀ひば、古

郷に此月頃も、有りがてましを

反歌

七二四　朝髪の思ひ亂れて斯くばかり愛姉が戀ふれぞ夢に見えける

天皇に獻れる歌二首

七二五　鳥鳥の潜く池水心あらば君に我が戀ふ情示さね

七二六　外に居て戀ひつゝあらずば君が家の池に住む云ふ鴨にあらましを

大伴宿禰家持が坂上家の大嬢に贈れる歌二首

七二七　忘草吾が下紐に著けたれど醜の醜草言にしありけり

七二八　人も無き國もあらぬか吾妹子と携ひ行きて副ひて居らむ

大伴坂上大嬢が大伴宿禰家持に贈れる歌三首

七二九　玉ならば手にも卷かむを空蟬の世の人なれば手に卷き難し

七三〇　逢はむ夜は何時もあらむを何爲とか其夕逢ひて言の繁きも

七三一　吾が名はも千名の五百名に立ちぬとも君が名立てば惜しみこそ泣け

又大伴宿禰家持が和ふる歌三首

七三二　今時はし名の惜しけくも吾は無し妹に緣りてば千遍立つとも

七三三　空蟬の世やも二度行く何爲とか妹に逢はずて吾が獨り寢む

七三四　吾が思ひ斯くてあらずは玉にもが眞も妹が手に纏かれなむ

同じ坂上大嬢が家持に贈れる歌一首

七三五　春日山霞棚引き情ぐゝ照れる月夜に獨りかも寢む

又家持が坂上大嬢に和ふる歌一首

七三六　月夜には門に出で立ち夕占問ひ足卜をぞ爲し行かまくを欲り

同じ大嬢が家持に贈れる歌二首

七三七　云々に人は云ふとも若狹道の後瀬の山の後も逢はむ君

七三八　世の中の苦しきものに有りけらく戀に堪へずて死ぬべき思へば

又家持が坂上大嬢に和ふる歌二首

七三九　後瀬山後も逢はむと思へこそ死ぬべきものを今日までも生けれ

七四〇　言のみを後も逢はむと懃に吾を憑めて逢はぬ妹かも

更大伴宿禰家持が坂上大嬢に贈れる歌十五首

七四一　夢の逢ひは苦しかりけり覺きて搔き探れども手にも觸れねば

七四二　一重のみ妹が結ばむ帶をすら三重結ぶべく吾が身はなりぬ

七四三　吾が戀は千引の石を七ばかり頸に繫けむも神の隨意

七四四　暮來らば屋戸開け設けて吾待たむ夢に相見に來むと云ふ人を

七四五　朝夕に見む時さへや吾妹子が見とも見ぬ如なほ戀しけむ

七四六　生ける世に吾は未だ見ず言絶えて斯く面白く縫へる囊は

七四七　吾妹子が形身の衣下に着て直に逢ふまでは吾脫がめやも

七四八　戀ひ死なむ其も同じぞ何爲むに人目他言辭痛み吾が爲む

七四九　夢にだに見えばこそあれ斯くばかり見えずてあるは戀ひて死ねとか

七五〇　思ひ絶え侘びにしものを中々に如何で苦しく相見始めけむ

七五一　相見ては幾日も經ぬを幾許も狂ひに狂ひ思ほゆるかも

七五二　斯くばかり面影のみに思ほえば如何にかも爲む人目繁くて

七五三　相見てば須臾戀は和ぎむかと思へど彌戀ひ益りけり

七五四　夜の明時吾が出て來れば吾妹子が顏色しくし面影に見ゆ

七五五　夜の明時出でつゝ來らく遍多數く成れば吾が胸截ち燒く如し

大伴田村家の大孃が妹坂上大孃に贈れる歌四首

七五六　外に居て戀ふれば苦し吾妹子を繼ぎて相見む事計せよ

七五七　遠からば侘びてもあらむ里近く有りと聞きつゝ見ぬが術なさ

七五八　白雲の棚引く山の高々に吾が念ふ妹を見む由もがも

七五九　如何にあらむ時にか妹を葎生の穢しき宿に入り座せなむ

右、田村大孃と坂上大孃と、并に是右大辨大伴宿奈麻呂卿の女なり、卿は田村の里に居り、號を田村大孃と曰へり、但妹坂上大孃は、母坂上の里に居り、仍りて坂上大孃と曰へり、時に姉妹諸問し歌を以て贈答す、

大伴坂上郎女が竹田庄より女子の大孃に贈れる歌二首

七六〇　打渡す竹田の原に鳴く鶴の間無く時無し吾が戀ふらくは

七六一　早河の瀨に居る鳥の緣を無み思ひてありし吾が兒はもあはれ

紀女郎が大伴宿禰家持に贈れる歌二首（女郎名を小鹿と曰ふ）

七六二　神さぶと否にはあらず將や將斯くして後に不樂しけむかも

七六三　玉の緒を沫緒に搓りて結べれば在りて後にも逢はざらめやも

大伴宿禰家持が和ふる歌一首

七六四　百歲に老舌出でゝ訥辯むとも吾は厭はじ戀は益すとも

久濃京に在りて寧樂の宅に留れる坂上大孃を思びて、大伴宿禰家持が詠める歌一首

七六五　一重山隔れるものを月夜好み門に出で立ち妹か待つらむ

藤原郎女が此歌を聞き和ふる歌一首

七六六　路遠み來じとは知れる物故に然かぞ待つらむ君が見を欲り

大伴宿禰家持が更大嬢に贈れる歌二首

七六七　都路を遠みや妹が此頃は誓約ひて宿れど夢に見え來ぬ

七六八　今知らす久邇の京に妹に逢はず久しく成りぬ行きてはや見な

大伴宿禰家持が紀女郎に報贈ふる歌一首

七六九　久堅の雨の降る日を唯獨り山邊に居れば鬱せかりけり

大伴宿禰家持が久邇京より坂上大嬢に贈れる歌二首

七七〇　人眼多み逢はなくのみぞ情さへ妹を忘れて吾が思はなくに

七七一　偽も似付きてぞ爲る顯しくも眞吾妹子吾に戀ひめや

七七二　夢にだに見えむと吾は祈誓へども相思はざれば諸見えざらむ

七七三　言問はぬ木すら紫陽花諸茅等が練の村戸に詐かえけり

七七四　百千遍戀ふと云ふとも諸茅等が練の言葉し吾は信まじ

大伴宿禰家持が紀女郎に贈れる歌一首

七七五　鶉鳴く故りにし鄕ゆ思へども何ぞも妹に逢ふ緣もなき

紀女郎が家持に報贈ふる歌一首

七七六　言出しは誰が言なるか小山田の苗代水の中澱にして

大伴宿禰家持が更紀女郎に贈れる歌五首

七七七　吾妹子が宿の籬を見に行かば蓋し門より返しなむかも

七七八　卒爾に離の姿見まく欲り行かむと云へや君を見にこそ

七七九　板蓋の黑木の屋根は山近し明日取りて持ち參り來む

七八〇　黑木取り草も刈りつゝ仕へめど勤しき汝と譽めむともあらじ

七八一　野干玉の昨夜は還しつ今夜さへ吾を還すな道の長道を

紀女郎が裹物を友に贈れる歌一首（女郎名を小鹿と曰ふ）

七八二　風高く邊には吹けれど妹が爲め袖さへ沾れて刈れる玉藻ぞ

大伴宿禰家持が娘子に贈れる歌三首

七八三　一昨年の先つ年より今年まで戀ふれど何ぞも妹に逢ひ難き

七八四　現には更にも得言はじ夢にだに妹が袂を纏き宿とし見ば

七八五　吾が宿の草の上白く置く露の壽も惜しからず妹に逢はざれば

大伴宿禰家持が藤原朝臣久須麻呂に贈れる歌三首

七八六　春の雨は彌頻降るに梅の花未だ咲かなく甚若みかも

七八七　夢の如思ほゆるかも愛しきやし君が使の數多く通へば

七八八　末稚み花咲き難き梅を植ゑて人の言繁み思ひぞ吾が爲る

又家持が藤原朝臣久須麻呂に贈れる歌二首

七八九　情ぐく念ほゆるかも春霞棚引く時に言の通へば

七九〇　春風の聲にし出なばありさりて今ならずとも君がまにまに

藤原朝臣久須麻呂が來報ふる歌二首

七九一　奥山の岩陰に生ふる菅の根の　懃　吾も相念はざれや

七九二　春雨を待つとにしあらし吾が宿の若木の梅も未だ含めり

卷四　終

卷五

雜歌

太宰帥大伴卿の凶問に報へ給ふ歌一首并序

禍故重疊り、凶問累に集る、ひたぶるに心を崩すの悲を懷き、獨り腸を斷つの泣を流す。但兩君の大助に依りて傾命纔に繼ぐ耳、筆言を盡さず、古今歎く所、

七九三　世の中は空しきものと知る時し　愈　益　悲しかりけり

神龜五年六月二十三日、筑前守山上臣憶良が亡れる妻を悲傷める詩一首并序

蓋し聞く、四生の起滅、夢に方りて皆空し、三界の漂流、環の息まざるに喩ふ、所以に維摩大士方丈に在り、疾に染むの患を懷くことあり、釋迦能仁雙林に坐し、泥洹の苦を免るゝなし、故に知る二聖至極、力負の尋ぎて至るを拂ふこと能はず、三千世界誰か能く黒闇の捜り來るを逃れむ、二鼠競ひ走りて、目を度すの烏且に飛び、四蛇爭ひ侵して隙を過ぐるの駒夕に走る、嗟乎痛しい哉、紅顏三從と共に長く逝き、素質四德と永く滅す、何ぞ圖らむ偕老要期に違ひ、獨り飛びて半路に生ぜむとは、蘭室の屏風徒に張り、斷腸の哀彌痛む、枕頭の明鏡空しく懸り、染筠の淚逾落つ、泉門一たび掩へば再び見るに由無し、嗚呼哀しい哉、

愛河波浪已先滅、苦海煩惱亦無レ結、從來厭三離此穢土一、本願託三生彼淨刹一、

日本挽歌一首幷短歌

七九四　大君の遠の朝廷と、しらぬひ筑紫の國に、泣く子なす慕ひ來まして、息だにも未だ休めず、年月も幾だも有らねば、心ゆも思はぬ間に、うち靡き臥しぬれ、言はむ術爲む術不知に、石木をも問ひ放け知らず、家ならば屍體はあらむを、恨めしき妹の命の、吾をばも如何に爲よとか、鳴鳥の二人並び居、語らひし心背きて、家離り坐す

反歌

七九五　家に行きて如何にか吾が爲む枕付く閨房不樂しく思ほゆべしも

七九六　愛しきよし斯くのみからに慕ひ來し妹が心の術も術なさ

七九七　悔しかも斯く知らませばあをによし國内盡見せましものを

七九八　妹が見し棟の花は散りぬべし我が泣く涙未だ干なくに

七九九　大野山霧立ち渡る我が嘆く息嘯の風に霧立ち渡る

神龜五年七月二十一日　筑前國守山上憶良上

惑情を反さしむる歌一首幷序

或人父母を敬はずして侍養を忘れ、妻子を顧みざること脱履よりも輕し、自ら異俗先生と稱る、意氣青雲の上に揚ると雖も、身體は猶ほ塵俗の中に在り、未だ修業得道の聖を驗らず、蓋し是れ山澤に亡命するの民なり、所以三綱を指示して、更に五教を開き、遺るに歌を以て其惑を反さしむ、其歌に曰く、

八〇〇　父母を見れば尊し、妻子見れば愍し愛し、遁ろえぬ兄弟親族、遁ろえぬ老み幼み、朋友の言問ひ交はす、世の中は斯くぞ道理、黏鳥の拘泥しもよ、速川の行方知らねば、破沓を脱棄る如く、踏脱ぎて行く云ふ人は、石木より成りてし人か、汝が名告らさね、天へ行かば汝がまにまに、地ならば大君坐す、此照す日月の下は、天雲の向伏す極み、谷蟆のさ渡る極み、聞し食す國のまほらぞ、兎に角に欲しきまにまに、然かにはあらじか

反歌

八〇一　久方の天道は遠し默々に家に歸りて業を爲まさに

子等を思ふ歌一首幷序

釋迦如來金口正に說き給へらく、等しく衆生を思ふこと羅睺羅の如しとのたまへり、又說き給へらく、愛は子に過ぐることなしとのたまへり、至極の大聖すら尙ほ子を愛しむ心有り、況して世間の蒼生誰か子を愛しまざる乎、

八〇二　瓜食めば兒等思ほゆ、栗食めば況してしぬばゆ、何處より來りしものぞ、眼之交にもとな懸りて、安寢し爲さぬ

反歌

八〇三　銀も黄金も玉も何せむに優れる寶子に如かめやも

世間の住り難きを哀しめる歌一首并序

集り易く排し難し、八大辛苦遂げ難く盡し易し、百年の賞樂古人の歎きし所、今亦之に及ぶ。所以因て一章の歌を作りて以て三毛之歎を撥く、其歌に曰く、

八〇四　世の中の術なきものは、年月は流るゝ如し、取連き追ひ來るものは、百種に迫め依り來る、少女等が少女さびすと、唐玉を手本に纏かし、白妙の袖振り交し、紅の赤裳裾引き、同輩兒と手携はりて、遊びけむ時の盛りを、止みかね過し遣りつれ、蜷の腸か黑き髪に、何時の間か霜の降りけむ、丹の秀なす顏面の上に、何處ゆか皺搔垂りし、丈夫の壯士さびすと、劔太刀腰に取り佩き、獵弓を手握り持ちて、赤駒に倭文鞍打置き、鞭ひ乘りて遊び歩きし、世の中や常に有りける、少女等が閉鳴す板戸を、押開きい辿り寄りて、眞玉手の玉手指し交へ、さ寢し夜の幾許もあらねば、手束杖腰に束ねて、彼行けば人に厭はえ、此く行けば人に惡まえ、凡しをば斯くのみならし、たまきはる生命惜しけど、せむ術も無し

反歌

八〇五　常磐なす斯くしもがもと思へども世の事なれば留みかねつも

神龜五年七月二十一日、嘉摩郡にて撰定ぶ、筑前國守山上憶良

太宰帥大伴卿の相聞歌二首

（脫文）

歌詞兩首　太宰帥大伴卿

八〇六　龍馬も今も得てしかあをによし奈良の都に行きて來む爲め

八〇七　現には逢ふ由も無し野干玉の夜の夢にを繼ぎて見えこそ

大伴淡等謹狀

官氏報ふる歌二首

伏して來書を辱うす、具に芳旨を承る、忽ち漢を隔つるの戀を成し、復梁を抱くの意を傷む、唯羨くは去留恙無く、遂に雲を披かむことを待つ耳、

答ふる歌二首

八〇八　龍馬を吾は求めむ青丹吉奈良の都に來む人の爲に

八〇九　直に逢はず有らくも多し敷妙の枕離らずて夢にし見えむ

姓名謹上

帥大伴卿の梧桐の日本琴を中衞大將藤原卿に贈り給へる歌二首

梧桐日本琴一面　對島結石山　桐孫枝也

此の琴夢に娘子に化りて曰ひけらく、余根を遥島の崇巒に託せ、幹を九陽の休光に晞す、長く煙霞を帶びて山川の阿に逍遥す、遠く風波を望みて鴈木の間に出入す、唯だ百年の後空しく溝壑に朽ちなむことを恐れき、偶長匠に遭ひて、敢て小琴と爲りき、質麁く音少なきを顧みず、恒に君子の左琴とならむことを希ふと云ひて、卽ち歌曰く、

八一〇　如何にあらむ日の時にかも琴聲知らむ人の膝の上吾が枕らかむ

僕詩詠に報へけらく、

八一一　言問はぬ樹にはありとも麗はしき君が手慣れの琴にしあるべし

琴の娘子答へて曰く、敬て德音を奉はる、幸甚幸甚といへり、片時にして覺めたり、卽ち夢の言に感け、慨然として默止り得ず、故公使に附けて聊か以て進御する耳、謹上不具、

天平元年十月七日使に附けて進上

謹みて中衞高明閤下に通る　謹空

中衞大將藤原卿の報へ給ふ歌一首

八一二　言問はぬ木にもありとも吾が夫子が手慣れの御琴地に置かめやも

跪きて芳音を承る、嘉懽交々深し、乃ち龍門之恩復蓬身の上に厚きことを知りぬ、戀望殊念、常心に百倍す、謹みて白雲の什に和へて以て野鄙之歌を奏る、房前謹狀、

十一月八日、還使大監に附けて

謹みて尊門記室に通る

山上臣憶良が鎭懷石を詠める歌一首幷短歌

筑前國怡土郡深江村子負原、海に臨ひたる丘の上に二石あり、大なる者は長さ一尺二寸六分、圍一尺八寸六分、重さ十八斤五兩、小さき者は長さ一尺一寸、圍一尺八寸、重さ十六斤十兩、並皆楕圓にして狀鷄子の如し、其美好きこと勝て論ず可からず、所謂徑尺璧是なり（或は云ふ、此二石は肥前國彼杵郡平敷の石、占に當りて之を取る）深江の驛家を去ること二十許里、近く路頭に在り、公私の往來馬より下りて跪拜まざるはなし、古老相傳へて曰く、往者息長足日女命新羅國を征討け給ひし時、玆の兩石を用ちて御袖の中に挿着み給ひて以て鎭懷と爲す、（實は是御裳の中なり）所以、行人此石を敬拜すといへり、乃ち作歌曰く、

八一三　掛けまくは奇に畏し、足姫神の命、韓國を向け平げて、御心を鎭め給ふと、い取らして齋ひ給ひし、眞珠なす二つの石を、世の人に示し給ひて、萬代に言ひ繼ぐがねと、海の底沖つ深江の、海上の子負の原に、御手づから置かし給ひて、神隨神さび坐す、奇魂今の現に、尊きろかも

八一四　天地の共に久しく言ひ繼げと此の奇魂敷かしけらしも

右の事傳へ言ふは那珂郡伊知郷蓑島の人建部牛麻呂是なり

太宰帥大伴卿の宅に宴して詠める梅花の歌三十二首幷序

天平二年正月十三日、帥の老の宅に萃ひて宴會を申す也、時に初春令月氣淑く風和に、梅、鏡前の粉を披き、蘭、珮後の香を薰す、加以曙嶺雲を移し、松蘿を掛けて蓋を傾く、夕岫霧を結び、鳥穀に封じて林に迷ふ、庭には舞ふ新蝶あり、空には歸る故鴈あり、於是天を蓋にし地を坐にし、膝を促して觴を飛ばし、言を一室の裏に忘れ、衿を煙霞の外に開き、淡然として自ら放に、快然として自ら足れり、若し翰苑に非ずば何を以てか情を攄べむ、請ふ落梅の篇を紀さむと、古今夫れ何ぞ異ならむ、宜しく園梅を賦し聊か短歌を詠むべし

八一五　正月立ち春の來らば斯くしこそ梅を折りつゝ樂しき竟へめ　大貳紀卿
八一六　梅の花今咲ける如散り過ぎず我が家の園に有りこせぬかも　少貳小野大夫
八一七　梅の花咲きたる園の青柳は鬘に爲べく成りにけらずや　小貳粟田大夫
八一八　春來れば先づ咲く宿の梅の花ひとり見つゝや春日暮さむ　筑前守山上大夫
八一九　世の中は戀繁しゑや斯くしあらば梅の花にも成らましものを　豐後守大伴大夫
八二〇　梅の花今盛なり思ふどち挿花に爲てな今盛なり　筑後守葛井大夫
八二一　青柳梅との花を折り挿頭し飲酒みての後は散りぬともよし　笠沙彌
八二二　我が園に梅の花散る久方の天より雪の流れ來るかも　主人
八二三　梅の花散らくは何處しかすがに此の城の山に雪は降りつゝ　大監大伴氏百代

八二四　梅の花散らまく惜しみ我が園の竹の林に鶯鳴くも　少監阿氏奥島
八二五　梅の花咲きたる園の青柳を鬘にしつゝ遊び暮らさな　少監土氏百村
八二六　打靡く春の柳と我が宿の梅の花とを如何にか別かむ　大典史氏大原
八二七　春來れば木末隱りて鶯ぞ鳴きて寢ぬなる梅が下枝に　少典山氏若麻呂
八二八　人毎に折り挿頭しつゝ遊べども彌珍しき梅の花かも　大判事舟氏麻呂
八二九　梅の花咲きて散りなば櫻花繼ぎて咲くべく成りにてあらずや　藥師張氏福子
八三〇　萬代に年は來經とも梅の花絶ゆる事なく咲き渡るべし　筑前介佐氏子首
八三一　春なれば宜も咲きたる梅の花君を思ふと夜寢も寢なくに　豐岐守板氏安麻呂
八三二　梅の花折りて挿頭せる諸人は今日の間は樂しくあるべし　神司荒氏稲布
八三三　毎年に春の來らば斯くしこそ梅を挿頭して樂しく飲酒まめ　大令史野氏宿奈麻呂
八三四　梅の花今盛なり百鳥の聲の戀しき春來るらし　少令史田氏肥人
八三五　春來らば逢はむと思ひし梅の花今日の遊に相見つるかも　藥師高氏義通
八三六　梅の花手折り挿頭して遊べども飽き足らぬ日は今日にしありけり　陰陽師礒氏法麻呂
八三七　春の野に鳴くや鶯懷けむと我が家の園に梅が花咲く　筭師志氏大道
八三八　梅の花散り亂ひたる岡邊には鶯鳴くも春片設けて　大隅目榎氏鉢麻呂

八三九　春の野に霧立ち渡り降る雪と人の見るまで梅の花散る　筑前目田氏眞人
八四〇　春柳鬘に折りし梅の花誰か浮べし酒盃の上に　壹岐目村氏彼方
八四一　鶯の聲聞く同時に梅の花我家の園に咲きて散る見ゆ　對島目高氏老
八四二　我が宿の梅の下枝に遊びつゝ鶯鳴くも散らまく惜しみ　薩摩目高氏海人
八四三　梅の花折り挿頭しつゝ諸人の遊ぶを見れば都しぞ思ふ　土師氏御通
八四四　妹が家に雪かも降ると見るまでに許多も紛ふ梅の花かも　小野氏國堅
八四五　鶯の待ちがてにせし梅が花散らず有りこそ思ふ兒が爲め　筑前掾門氏石足
八四六　霞立つ長き春日を挿頭せれど彌懐しき梅の花かも　小野氏淡理

員外故郷を思ふ歌兩首

八四七　我が盛いたく降ちぬ雲に飛ぶ藥服むともまた變若めやも
八四八　雲に飛ぶ藥服むよは都見ば賤しき吾が身又變若ぬべし

後に追ひて詠める梅の花の歌四首

八四九　殘りたる雪に交れる梅の花早くな散りそ雪は消ぬとも
八五〇　雪の色を奪ひて咲ける梅の花今盛なり見む人もがも
八五一　我が宿に盛に咲ける梅の花散るべくなりぬ見む人もがも

八五二　梅の花夢に語らく風流びたる花と吾思ふ酒に浮べこそ

松浦河に遊びて贈り答ふる歌八首幷序

余曾く松浦之縣に往きて逍遥す、聊か玉島の潭に臨みて遊覽す、忽ち魚を釣る女子等に値へり、花容雙なく光儀匹なし、柳葉を眉中に開き、桃花を頰上に發く、意氣雲を凌ぎ風流世に絶えたり、僕問ひけらく、誰鄕誰家の兒等ぞ、けだし神仙なる者か、娘等皆咲て答へけらく、兒等は漁夫の舍兒、草庵の微者、鄕も無し家も無し、何ぞも稱云るに足らむ、唯性水に便り、復た心山を樂ぶ、或は洛浦に臨みて徒に玉魚を羨み、乍ち巫峽に臥して以て空しく烟霞を望む、今邂逅に貴客に相遇ひ、感應に勝へず、輙ち款曲を陳ぶ、今より後豈に偕老ならざる可けむや、下官對へて曰く、唯々敬て芳命を奉りき、時に日山西に落ち驪馬將に去らむとす、遂に懷抱を申べ因て詠みて贈れる歌に曰く

八五三　漁する海人の兒等と人は言へど見るに知らえぬ良人の子と

答ふる詩に曰く

八五四　玉島の此川上に家はあれど君を恥しみ顯さずありき

蓬客等更贈れる歌三首

八五五　松浦河河の瀨耀り年魚釣ると立たせる妹が裳の裾沾れぬ
八五六　松浦なる玉島川に年魚釣ると立たせる兒等が家路知らずも

八五七　遠津人松浦の川に若年魚釣る妹が袂を我こそ纏かめ

娘等更報ふる歌三首

八五八　若年魚釣る松浦の川の川波の普通にし思はゞ我戀ひめやも

八五九　春來れば我家の里の川門には年魚兒さ走る君待ちがてに

八六〇　松浦川七瀬の淀は澱むとも吾はよどまず君をし待たむ

後人追ひて詠める詩三首（都帥老）

八六一　松浦河河の瀬早み紅の裳の裾沾れて年魚か釣るらむ

八六二　人皆の見らむ松浦の玉島を見ずてや吾は戀ひつゝ居らむ

八六三　松浦河玉島の浦に若鮎釣る妹等を見らむ人の羨しさ

吉田連宜が答和ふる歌四首

宜啓す、伏して四月六日の賜書を奉り、跪きて封函を開き、芳藻を拜讀するに、心神開朗、泰初が月を懐きしに似たり、鄙懐除袪、樂廣が天を披きしが若し、至若邊域に羈旅し古舊を懐うて志を傷ましむ、年矢停らず、平生を憶ひて淚を落す、但達人排に安みし、君子悶り無し、伏して冀くは朝に翟を懐くる化を宜べ、暮に龜を放つ術を存す、暖趙を百代に架し、松喬を千齡に追はむのみ、兼て垂示を奉はる、梅花の芳席、群英藻を擒べ、松浦の玉潭仙媛の贈答、杏壇各言の作に類へ、衡皐稅駕の篇に疑ふ、耽讀吟諷し感謝歡怡す、宜主を戀ふ誠、誠に犬馬に逾ゆ、德を仰ぐ心、心葵藿に同じ、而して碧海地を分ち白雲天を隔て徒に傾延を積む、何ぞも勞緒を慰めむ、孟秋膺節伏して願はくは萬祐日に新むことを、今相撲部領使に因て謹みて片紙を付く、宜謹みて啓す、不次、

諸人の梅の花の歌に和へ奉る一首

八六四　後れ居て長戀せずは御園生の梅の花にもならましものを

松浦仙媛の歌に和ふる一首

八六五　君を待つ松浦の浦の仙媛等は常世の國の天女かも

君を思ふこと未だ盡きずて重題せる歌二首

八六六　遙々に思はゆるかも白雲の千重に隔てる筑紫の國は

八六七　君が行けながく成りぬ奈良路なる志滿の木立も神さびにけり

天平二年七月十日

山上臣憶良が松浦の歌三首

憶良誠惶頓首謹啓す、憶良聞く、方岳の諸侯、都督刺吏並典法に依りて部下を巡行し、其風俗を察る、意内端多く、口外出し難し、謹みて三首の鄙歌を以て五藏の鬱結を寫さむと欲す、其歌に曰く

八六八　松浦縣佐用姫の子が領布振りし山の名のみや聞きつゝ居らむ

八六九　足姫神の命の魚釣らすと御立たしせりし石を誰れ見き

八七〇　百日しも行かぬ松浦路今日行きて明日は來なむを何か障れる

天平二年七月十一日筑前國司山上憶良謹上

領巾麾嶺を詠める歌一首

大伴の狹手彦の郎子、特朝命を被り藩國に奉使らる、艤棹し歸き、稍蒼波を赴む、妾松浦佐用姫此の別の易きを嗟き、彼の會の難きを嘆く、即ち高山の嶺に登りて遙に離去の船を望み、悵然として腸を斷ち、黯然として魂を鎖つ、遂に領巾を脱きて之を麾る、傍者流涕まざるは莫りき、因此山を領布麾の嶺と曰くと云へり、乃ち作歌曰く

八七一　遠つ人松浦佐用姫夫戀に領巾振りしより負へる山の名

後人が追ひて和ふる歌一首

八七二　山の名と言ひ繼げとかも佐用姫が此山の上に領巾を振りけむ

最後人が追ひて和ふる歌一首

八七三　萬代に語り繼げとし此嶽に領巾振りけらし松浦佐用姫

最最後人が追ひて和ふる歌二首

八七四　海原の沖行く船を歸れとか領巾振らしけむ松浦佐用姫

八七五　行く船を振り留み兼ね如何ばかり戀しくありけむ松浦佐用姫

冒殿にて饒酒せる日の倭歌四首

八七六　天飛ぶや鳥にもがもや京まで送り申して飛び歸るもの

八七七　人皆の心憂れ居るに立田山御馬近づかば忘らしなむか

八七八　言ひつゝも後こそ知らめ須臾も不樂しけめやも君坐さずして

八七九　萬代に坐し給ひて天の下執政し給はね朝廷去らずて

敢て私懷を布ぶる歌三首

八八〇　天放る邊地に五年住ひつゝ京の風俗忘らえにけり

八八一　斯くのみや長嘆息き居らむあらたまの來經去く年の限知らずて

八八二　吾が主の御靈賜ひて春來らば奈良の都に召上げ給はね

天平二年十二月六日　筑前國司山上憶良謹上

三島王の後に追ひて和へ給ふ松浦佐用姫の歌一首

八八三　風說に聞き目には未だ見ず佐用姫が領布振りきとふ君松浦山

大典麻田連陽春が大伴君熊凝に代りて志を述ぶる歌二首

八八四　國遠き道の長道を罷しく戀ふや過ぎなむ言問ひもなく

八八五　朝露の消やすき我が身他國に過ぎがてぬかも親の目を欲り

筑前國司守山上憶良が熊凝に代りて其志を述ぶる歌に敬和ふる歌六首幷序

大伴君熊凝は肥後國益城郡の人也、年十八歲、天平三年六月十七日を以て、相撲使某國司官位姓名

の從人と爲り京都に參向る、天なるかも不幸、路に在りて疾を獲、卽ち安藝國佐伯郡高庭の驛家にて身故りぬ、臨終むとする時、長歎息して曰く、傳へ聞く、假合の身滅び易く、泡沫の命駐め難し、所以に千聖已く去り、百賢留らず、況して凡愚の微者何ぞ能く逃避せむ、但我が老親並菴室に在りて我を待つこと日を過し、自ら心を傷むるの恨あらむ、我を望むこと時を違へり、必ず明を喪ふの泣を致さむ、哀しい哉我父、痛しい哉我母、一身死に向ふの道を患へず、唯二親在世の苦を悲しむ、今日長く別れ、何れの世かも覲ることを得む、乃ち歌六首を作みて死りぬ、其歌に曰く

八八六　打日差す京へ上ると、垂乳爲の母が手離れ、常知らぬ國の奥處を、百重山越えて過ぎ行き、何時しかも京師を見むと、思ひつゝ語らひ居れど、己が身し勞痛しければ、玉桙の道の隈回に、草手折り柴取り敷きて、床自物打ち臥伏して、思ひつゝ歎き伏せらく、國に在らば父取り見まし、家に在らば母取り見まし、世間は斯くのみならし、狗自物路に伏してや、命死ぎなむ

八八七　垂乳爲の母が目見ずて鬱しく何方向きてか吾が別るらむ

八八八　常知らぬ道の長道をくれ〳〵と如何にか行かむ糧米は無しに

八八九　家に在りて母が取り見ば慰むる心はあらまし死なば死ぬとも

八九〇　出でゝ行きし日を數へつゝ今日今日と吾を待たすらむ父母等はも

八九一　一世には二遍見えぬ父母を置きてや長く吾が別れなむ

貧窮問答の歌一首幷短歌

八九二　風雜り雨降る夜の、雨雜り雪降る夜は、術もなく寒くしあれば、堅鹽を取り嚙ろひ、糟湯酒打ち啜ろひて、咳ぶかひ鼻塞しびしに、確とあらぬ鬚搔き撫でゝ、吾を置きて人はあらじと、誇ろへど寒くしあれば、麻衾引き被り、布肩衣有りの悉皆、服襲へども寒き夜すらを、我よりも貧しき人の、父母は飢え寒からむ、妻子等は乞ひて泣くらむ、此時は如何に爲つつか、汝が世は渡る、天地は廣しといへど、吾が爲めは狹くやなりぬる、日月は明しといへど、吾が爲めは照りや給はぬ、人皆か吾のみや然る、邂逅に人とは生得るを、人並に吾も耕作るを、綿も無き布肩衣の、海松の如わゝけさがれる、襤褸のみ肩に打懸け伏廬の曲廬の内に、直土に藁解き敷きて、父母は枕の方に、妻子等は足の方に、圍み居て憂吟ひ、竈には煙吹き立てず、甑には蜘の巣搔きて、飯炊ぐ事も忘れて、鵺鳥の咽喚び居るに、いとのきて短き物を、端截ると云へるが如く、楚取る里長が聲は、閨處まで來立ち呼ばひぬ、如此ばかり術なきものか、世間の道

八九三　世の中を厭しと恥しと思へども飛び立ち兼ねつ鳥にしあらねば

九〇〇　富人の家の子等の着る身無み腐し棄つらむ絹綿らはも

九〇一　麁妙の布衣をだに着せ難に如此や歎かむ爲む術を無み

山上憶良頓首謹上

好去好來の歌一首幷短歌

八九四　神代より言傳てけらく、虛見つ倭の國は、皇神の嚴しき國、言靈の幸はふ國と、語り繼ぎ言ひ繼がひけり、今の世の人も悉皆、目の前に見たり知りたり、人多に滿ちてはあれども、高光る日の朝廷、神ながら愛の盛に、天の下執政し給ひし、家の子と撰び給ひて、勅旨戴き持ちて、唐の遠き境に、遣はされ罷り坐せ、海原の邊にも沖にも、神留り主宰き坐す、諸の大御神等、船の舳に導き申し、天地の大御神等、倭の大國靈、久方の天の御虛ゆ、天翔り見渡し給ひ、事了り還らむ日には、又更に大御神等、船の舳に御手打ち懸けて、墨繩を延へたる如く、阿庭可遠志値嘉の岬より、大伴の御津の濱邊に、直泊に御船は泊てむ、恙無く幸く坐して、早歸りませ

反歌

八九五　大伴の御津の松原掻き掃きて吾立ち待たむ早歸りませ

八九六　難波津に御船泊てぬと聞え來ば紐解き放けて立走りせむ

天平五年三月一日良宅對面獻ハ三日ナリ山上憶良謹上

大唐大使卿記室

況痾自哀文　山上憶良作

竊に以みるに、朝夕山野に佃食する者、猶ほ災害無くして世を渡ることを得、晝夜河海に釣漁する者、尚ほ慶福ありて全く俗を經、況んや我胎生より今日まで自ら修善の志あり、曾て作惡の心無し、所以に三寶を禮拜し、日として勤めざる無し、百神を敬重し、夜として闕有る鮮し、嗟乎媿なる哉、我何の罪を犯し此重疾に遭ふ、初め痾に沈みて已來年月稍多し、此時年七十有四、鬢髮斑白、筋力尪羸、但年老のみにあらず、復斯病を加ふ、諺に曰く、痛瘡鹽を灌ぎ短材端を截ると、此の謂也、四支動かず、百節皆疼み、身體太だ重く、猶ほ鈞石を負へるが如し、布を懸け立たむと欲すれば翼を折れる鳥の如し、杖に倚りて且つ歩み、跛足の驢に比す、吾以て身已に穿俗、心亦累塵、禍の伏する所、祟の隱るる所を知らんと欲し、龜卜の門、巫祝の室、往きて問はざる無し、若しは實若しは妄、其教ふる所に隨ひ、幣帛を奉り祈禱せざるは無し、然して彌苦を增すあり、曾て減差無し、吾聞く前代多く良醫あり、蒼生の病患を救療す、楡柎、扁鵲、華他、秦の和緩、葛稚川、陶隱居、張仲景等の若きに至ては、皆是れ世に在る良醫、除愈せざるは無き也、件の醫を追望するも敢て及ぶ所に非ず、若し聖醫神藥者に逢はゞ仰ぎ願はくは五臟を割刳し、百病を抄探し、尋で膏肓の奥處に達し、二豎の逃匿を顯さむと欲す、命根既く盡き其天年を終ふも尚ほ哀と爲す、何に況んや生錄未だ半ならず、鬼に枉殺せらる、顏色壯年にして病に横困せらるゝ者をや、世に在るの大患、孰か此より甚しからむ、帛公略說に曰く、伏て思ふ自厲に斯の長世を

以てするも生貪る可く死畏るべし、天地の大德を生と曰ふ、故に死人生鼠に及ばず、王侯たりと雖も一日氣を絶たば、金を積む山の如きも誰か富と爲さむや、威勢海の如きも誰か貴と爲さむや、遊仙窟に曰く、九泉下の人一錢直せず、孔子曰く、之を天に受け變易す可からざる者は形なり、之を命に受け請益すべからざるは壽なり、故に生の極貴と命の至重とを知る、言はむと欲し言窮る、何を以てか之を言はむ、慮らむと欲し慮絶ゆ、何に由てか之を慮らむ、惟以て人賢愚と無く、世古今と無く咸く悉嗟歎す、歲月競ひ流れ、晝夜息はず、老疾相催し朝夕侵し動く、一代の歡樂未だ席前に盡きず、千年の愁苦更に座後を繼ぐ、若し夫れ群生品類皆盡くること有るの身を以て、並に窮無きの命を求めざるはなし、所以に道人方士自ら丹經を負ひ、名山に入り、而して合藥の者、性を養ひ神を怡し以て長生を求む、抱朴子に曰く、神農云ふ、百病愈えず、安ぞ長生を得む、帛公又曰く生は好物也、死は惡物也、若し不幸にして長生を得ざる者、猶ほ生涯病患無き者を以て福大なりと爲す哉、今吾病の爲に惱まされ、臥坐を得ず、東に向ひ西に向ひ爲す所を知ることなし、無福至甚、摠て我に集る、人願ひ天從ふ、如し實あらば、仰ぎ願はくは頓に此病を除き、頼に平の如くなるを得ば、鼠を以て喩と爲すも豈愧ぢざらんや、

俗道假合、卽ち離れ去り易く留り難きを悲歎する詩一首幷序

竊に以みるに釋慈の示教、先に三歸五戒を開き、而して遍く法界を化す、周孔の垂訓、前に三綱五教を張り、以て邦國を濟ふ、故に知る、引導二なりと雖も悟を得るは惟一也、但以ふ世恒質無し、所以に陵谷更に變ず、人定期無し、所以に壽夭同じからず、擊目の間、百齡已に盡き、申臂の頃、

千代亦空し、且には席上の主と作り、夕には泉下の客と爲る、白馬走り來る、黃泉何ぞ及ばむ、隴上の青松空く信劒を懸け、野中の白楊但悲風に吹かる、是に知る世俗本隱遁の室無く、原野唯長夜の臺あり、先聖已に去り、後賢留らず、如し贖ひて免るべきこと有らば、古人誰か價金無からむ乎、未だ獨り存し遂に世の終を見る者を聞かず、所以に維摩大士玉體を方丈に疾み、釋迦能仁、金容を雙樹に掩ふ、內教に曰く、黑闇の後に來るを欲せずんば、德天の先に至るに入る莫れ、故に知る、生必ず死あり、死若し欲せずんば生れざるには如かず、況んや縱に始終の恒數を覺る、何ぞ存亡の大期を慮らむ、

俗道變化猶二擊目一、人事經紀如二申臂一、空與二浮雲一行二大虛一、心力共盡無レ所レ寄、

老身重病年を經て辛苦み及兒等を思ふ歌五首

八九七　靈剋現世の限は、平らけく安くもあらむも、事も無く喪無くもあらむを、世の中の厭けく辛けく、いとのきて痛き瘡には、辛鹽を灌ぐ云ふ如く、益々も重き馬荷に、表荷打つと云ふ事の如、老いにてある我が身の上に、病をら加へてしあれば、晝はも歎かひ暮し、夜はも息衝き明し、年長く病みし渡れば、月を累ね憂ひ吟ひ、異事は死なと思へど、五月蠅なす騷ぐ兒等を、棄てゝは死は知らず、見つゝあれば心は燃えぬ、彼に此に思ひ煩ひ、哭のみし泣かゆ

反歌

八九八　慰むる心はなしに雲隱り鳴き往く鳥の哭のみし泣かゆ
八九九　術も無く苦しくあれば出で走り去なゝと思へど兒等に障りぬ
九〇二　水沫なす脆き命も栲縄の千尋にもがと願ひ暮しつ
九〇三　倭文手纏數にもあらぬ身にはあれど千年にもがと思ほゆるかも去神龜二年作之、但以ル類故更載ニ於茲一

天平五年六月丙申朔三日戊戌作

男子名は古日を戀ふる歌三首

九〇四　世の人の貴み願ふ、七種の寶も我は、何爲むに願ひ欲りせむ、我が夫婦間の生れ出でたる、白玉の吾が子古日は、明星の開くる朝は、敷妙の床の邊去らず、立てれども居れども共に、搔き撫でゝ言問ひ戲れ、夕星の夕になれば、いざ寢よと手を携はり、父母も側はな放り、三枝の中にを寢むと、愛しく其が語らへば、何時しかも人と爲り出でゝ、惡しけくも善けくも見むと、大船の思ひ憑むに、思はぬに横風の、俄にも覆ひ來れば、爲む術の手段を不知に、白妙の襷を掛け、十寸鏡手に取り持ちて、天つ神仰ぎ乞ひ禱み、地つ祇伏して額づき、懸らずも懸りも吉しゑ、天地の神の隨意と、立ち彷徨り我が乞ひ禱めど、須臾も快けくは無しに、漸々に容貌折屈り、朝朝言ふこと止み、靈剋命絶えぬれ、蹉跎り足摩り叫び、伏し仰ぎ胸打ち嘆き、手に持たる吾が兒飛ばしつ、世の中の道

反歌

九〇五　稚ければ道行き知らじ幣は爲む冥官の使負ひて通らせ
九〇六　布施置きて吾は乞ひ禱む欺かず直に率去きて天路知らしめ

卷五終

卷六

雜歌

養老七年癸亥夏五月、芳野の離宮に幸せる時、笠朝臣金村が詠める歌一首幷短歌

九〇七　瀧の上の御舟の山に、水枝さし繁に生ひたる、栂の樹のいや繼ぎ〳〵に、萬代に斯くし知らさむ、み芳野の蜻蛉の宮は、神からか貴かるらむ、國からか見が欲しからむ、山川をあつみ清けみ、大宮とうべし神代ゆ、定めけらしも

反歌

九〇八　毎年に斯くも見てしか三吉野の清き河内の激つ白波

九〇九　山高み白木綿花に落ちたぎつ瀧の河内は見れど飽かぬかも

或本の反歌に曰く

九一〇　神からか見が欲しからむみ吉野の瀧つ河内は見れど飽かぬかも

九一一　み吉野の秋津の川の萬世に絶ゆる事無く又還り見む

九一二　泊瀬女の造る木綿花み吉野の瀧の水沫に開きにけらずや

九一三　車持の朝臣千年が詠める歌一首幷短歌

味凍あやに羨しき、鳴神の音のみ聞きし、三吉野の眞木立つ山ゆ、見降せば川の瀬毎に、開け來れば朝霧立ち、夕されば蝦鳴くなり、紐解かぬ旅にしあれば、吾のみして清き川原を、見らくし惜しも

反歌一首

九一四　瀧の上の三船の山は見つれども思ひ忘るゝ時も日も無し

或本の反歌に曰く

九一五　千鳥鳴くみ吉野川の川音なす止む時なしに思ほゆる君

九一六　あかねさす日並べなくに吾が戀は吉野の河の霧に立ちつゝ

右、年月審ならず、但歌の類を以て此次に載す、或本に云ふ、養老七年五月、芳野離宮に幸せる時の作、

神龜元年甲子冬十月五日紀伊國に幸せる時、山部宿禰赤人が詠める歌一首幷短歌

九一七　安みしゝわご大王の、常宮と仕へ奉れる、左比鹿野ゆ背上に見ゆる、奥つ島清き渚に、風吹けば白浪騒ぎ、潮干れば玉藻刈りつゝ、神代より然かぞ尊き、玉津島山

反歌

九二八　奥つ島荒磯の玉藻潮満ちてい隠ひなば念ほえむかも
九二九　若の浦に鹽満ち來れば潟を無み葦邊をさして鶴鳴き渡る

右年月記さず、但玉津島に從駕すといへり、因りて今行幸の年月を檢注して以て載す、

二年乙丑夏五月、芳野の離宮に幸せる時、笠朝臣金村が詠める歌一首幷短歌

九二〇　足引の御山も清に、落ちたぎつ芳野の河の、河の瀬の淨きを見れば、上邊には千鳥數鳴き、下邊には蝦妻呼ぶ、百磯城の大宮人も、彼此に繁にしあれば、見る毎にあやに羨しみ、玉葛絶ゆる事無く、萬代に斯くしもがもと、天地の神をぞ禱る、恐かれども

反歌　二首

九二一　萬代に見ともゑ飽かめや三吉野のたぎつ河内の大宮所
九二二　人皆の壽も吾も三吉野の瀧の常磐の常ならぬかも

山部宿禰赤人が詠める歌二首幷短歌

九二三　八隅知しわご大王の、高知らす芳野の宮は、畳づく青垣隱り、河次の清き河内ぞ、春べは花咲きをゝり、秋されば霧立ち渡る、その山の彌益々に、この河の絶ゆる事無く、百しきの大宮人は、常に通はむ

反歌　二首

九二四　み吉野の象山の際の木末には幾許も騒ぐ鳥の聲かも
九二五　烏玉の夜の更けぬれば久木生ふる清き河原に千鳥數鳴く
九二六　安みしゝわご大王は、み吉野の飽津の小野の、野の上には跡見居ゑ置きて、御山には射部立て渡し、朝獵に鹿猪履み起し、夕狩に鳥踏み立て、馬並めて御獵ぞ立たす、春の茂野に

反歌　一首

九二七　足引の山にも野にも御獵人得物矢手挾み散動ぎたり見ゆ

右、前後を審にせず、但便を以ての故に此次に載す、

冬十月、難波の宮に幸せる時、笠朝臣金村が詠める歌一首幷短歌

九二八　忍照る難波の國は、葦垣の古りにし鄕と、人皆の念ひ息みて、つれも無く有りし間に、續麻なす長柄の宮に、眞木柱太高敷きて、食す國を治め賜へば、奥つ鳥味經の原に、物部の八十伴の雄は、廬して都となれり、旅にはあれども

反歌　二首

九二九　荒野らに里は有れども大王の敷きます時は京師となりぬ
九三〇　海未通女棚無し小舟榜ぎ出らし旅の宿りに梶の音聞ゆ

車持朝臣千年が詠める歌一首幷短歌

九三一　鯨魚取り濱邊を清み、打靡き生ふる玉藻に、朝なぎに千重浪より、夕なぎに五百重浪よる、奥つ浪いやます〳〵に、邊つ浪のいや重々に、月にけに日々に見がほし、今のみにあき足らめやも、白浪のいさきもとへる、住吉の濱

反歌　一首

九三二　白浪の千重に來よする住吉の岸の黄土生に匂ひて行かな

山部宿禰赤人の詠める歌一首并短歌

九三三　天地の遠きが如く、日月の長きが如く、おし照る難波の宮に、わご大王國知らすらし、御食つ國日々の御調と、淡路の野島の海子の、海の底奥つ海中石に、鰒珠多に潜き出、船並めて仕へ奉るか、貴し見れば

反歌　一首

九三四　朝なぎに梶の音聞ゆ三食津國野島の海子の船にしあるらし

三年丙寅秋九月十五日、播磨の國印南野に幸せる時、笠朝臣金村が詠める歌一首并短歌

九三五　名寸隅の船瀬ゆ見ゆる、淡路島松帆の浦に、朝凪に玉藻刈りつゝ、夕凪に藻鹽燒きつゝ、海未通女有りとは聞けど、見に行かむ由の無ければ、大夫の情は無しに、手弱女の念ひたわみて、徘徊り吾はぞ戀ふる、船梶を無み

反歌　二首

九三六　玉藻刈る海未通女ども見に行かむ船梶もがも浪高くとも

九三七　往きかへり見とも飽かめや名寸隅の船瀬の濱に重る白浪

山部宿禰赤人が詠める歌一首并短歌

九三八　八隅知し吾が大王の、神ながら高知らせる、稻見野の大海の原の、荒妙の藤江の浦に、鮪釣ると海人船騷ぎ、鹽燒くと人ぞ多なる、浦を吉みうべも釣りはす、濱を吉みうべも鹽燒く、あり通ひ御覽も著し、清き白濱

反歌　三首

九三九　奥つ浪邊波靜けみ漁りすと藤江の浦に船ぞ騷げる

九四〇　いなみ野の淺茅押しなべさ宿る夜の氣長くしあれば家し偲ばゆ

九四一　明石潟潮干の道を明日よりは下咲ましけむ家近附けば

辛荷の島を過ぐる時、山部宿禰赤人が詠める歌一首并短歌

九四二　あぢさはふ妹が目かれて、敷細の枕もまかず、櫻皮纏き作れる舟に、眞梶貫き吾が漕ぎ來れば、淡路の野島も過ぎ、いなみ嬬辛荷の島の、島の際ゆ吾宅を見れば、青山のそこともの見えず、白雲も千重になり來ぬ、漕ぎ回る浦の盡、往き隱る島の埼々、隈も置かず思ひぞ

吾が來る、旅の氣長み

反歌　三首

九四三　玉藻刈る辛荷の島に島回する鵜にしもあれや家念はざらむ

九四四　島隱り吾が榜ぎ來れば羨しかも倭へ上る眞熊野の船

九四五　風吹けば浪か立たむと伺候に都多の細江に浦隱り居り

敏馬の浦を過ぐる時、山部宿禰赤人が詠める歌一首并短歌

九四六　御食向ふ淡路の島に、直向ふ敏馬の浦の、沖べには深海松採み、浦回には名告藻苅り、深海松の見まく欲しけど、莫告藻の己が名惜しみ、間使も遣らずて吾は、生けるとも無し

反歌　一首

九四七　須磨の海人の鹽燒衣の馴れなばか一日も君を忘れて念はむ

右作歌、年月いまだ詳ならず、但類を以ての故に此次に載す、

四年丁卯春正月、諸王諸臣子等に勅して、授刀寮に散ち禁め給へる時に詠める歌一首并短歌

九四八　眞葛延ふ春日の山は、打靡く春去り行くと、山のへに霞棚引き、高圓に鶯鳴きぬ、物部の八十伴緒は、雁がねの來つぎこの頃、斯くつぎて常にありせば、友並めて遊ばむものを、馬並めて行かまし里を、待ち難てに吾がせし春を、かけまくもあやに恐し、言はまくも忌

忌しからむと、豫め兼ねて知りせば、千鳥鳴くその佐保川に、石に生ふる菅の根取りて、慕ぶ草拂ひてましを、行く水に身滌ぎてましを、天皇の御命恐み、百磯城の大宮人の、玉桙の道にも出でず、戀ふる此頃

反歌　一首

九四九　梅柳過ぐらく惜しみ佐保のうちに遊びし事を宮もとどろに

右、神龜四年正月、數王子及諸臣子等、春日野に集ひて打毬の樂を作す、其日忽に天陰り雨ふり雷電す、此時宮中に侍從及び侍衛無し、勅して刑罰に行ひ、皆授刀寮に散禁して妄に道路に出づるを得ざらしむ、時に悒憤して卽ちこの歌を作る、作者未詳ならず、

五年戊辰、難波の宮に幸せる時詠める歌四首

九五〇　大王の界ひ賜ふと山守居ゑ守るちふ山に入らずは止まじ

九五一　見渡せば近き物から石隱り耀よふ珠を取らずは止まじ

九五二　韓衣着ならの里の君待つに玉をし付けむ好き人もがも

九五三　さを鹿の鳴くなる山を越え行かむ日だにや君に將た逢はざらむ

右笠朝臣金村の歌中に出づ、或は云ふ、車持朝臣千年作れり、

譜　王の歌一首

九六四　朝には海邊にあさりし夕されば倭へ越ゆる雁し羨しも

右、作歌の年月審ならず、但歌の類を以て便に此次に載す、

太宰少貳石川朝臣足人が歌一首

九六五　さす竹の大宮人の家と住む佐保の山をば思ふやも君

帥大伴卿の和へ給へる歌一首

九六六　八隅知し君が大王の食す國は日本もこゝも同じとぞ思ふ

冬十一月、太宰の官人等、香椎の廟を拜み奉り訖へて退歸れる時、香椎の浦に馬駐めて各々懷を述べて詠める歌

帥大伴卿の歌一首

九六七　いざ兒等香椎の潟に白妙の袖さへ沾れて朝菜摘みてむ

大貳小野老朝臣が歌一首

九六八　時つ風吹くべく成りぬ香椎潟潮干の浦に玉藻刈りてな

豐前守宇奴首男人が歌一首

九六九　往還り常に吾が見し香椎潟明日ゆ後には見む緣もなし

帥大伴卿の芳野の離宮を遥思びて詠み給へる歌一首

九六〇　隼人の湍門の磐も年魚走る芳野の瀧に尙ほ及かずけり

帥大伴卿の次田温泉に宿りて鶴が音を聞きて詠み給へる歌一首

九六一　湯の原に鳴く葦鶴は吾が如く妹に戀ふれや時別かず鳴く

天平二年庚午、勅して駿馬を擢ぶ使大伴道足宿禰を遣はせる時の歌一首

九六二　奥山の磐に蘿生し恐くも問ひ給ふかも思ひ敢へなくに

右勅使大伴道足宿禰を帥の家に饗す、此日衆諸を會集し、驛使葛井連廣成を相誘ひ、歌詞を作るべきを言ふ、登時廣成聲に應じ、卽ち此歌を吟へりき、

冬十一月大伴坂上郎女が帥の家より上道して、筑前國宗形郡名兒山を超ゆる時詠める歌一首

九六三　大穴牟遲少名毘古那の、神こそは名づけ始めけめ、名のみを名兒山と負ひて、吾が戀の千重の一重も、慰めなくに

同じ坂上郎女が京に上る海路にて濱の貝を見て詠める歌一首

九六四　吾が背子に戀ふれば苦し暇あらば拾ひて行かむ戀忘貝

冬十二月太宰帥大伴卿の京に上り給ふ時、娘子が詠める歌二首

九六五　凡ならば兎も角も爲むを恐みと振りたき袖を忍びてあるかも

九六六　大和路は雲隱りたり然れども我が振る袖を無禮と思ふな

右太宰師大伴卿の大納言に兼任され京に向らんとして上道し給ふ、此日水城に馬駐めて府家を顧望す、時に卿を送る府吏の中に遊行女婦あり、其の名を兒島といふ、於是娘子此別れ易きを傷み、彼の會ひ難きを嘆き、涕を拭ひ自ら袖を振るの歌を吟ふ、

大納言大伴卿の和へ給へる歌二首

九六七　大和道の吉備の兒島を過ぎて行かば筑紫の兒島思ほえむかも
九六八　丈夫と思へる吾や水莖の水城の上に涕拭はむ

三年辛未、大納言大伴卿の寧樂の家に在りて故郷を思びて詠み給へる歌二首

九六九　須臾も行きて見てしか神名火の淵は淺せにて瀬にかなるらむ
九七〇　指進の栗栖の小野の萩が花散らむ時にし行きて手向けむ

四年壬申、藤原宇合卿の西海道節度使に遣さるゝ時、高橋連蟲麿が詠める歌一首幷短歌

九七一　白雲の龍田の山の、露霜に色附く時に、打超えて旅行く君は、五百重山い行き踏み、賊守る筑紫に至り、山の至極野の至極見せと、伴の部を班ち遣し、山彦の應へむ極、谷蟇のさ渡る極、國狀を見し給ひて、冬木成春來り行かば、飛鳥の早還り來ね、龍田道の丘邊の路に、丹躑躅の匂はむ時の、櫻花咲きなむ時に、山たづの迎へ參出む、君が來ますば

反歌　一首

九七二　千萬の軍なりとも言擧げせず取りて來ぬべき男とぞ念ふ

天皇（聖武）の節度使の卿等に贈酒へる御歌一首幷短歌

九七三　食す國の遠の朝廷に、汝等し如是退去りなば、平らけく吾は遊ばむ、手抱きて我は御在さむ、天皇朕が高嚴の御手以ち、搔撫でぞ勞ぎ賜ふ、打撫でぞ勞ぎ賜ふ、還り來む日相飲まむ酒ぞ、此豐御酒は

反歌　一首

九七四　大夫の行く云ふ道ぞ凡ろかに思ひて行くな大夫の伴

中納言安倍廣庭卿の歌一首

九七五　如是しつゝ在らくを好みぞ靈剋短き命を長く欲りする

五年癸酉草香山を超ゆる時、神社忌寸老麿が詠める歌二首

九七六　難波潟潮干の餘波よく見てむ家なる妹が待ち問はむ爲め
九七七　直超の此道にして押照るや難波の海と名附けゝらしも

山上臣憶良が沈痾れる時の歌一首

九七八　士やも空しかるべき萬代に語り續ぐべき名は立てずして

右一首、山上憶良臣沈痾の時、藤原朝臣八束、河邊朝臣東人を遣して疾む所の狀を問はしむ、

是に於て憶良臣、報語已に畢り、須らくあつて涕を拭ひ悲嘆この歌を口吟す、

大伴坂上郎女が姪家持が佐保より西宅に歸る時に贈れる歌一首

九七九　吾が背子が著る衣薄し佐保風は痛くな吹きそ家に至るまで

安倍朝臣蟲麿が月の歌一首

九八〇　雨隱り三笠の山を高みかも月の出で來ぬ夜は更ちつゝ

大伴坂上郎女が月の歌三首

九八一　獵高の高圓山を高みかも出で來む月の遲く光るらむ

九八二　烏玉の夜霧の立ちて不清しく照れる月夜の見れば悲しさ

九八三　山の端のさゝら愛壯子天の原門渡る光見らくし好しも

豐前國の娘子が月の歌一首

九八四　雲隱り行方をなみと吾が戀ふる月をや君が見まく欲りする

湯原王の月の歌二首

九八五　天に座す月讀壯子幣はせむ今夜の長さ五百夜繼ぎこそ

九八六　愛しきやしま近き里の君來むと言ふ表にかも月の照らせる

藤原八束朝臣が月の歌一首

九八七　待ち難に我がする月は妹が着る三笠の山に隱りたりけり

市原王の宴に父安貴王を禱ぎませる歌一首

九八八　春草は後は散り易し巖なす常磐に座せ貴き吾君

湯原王の打酒の歌一首

九八九　燒刀の稜打放ち丈夫の禱ぐ豐御酒に吾醉ひにけり

紀朝臣鹿人が跡見茂岡の松の樹の歌一首

九九〇　茂岡に神さび立ちて榮えたる千代松の樹の歲の知らなく

同じ鹿人が泊瀨河の邊に至りて詠める歌一首

九九一　石走り激ち流るゝ泊瀨川絶ゆることなく又も來て見む

大伴坂上郎女が元興寺の里を詠める歌一首

九九二　古鄕の飛鳥はあれど靑丹吉平城の明日香を見らくし好しも

同じ坂上郎女が初月の歌一首

九九三　月立ちて唯三日月の眉根搔き月日長く戀ひし君に逢へるかも

大伴宿禰家持が初月の歌一首

九九四　振放けて若月見れば一目見し人の眉引思ほゆるかも

大伴坂上郎女が親族と宴せる歌一首

九九五　如是しつゝ遊び飲みこそ草木すら春は咲きつゝ秋は散りぬる

六年甲戌、海犬養宿禰岡麿が勅を應りて詠める歌一首

九九六　御民吾生ける驗あり天地の榮ゆる時に遇へらく思へば

春三月、難波宮に幸せる時の歌六首

九九七　住吉の粉濱の蜆開けも見ず隱りのみやも戀ひわたりなむ

右の一首は作者未詳

九九八　眉の如雲居に見ゆる阿波の山懸けて搖ぐ舟泊知らずも

右の一首は船王のよめる

九九九　血沼回より雨ぞ降り來る四八津の海人網手乾したり沾れ敢へむかも

右一首は住吉濱に遊覽びて宮に還り給へる時の道にて、守部王の詔を應りて詠み給へる歌

一〇〇〇　兒等があらば二人聞かむを沖つ洲に鳴くなる鶴の曉の聲

右の一首は守部王の詠みたまへる

一〇〇一　大夫は御獵に立たし未通女等は赤裳裾引く清き濱邊を

右の一首は山部宿禰赤人が詠める

一〇〇二　馬の歩押へ止駐めよ住吉の岸の黃土に匂ひて行かむ

右の一首は安部朝臣豐繼が詠める

筑後守外從五位下葛井連大成が海人の釣船を遥見けて詠める歌一首

一〇〇三　海人少女玉求むらし沖つ浪恐き海に船出せり見ゆ

桉作村主益人が歌一首

一〇〇四　思ほえず來ませる君を佐保川の河蝦聞かせず還しつるかも

右、內匠寮大屬桉作村主益人、聊飲饌を設け、以て長官佐爲王を饗す、未日斜なるに及ばず、王既に還歸す、時に益人、厭かずして歸らるを怜惜して、仍りて此歌を作る、

八年丙子夏六月、芳野の離宮に幸せる時、山部宿禰赤人が詔を應りて詠める歌一首并短歌

一〇〇五　八隅知し我が大君の、見し給ふ芳野の宮は、山高み雲ぞ棚引く、河速み瀨の音ぞ清き、神さびて見れば貴く、宜しなべ見れば清けし、此山の盡きばのみこそ、此河の絶えばのみこそ、百敷の大宮所、止む時もあらめ

反歌一首

一〇〇六　神代より芳野の宮に在り通ひ高知らせるは山河を好み

市原王の獨子を悲み給へる歌一首

一〇〇七　言問はぬ木すら妹と背有り云ふを唯獨子にあるが苦しさ

忌部首黒麿が友の來ること遲きを恨むる歌一首

一〇〇八　山の端に猶豫ふ月の出でむかと我が待つ君が夜は更ちつゝ

冬十一月、左大辨葛城王等に橘氏を賜へる時御製歌一首

一〇〇九　橘は實さへ花さへ其葉さへ枝に霜降れど益常葉の樹

右、冬十一月九日、從三位葛城王、從四位上佐爲王等、皇族の高名を辭して、外家の橘姓を賜ふこと已に訖りぬ、時に太上天皇、皇后、共に皇后宮に在り、以て肆宴を爲し、卽ち橘をほぐ歌をつくりたまひ幷に御酒を宿禰等に賜ひき、或は云ふ、此歌一首、太上天皇の御歌なり、但天皇皇后の御歌各一首ありといへり、其歌遺落して未採求するを得ず、今案内を檢するに、八年十一月九日、葛城王等橘宿禰の姓を願ひて表を上る、十七日を以て、表に依りて乞ひて橘宿禰を賜ふ、橘宿禰奈良麿が詔を應りて詠める歌一首

一〇一〇　奥山の眞木の葉凌ぎ降る雪の降りは益すとも地に落ちめやも

冬十二月十二日歌儛所の諸王臣子等、葛井連廣成が家に集ひて宴せる歌二首

比來古儛盛に興り、古歳漸く晩る、理宜しく共に古情を盡し同じく此歌を唱ふべし、故に此趣に擬し、輙ち古曲二節を獻ず、風流意氣の士、儻し此集の中に在らば發念を爭つて、心々古體に和せよ、

一〇一一　我宿の梅咲きたりと告げやらば來云ふに似たり散りぬとも好し

一〇一二　春來れば撓りに撓り鶯の鳴く我が前栽ぞ止まず通はせ

九年丁丑春正月、橘少卿并諸大夫等の、彈正尹門部王の家に集ひて宴せる歌二首

一〇一三　豫め君來ますと知らませば門に屋戸にも珠敷かましを

右の一首は主人門部王後姓大原眞人氏を賜へり

一〇一四　一昨日も昨日も今日も見つれども明日さへ見まく欲しき君かも

右の一首は橘宿禰文成卽少卿の子なり

榎井王の後に追ひて和へ給へる歌一首

一〇一五　玉敷きて待たえしよりは不意に來る今夜し樂しく思ほゆ

春二月、諸大夫等左少辨巨勢宿奈麻呂朝臣の家に集ひて宴せる歌一首

一〇一六　海原の遠き渡を遊士の遊ぶを見むと浮ひぞ來し

右の一首は、白紙に書きて屋の壁に懸け著けたり、題して云はく、蓬萊仙媛作る所の囊嚢、風流秀才之士の爲にす、斯凡客の望み見る所ならざらむか、

夏四月、大伴坂上郎女が賀茂神社を拜み奉れる時、便ち相坂山を超え近江の海を望見けて、晩頭に還り來る時詠める歌一首

一〇一七　木綿疊手向の山を今日越えて何れの野邊に廬せむ吾等

十年戊寅、元興寺の僧が自ら嘆く歌一首

一〇一八　白珠は人に知らえず知らずともよし知らずとも吾し知れらば知らずともよし

右の一首、或は云ふ、元興寺の僧、獨覺めて智多けれども、未顯聞するところあらず、衆諸狎侮す、此に因りて此歌を作る、自ら身の才を歎くなり、

石上乙麿卿の土佐國に配えし時の歌三首幷短歌

一〇一九　石の上振の尊は、弱女の惑に緣りて、馬自物繩取り附け、鹿自物弓箭圍みて、大君の命恐み、天離る夷邊に退る、古衣眞土の山ゆ、還り來ぬかも

一〇二〇　大君の命恐み、刺並の國に出座す、愛しきやし吾が背の君を、懸けまくも忌憚し恐し、住吉の荒人神、船の舳に領き賜ひ、附き給はむ島の埼々、依り賜はむ磯の埼々、荒き浪風に遇はせず、恙なく身疾あらず、速けく還し賜はね、本の國邊に

一〇二一　右の二首は石上卿の妻が詠める

父君に吾は最愛子ぞ、妣刀自に吾は最愛子ぞ、參上り八十氏人の、手向する恐の坂に、幣奉り吾はぞ退る、遠き土佐道を

反歌　一首

一〇二二　大埼の神の小濱は狹けども百船人も過ぐと云はなくに

右の二首は石上卿の詠める

秋八月二十日、右大臣橘家に宴せる歌四首

一〇二四　長門なる沖つ借島奥まへて吾が思ふ君は千歲にもがも

右の一首は長門守巨曾倍對馬朝臣

一〇二五　奥まへて吾を思へる吾が背子は千年五百歲ありこせぬかも

右の一歌は右大臣の和へ給へる歌

一〇二六　百磯城の大宮人は今日もかも暇をなみと里に出でざらむ

右の一首は右大臣傳へ云り給はく故豐島采女が歌

一〇二七　橘の本に道履み八衢に物をぞ思ふ人に知らえず

右の一歌は右大辨高橋安麿卿語りけらく故豐島采女が詠めるなり、（但或本に云ふ、三方沙彌、妻苑臣を戀ひて作れる歌也、然らば卽ち豐島采女が歌）

十一年己卯、天皇の高圓野に遊獵し給へる時、小さき獸堵里の中に泄走る、於是勇士に適値て生きながら獲らえぬ、卽ち此獸を御在所に獻上る時、副ふる歌一首（獸の名、俗に牟射佐奴といふ）

采女、當時當所此歌を口吟めるか、

一〇二八　大夫が高圓山に迫めたれば里に下りける鼯鼠ぞこれ

右の一歌は大伴坂上郎女が作めるなり、（但未奏を經ずして小獸死し斃れぬ、此に因りて獻る歌は之を停めぬ、）

十二年庚辰冬十月、太宰少貳藤原朝臣廣嗣が反謀けむとして軍を發せるに依りて、伊勢國に幸せる時、河口の行宮にて內舍人大伴宿禰家持が詠める歌一首

一〇二九 河口の野邊に廬りて夜の歷れば妹が袂し思ほゆるかも

天皇御製歌一首

一〇三〇 妹に戀ひ吾が松原よ見わたせば潮干の潟に鶴鳴き渡る

丹比屋主眞人が歌一首

一〇三一 後れにし人を思ばく四泥の埼木綿取り垂でゝ行かむとぞ思ふ

獨り行宮に殘れ居て大伴宿禰家持が詠める歌二首

一〇三二 天皇の行幸の隨に吾妹子が手枕纏かず月ぞ歷にける

一〇三三 御食國志摩の海人ならし眞熊野の小船に乘りて沖邊榜ぐ見ゆ

美濃國多藝の行宮にて大伴宿禰東人が詠める歌一首

一〇三四 古よ人の言ひける老人の變若つ云ふ水ぞ名に負ふ瀧の瀨

大伴宿禰家持が詠める歌一首

一〇三五 田跡川の瀧を清みか古ゆ宮仕へけむ多藝の野の上に

不破の行宮にて大伴宿禰家持が詠める歌一首

一〇三六 關なくば還りにだにも打行きて妹が手枕纏きて宿ましを

十五年癸未秋八月十六日、內舍人大伴宿禰家持が久邇京を讃へて詠める歌一首

一〇三七 今造る久邇の都は山河の清けき見れば住べ知らすらし

高丘河內連が歌二首

一〇三八 故郷は遠くもあらず一重山越ゆるが故に思ひぞ我が爲し

一〇三九 吾背子と二人し居れば山高み里には月は照らずともよし

安積親王の左少辨藤原八束朝臣が家に宴し給ふ日、內舍人大伴宿禰家持が詠める歌一首

一〇四〇 久方の雨は降り重け念ふ子が宿に今夜は明して行かむ

十六年甲申春正月五日、諸卿大夫、安倍蟲麻呂朝臣が家に集ひて宴せる歌一首

一〇四一 吾が宿の君松の樹に降る雪の行きには行かじ待ちにし待たむ

同じ月十一日、活道岡に登り一株松の下に集ひて飲せる歌二首

一〇四二 一つ松幾代か歷ぬる吹く風の聲の清めるは年深みかも

右の一首は市原王の詠み給へる

一〇四三 尅靈壽は知らず松が枝を結ぶ心は長くとぞ念ふ

右の一首は大伴宿禰家持が詠める

寧樂京の荒墟を傷惜みて詠める歌三首 作者審ならず

一〇四四 紅に深く染みにし心かも寧樂の京師に年の歴ぬべき

一〇四五 世の中を常なきものと今ぞ知る平城の京師の移徒ふ見れば

一〇四六 石綱の又變若返り青丹吉奈良の都を又見なむかも

寧樂京の故郷を悲み詠める歌一首幷短歌

一〇四七 八隅知し我大君の、高敷かす日本の國は、皇祖の神の御代より、敷きませる國にしあれば、生れまさむ御子の嗣繼、天の下知し召さむと、八百萬千年を兼ねて、定めけむ平城の京師は、炎の春にし成れば、春日山三笠の野邊に、櫻花木の陰隱り、貌鳥は間なく數鳴く、露霜の秋さり來れば、射鉤山飛火が嶽に、萩の枝を繁搦み散らし、さ牡鹿は妻呼び響め、山見れば山も見が欲し、里見れば里も住み好し、物負の八十伴緒の、打延へて里並み重けば、天地の依り會ひの極、萬代に榮え行かむと、思ひにし大宮すらを、恃めりし奈良の京を、新世の事にしあれば、大君の引の隨意に、春花の移ひ易り、村鳥の朝立ち行けば刺竹の大宮人の、蹈平し通ひし道は、馬も行かず人も行かねば、荒れにけるかも

反歌 二首

一〇四八 立易り古き京と成りぬれば道の芝草長く生ひにけり

一〇四九 馴着きにし奈良の京の荒れ行けば出で立つ毎に嘆きし益る

久邇新京を讃ふる歌一首幷短歌

一〇五〇 現神我大君の、天の下八洲の内に、國はしも多くあれども、里はしも多にあれども、山並の宜しき國と、川次の立合ふ里と、山城の鹿背山の際に、宮柱太敷き奉り、高知らす布當の宮は、河近み瀬の音ぞ清き、山近み鳥が音響む、秋來れば山も動響に、さ牡鹿は妻呼び響め、春來れば岡邊も繁に、巖には花開き撓り、嗚呼柯怜布當の原、甚貴と大宮處、諸しこそ吾が大君は、君の隨に聞かし給ひて、刺竹の大宮此處と、定めけらしも

反歌 二首

一〇五一 三日の原布當の野邊を清みこそ大宮所定めけらしも

一〇五二 山高く川の瀬清し百世まで神しみ行かむ大宮所

一〇五三 吾が大君神の命の、高知らす布當の宮は、百樹茂る山は木高し、落ちたぎつ瀬の音も清し、鶯の來鳴く春邊は、巖には山下耀り、錦なす花咲き撓り、さ牡鹿の妻呼ぶ秋は、天霧ふ時雨を疾み、さ丹づらふ黄葉散りつゝ、八千年に顯れ齋かしつゝ、天の下知ろし食さむと、百代にも易るべからぬ、大宮處

反歌五首

一〇五四 泉川行く瀬の水の絶えばこそ大宮處遷ろひ行かめ

一〇五五 布當山山並見れば百代にも變るべからぬ大宮處

一〇五六 少女等が績苧繫く云ふ鹿背の山時し行ければ都となりぬ

一〇五七 鹿背の山木立を繁み朝去らず來鳴き響す鶯の聲

一〇五八 狛山に鳴く霍公鳥泉河渡を遠み此處に通はず

春日三香原の荒墟を悲傷みて詠める歌一首幷短歌

一〇五九 三香の原久邇の京師は、山高み河の瀬清み、在り吉しと人は云へども、住み吉しと吾は思へど、故去し里にしあれば、國見れど人も通はず、里見れば家も荒れたり、愛しけやし斯くありけるか、三緒齋く鹿背山の際に、咲く花の色愛らしく百鳥の聲懐しき、在りが欲し住み吉き里の、荒るらく惜しも

反歌二首

一〇六〇 三香の原久邇の京は荒れにけり大宮人の遷ろひぬれば

一〇六一 咲く花の色は變らず百石城の大宮人ぞ立易りぬる

難波宮にて詠める歌一首幷短歌

一〇六二 安見知し吾が大君の、在通ふ難波の宮は、鯨魚取り海片附きて玉拾ふ濱邊を近み、朝羽振る浪の音騒ぎ、夕凪に楫の音聞ゆ、曉の寐覺に聞けば、海近み潮干の共、浦渚には千鳥妻呼び、葦邊には鶴か音動む、視る人の語にすれば、聞く人の見まく欲りする、御食向ふ味原の宮は、見れど飽かぬかも

反歌二首

一〇六三 在通ふ難波の宮は海近み漁童女等が乘れる船見ゆ

一〇六四 潮干れば葦邊に騒ぐ白鶴の妻呼ぶ聲は宮も動響に

敏馬の浦を過ぐる時詠める歌一首幷短歌

一〇六五 八千桙の神の御世より、百船の泊つる湊と、八洲國百船人の、定めてし敏馬の浦は、朝風に浦浪騒ぎ、夕浪に玉藻は來寄る、白沙清き濱邊は、往還り見れども飽かず、宜しこそ見る人毎に、語り繼ぎ偲びけらしき、百世歴て偲ばえ行かむ、清き白濱

反歌二首

一〇六六 眞十鏡敏馬の浦は百船の過ぎて行くべき濱ならなくに

一〇六七 濱清み浦愛しみ神代より千船の泊つる大和田の濱

右の二十一首は田邊福麿の歌集中に出づ、

卷六終

卷七

雜歌

詠天

一〇六八　天の海に雲の波立ち月の船星の林に揕ぎ隱る見ゆ

右の一首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ。

詠月

一〇六九　常は嘗て思はぬものを此の月の過ぎ匿れまく惜しき夕かも

一〇七〇　丈夫の弓末振り起し借高の野邊さへ清く照る月夜かも

一〇七一　山の端に猶豫ふ月を出でむかと待ちつゝ居るに夜ぞ更ちける

一〇七二　明日の夕照らむ月夜は片よりに今夜に因りて夜長からなむ

一〇七三　玉垂の小簾の間通し獨り居て見る驗なき夕月夜かも

一〇七四　春日山押して照らせる此月は妹が庭にも清けかるらし

一〇七五　海原の道遠みかも月讀の明少き夜は更ちつゝ

一〇七六　百磯城の大宮人の退り出て遊ぶ今夜の月の清けさ
一〇七七　夜干玉の夜わたる月を止めむに西の山邊に關もあらぬかも
一〇七八　此月の此處に來れば今とかも妹が出で立ち待ちつゝあらむ
一〇七九　眞十鏡照る可き月を白妙の雲か隱せる天つ霧かも
一〇八〇　久方の天照る月は神代にか出でかへるらむ年は經につゝ
一〇八一　烏玉の夜渡る月を何怜み吾が居る袖に露ぞ置きにける
一〇八二　水底の玉さへ清く見つべくも照る月夜かも夜の更けぬれば
一〇八三　霜ぐもり爲とにかあらむ久方の夜わたる月の見えなく思へば
一〇八四　山の端に猶豫ふ月を何時とかも吾が待ち居らむ夜は更けにつゝ
一〇八五　妹が邊吾が袖振らむ木の間より出で來る月に雲な棚引き
一〇八六　靫懸くる伴の緒廣き大伴に國榮えむと月は照るらし

詠レ雲

一〇八七　痛足河河波立ちぬ卷向の弓月が嶽に雲居立つらし
一〇八八　足引の山河の瀨の響る並に弓月が嶽に雲立ち渡る

右の二首は柿本朝臣人麿歌集に出づ

一〇八九　大海に島もあらなくに海原の搖蕩ふ浪に立てる白雲

右の一首は伊勢從駕作

詠レ雨

一〇九〇　吾妹子が赤裳の裾の濕づゝらむ今日の小雨に吾さへ沾れな
一〇九一　通るべく雨はな降りそ吾妹子が形身の衣吾下に著り

詠レ山

一〇九二　鳴る神の音のみ聞きし卷向の檜原の山を今日見つるかも
一〇九三　御室の其山並に兒等が手を卷向山は繼の宜しも
一〇九四　我が衣色に染めなむ味酒三室の山は黃葉しにけり

右の三首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ

一〇九五　御室齋く三輪山見れば隱口の泊瀨の檜原思ほゆるかも
一〇九六　古の事は知らぬを我見ても久しく成りぬ天の香具山
一〇九七　吾背子をいで巨勢山と人は言へど君も來ますず山の名にあらし
一〇九八　紀道にこそ妹山ありと云へ三櫛笥の二上山も妹こそありけれ

詠レ岳

一〇九九　片岡の此向つ峯に椎蒔かば今年の夏の陰になみむか

詠レ河

一一〇〇　巻向の痛足の川ゆ行く水の絶ゆることなく又反り見む

一一〇一　黒玉の夜さり來れば巻向の川音高しも嵐かも疾き

右の二首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ、

一一〇二　大君の三笠の山の帶にせる細谷川の音の清けさ

一一〇三　今しきは見めやと念ひし三芳野の大河淀を今日見つるかも

一一〇四　馬並めて三芳野川を見まく欲り打越え來てぞ瀧に遊びつる

一一〇五　風聞に聞き目には未だ見ぬ吉野川六田の淀を今日見つるかも

一一〇六　河蝦鳴く清き河原を今日見てば何時か越し來て見つゝ偲ばむ

一一〇七　泊瀬川白木綿花に落ち激水つ瀬を清けみと見に來し吾を

一一〇八　泊瀬川流るゝ水脉の瀬を早み井手越す浪の音の清けく

一一〇九　さ檜の隈檜隈川の瀬を早み君が手取らば言緣せむかも

一一一〇　五百種蒔く新墾の小田を求めむと足結は沾れぬ此川の瀬に

一一一一　古も如此聞きつゝや偲びけむ此古河の清き瀬の音を

一一一二　はね蔓今爲る妹をうら若みいざ率川の音の清けさ

一一一三　この小川霧棚引けり落ち激水つ走井の上に言擧げせねども

一一一四　吾が紐を妹が手以て結八川又還見む萬代までに

一一一五　妹が紐結八川内を古の人さへ見つゝ此處を偲びき

詠レ露

一一一六　烏玉の吾が黑髮に降り滯む天の露霜取れば消につゝ

詠レ花

一一一七　島廻すと磯に見し花風吹きて波は寄すとも取らずば止まじ

詠レ葉

一一一八　古に在りけむ人も吾が如か三輪の檜原に挿頭折りけむ

一一一九　行く川の過ぎにし人の手折らねば心詑れ立てり三輪の檜原は

右の二首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ

詠レ蘿

一一二〇　三芳野の青根が嶽の蘿席誰か織りけむ經緯無しに

詠レ草

二三二　妹がりと我が行く道の篠芒我し通はゞ靡け篠原

詠レ鳥

二三三　山の間に渡る小鴨の往きて居む其河の瀬に浪たつた努

二三三　佐保川の清き河原に鳴く千鳥河蝦と二つ忘れかねつも

二三四　佐保川に小驟る千鳥夜更ちて汝が聲聞けば宿ねがてなくに

思二故郷一

二三五　清き瀬に千鳥妻呼び山の間に霞たつらむ甘南備の里

二三六　年月も未だ經なくに明日香川瀬々ゆ渡しゝ石橋も無し

詠レ井

二三七　落激水走井の水の清くあれば渡らふ吾は去きがてぬかも

二三八　馬醉花なす榮えし君が穿りし井の石井の水は飲めど飽かぬかも

詠二和琴一

二三九　琴取れば嘆先立つ蓋しくも琴の下樋に妻や匿れる

芳野にて詠める

二三〇　神さぶる石根凝しき三芳野の水分山を見れば悲しも

二三一　皆人の戀ふる三吉野今日見れば宜も戀ひけり山川清み

二三二　夢の和太言にしありけり現にも見て來しものを思ひし思へば

二三三　皇祖神の神の宮人冬薯蕷葛彌常重くに吾反り見む

二三四　芳野川石常磐と常磐なす吾は通はむ萬代までに

山城にて詠める

二三五　宇治河は淀瀬無からし網代人舟呼ばふ聲遠近聞ゆ

二三六　宇治河に生ふる菅藻を河早み取らず來にけり裏に爲ましを

二三七　宇治人の譽の網代君しあらば今は依らまし木屑ならずとも

二三八　宇治川を船渡せをと呼ばへども聞えざるらし楫の音も爲ず

二三九　千早人宇治川波を清みかも旅行く人の立ち難てにする

攝津にて詠める

二四〇　志長鳥居名野を來れば有馬山夕霧立ちぬ宿は無くして

二四一　武庫の河水脉を早みと赤駒の足搔く激水に沾れにけるかも

二四二　生命を幸くあらむと石走る垂水の水を掬びて飲みつ

二四三　小夜更けて堀江搒ぐなる松浦船梶の音高し水脉早みかも

二四四 悔しくも滿ちぬる潮か住吉の岸の浦回ゆ行かましものを
二四五 妹が爲め貝を拾ふと血沼の海に沾れにし袖は乾せど干かず
二四六 愛しき人を我家に住吉の岸の黃土を見む因もがも
二四七 暇あらば拾ひに行かむ住吉の岸に寄る云ふ戀忘貝
二四八 馬並めて今日吾が見つる住吉の岸の黃土を萬代に見む
二四九 住吉に行きにし道に昨日見し戀忘貝言にしありけり
二五〇 住吉の岸に家もが沖に邊に寄する白波見つゝ偲ばむ
二五一 大伴の三津の濱邊を打ち洗し寄せ來る浪の行方知らずも
二五二 梶の音ぞ髣髴に爲なる海人少女沖つ藻刈りに船出すらしも
二五三 住吉の名兒の濱邊に馬並めて玉拾ひしく常忘らえず
二五四 雨は降り假廬は作る何暇に吾兒の潮干に玉は拾はむ
二五五 名兒の海の朝明の餘波今日もかも磯の浦回に亂れてあらむ
二五六 住吉の遠里小野の眞榛以ち摺れる衣の盛過ぎぬる
二五七 時つ風吹かまく知らに阿胡の海の朝明の潮に玉藻刈りてな
二五八 住吉の沖つ白浪風吹けば來寄する濱を見れば清しも

二五九 住吉の岸の松が根打ち曝し寄せ來る浪の音の清しも
二六〇 難波潟潮干に立ちて見渡せば淡路の島に鶴渡る見ゆ

羈旅にて詠める

二六一 家離り旅にしあれば秋風の寒き夕に雁鳴き渡る
二六二 圓方の湊の洲鳥浪立てば妻呼び立てゝ邊に近づくも
二六三 年魚市潟潮干にけらし知多の浦に朝搒ぐ舟も沖に寄る見ゆ
二六四 潮干れば共に潟に出鳴く鶴の聲遠ざかれ磯廻すらしも
二六五 夕凪に求食する鶴潮滿てば沖浪高み己妻呼ぶも
二六六 古にありけむ人の求めつゝ衣に摺りけむ眞野の榛原
二六七 求食すと磯に吾が見し莫告藻を何れの島の海人か刈るらむ
二六八 今日もかも沖つ玉藻は白浪の八重折るが上に亂れてあらむ
二六九 近江の海湊八十あり何處にか君が船泊て草結びけむ
二七〇 樂浪の連庫山に雲居れば雨ぞ降る云ふ反り來吾が夫
二七一 大御船泊てゝ伺ふ高島の三尾の勝野の渚し思ほゆ
二七二 何處にか舟乘しけむ高島の香取の浦ゆ漕出來し船

二七三　杣人の眞木流す云ふ丹生の川言は通へど船ぞ通はぬ
二七四　霰降り鹿島の崎を浪高み過ぎてや行かむ戀しきものを
二七五　足柄の筥根飛び超え行く鶴の羨しき見れば大和し思ほゆ
二七六　夏麻引く海上潟の沖つ洲に鳥は集けど君は音信もせず
二七七　若狹なる三方の海の濱清みい行き還らひ見れど飽かぬかも
二七八　印南野は行き過ぎぬらし天傳ふ日笠の浦に波立てり見ゆ
二七九　家にして吾は戀ひむな印南野の淺茅が上に照りし月夜を
二八〇　荒磯越す浪を恐み淡路島見ずや過ぎなむ許多近きを
二八一　朝霞止まず棚引く龍田山船出せむ日は吾れ戀ひむかも
二八二　海人小船帆かも張れると見るまでに鞆の浦回に浪立てり見ゆ
二八三　眞幸くて又還り見む丈夫の手に卷き持たる鞆の浦回を
二八四　鳥自物海に浮き居て沖つ浪立動ぐを聞けば數多悲しも
二八五　朝和に眞梶搖ぎ出て見つゝ來し三津の松原浪越に見ゆ
二八六　漁する海人少女等が袖通り沾れにし衣干せど乾かず
二八七　網引する海人とや見らむ飽浦の清き荒磯を見に來し吾を

二八八　山越えて遠津の濱の磯躑躅歸り來むまで含みてあり待て
二八九　大海に嵐な吹きそ志長鳥居名の湊に舟泊つるまで
二九〇　舟泊てゝ戕柯振立てゝ廬りせな子潟の濱邊過ぎがてぬかも
二九一　妹が門入り泉河の瀨を早み吾が馬躓く家思ふらしも
二九二　白妙に匂ふ眞土の山川に吾が馬滯む家戀ふらしも
二九三　背の山に直に向へる妹の山言聽せやも打橋渡す
二九四　紀の國の狹日鹿の浦に出で見れば海人の燈火浪の間ゆ見ゆ
二九五　麻衣著れば懷かし紀の國の妹背の山に麻蒔く吾妹

右の一首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ、

右の七首は藤原卿の作、未年月を審にせず、

二九六　裏もがと乞はゞ取らせむ貝拾ふ吾を沾すな沖つ白浪
二九七　手に取るが故に忘ると海人の曰ひし戀忘貝言にしありけり
二九八　求食すと磯に住む鶴明け行けば濱風寒み己妻喚ぶも
二九九　藻苅舟沖搖ぎ來らし妹が島形身の浦に鶴翔る見ゆ
三〇〇　吾が船は沖よな離り迎舟片待ちがてり浦ゆ搖ぎ遇はむ

二〇一 大海の水底響み立つ浪の寄せむと思へる磯の清けさ
二〇二 荒磯ゆも益して思へや玉の浦離る小島の夢にし見ゆる
二〇三 磯の上に爪木折り焚き汝が爲と吾が潜き來し沖つ白玉
二〇四 濱清み磯に吾が居れば見む人は海人とか見らむ釣もせなくに
二〇五 沖つ楫漸々な漕ぎ見まく欲り吾が爲る里の隱らく惜しも
二〇六 沖つ波邊つ藻纏き持ち寄せ來とも君に勝れる玉寄せめやも
二〇七 粟島に漕ぎ渡らむと思へども明石の門浪未だ騷げり
二〇八 妹に戀ひ吾が越え行けば勢能山の妹に戀ひずてあるが羨しさ
二〇九 人ならば母の最愛子ぞ麻毛吉紀の川の邊の妹と背の山
二一〇 吾妹子に吾が戀ひ行けば羨しくも並び居るかも妹と勢の山
二一一 妹が邊今ぞ吾が行く容顔のみだに吾に見せこそ言問はずとも
二一二 足代過ぎて絲鹿の山の櫻花散らずあらなむ還り來むまで
二一三 名草山言にしありけり吾が戀ふる千重の一重も慰めなくに
二一四 英多へ行く小爲手の山の眞木の葉も久しく見ねば苔生しにけり
二一五 玉津島能く見て行ませ青丹よし奈良なる人の待ち問はゞ如何

二一六 潮滿たば如何に爲むとか海の神が門渡る海人少女ども
二一七 玉津島見てし善けくも吾はなし京に行きて戀ひまく思へば
二一八 黑牛の海紅匂ふ百磯城の大宮人し拠りすらしも
二一九 和歌の浦に白浪立ちて沖つ風寒き夕は大和し思ほゆ
二二〇 妹が爲め玉を拾ふと紀の國の湯等の埼に此日暮しつ
二二一 吾が船の楫をばな引き大和より戀來し心未だ飽かなくに
二二二 玉津島見れども飽かず如何にして裏み持ち行かむ見ぬ人の爲め
二二三 海の底沖漕ぐ船を邊に寄せむ風も吹かぬか波立てずして
二二四 大葉山霞棚引き小夜更けて吾が船泊てむ湊知らずも
二二五 小夜更けて夜中の潟に鬱しく呼びし船人泊てにけむかも
二二六 神の崎荒磯も見えず浪立ちぬ何處ゆ行かむ避路は無しに
二二七 磯に立ち沖邊を見れば藻苅舟海人撈ぎ出らし鴨翔る見ゆ
二二八 風早の三穗の浦廻を撈ぐ舟の船人動ぐ浪立つらしも
二二九 吾が舟は明石の浦に撈ぎ泊てむ沖へな離り小夜更けにけり
二三〇 千磐破金の御崎を過ぎぬとも吾をば忘れじ志珂の皇神

一三一 天霧ひ日方吹くらし水莖の岡の湊に波立ち渡る

一三二 大海の波は畏し然れども神を齋ひて船出爲ば如何

一三三 少女等が織る機の上を眞楫以ち搔上げ栲島波の間ゆ見ゆ

一三四 潮早み磯囘に居れば漁する海人とや見らむ旅行く我を

一三五 浪高し如何に楫取水鳥の浮宿やすべき猶や搒ぐべき

一三六 夢のみに繼ぎて見えつゝ高島の磯越す波の頻々思ほゆ

一三七 靜けくも岸には波は寄せけるか此家通し聞きつゝ居れば

一三八 高島の阿渡川波は騷げども吾は家思ふ旅廬悲しみ

一三九 大海の石根動搖り立つ波の寄せむと思へる濱の清けく

一四〇 玉櫛笥見諸戸山を行きしかば面白くして古思ほゆ

一四一 黑玉の黑髮山を朝越えて山下露に沾れにけるかも

一四二 足引の山行き暮らし宿借らば妹立ち待ちて宿かさむかも

一四三 見渡せば近き里廻を徘徊り今ぞ吾が來し領巾振りし野に

一四四 少女等が放髮を木綿の山雲な棚引き家の邊見む

一四五 しかの海人の釣船の綱堪へがてに情に思ひて出でゝ來にけり

一四六 しかの海人の鹽燒く煙風を疾み立ちは上らず山に棚引く

右の件の歌は古集中に出づ、

一四七 大穴牟遲少御神の造營らしゝ妹勢の山は見らくし好しも

一四八 吾妹子と見つゝ偲ばむ沖つ藻の花開きたらば吾に告げこそ

一四九 君が爲め浮沼の池の菱採むと我が染衣沾れにけるかも

一五〇 妹が爲め菅の實採りに行きし吾山路に惑ひ此日暮らしつ

右の四首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ、

一五一 名兒の海を朝搒ぎ來れば海中に水手ぞ呼ぶなる何怜その水手

問答

一五二 佐保川に鳴くなる千鳥何しかも川原を偲び彌川上る

一五三 人こそは凡にも言はめ我が許多偲ぶ川原を標結ふな努

右の二首は鳥を詠める

一五四 神樂浪の志賀津の海人は吾なしに潜きはな爲そ浪たゝずとも

一五五 大船に楫しもあらなむ君なしに潜きせめやも浪たゝずとも

右の二首は海人を詠める

臨時

三二五五　月草に衣ぞ染める君が爲め斑の衣摺らむと思ひて

三二五六　春霞井の上よ直に道はあれど君に逢はむとたもとほり來も

三二五七　道の邊の草深百合の花咲みに咲ましゝ故に妻といふべしや

三二五八　默然あらじと事の慰に云ふ言を聞知れらくは辛くぞありける

三二五九　佐伯山卯の花持ちし愛女が手をし取りてば花は散るとも

三二六〇　不時に斑の衣着欲しきか島の榛原時節にあらねども

三二六一　山守の里へ通ひし山道ぞ茂くなりける忘れけらしも

三二六二　足引の山海石榴咲く疊峰越え鹿待つ君が齋ひ妻かも

三二六三　曉と夜烏鳴けど此山上の木末の上は未だ靜けし

三二六四　西の市に唯獨り出て眼並べず買へりし絹の商失計かも

三二六五　今年行く新防人か麻衣肩の紐は誰か取り見む

三二六六　大舟を荒海に搖ぎ出彌船たけ吾が見し兒等が目見は著しも

所に就けて思を發ぶる

三二六七　百師木の大宮人の踏みし跡所沖つ浪來寄らざりせば失せざらましを

右の十七首は古歌集に出づ、

三二六八　兒等が手を卷向山は常にあれど過ぎにし人に往き卷かめやも

三二六九　卷向の山邊響みて行く水の水沫の如し世の人吾は

右の二首は柿本朝臣人麿歌集に出づ、

物に寄せて思を發ぶる（旋頭歌）

三二七〇　釵後鞘に納野に葛引く吾妹、眞袖以ち著せてむとかも夏葛引くも

三二七三　住吉の波豆麻君が馬乘り衣、雜豆臘少女を座せて縫へる衣ぞ

三二七四　住吉の出見の濱の濱栄刈らさね、少女等赤裳裾濕ち行かまくも見む

三二七五　住吉の小田を刈らす兒奴隷かも無き、奴隷あれど妹が御爲と秋の田刈るも

三二七六　池の邊の小槻が下の細竹な刈りそね、其をだに君が形身に見つゝ偲ばむ

三二七七　天なる姫菅原の菅な刈りそね、彌那の綿か黑き髮に芥し付くも

三二七八　夏影の房の下に衣裁つ吾妹、裏設けて吾が爲め裁たば彌廣に裁て

三二七九　梓弓引津の邊なる莫告藻の花、摘むまでに逢はざらめやも莫告藻の花

三二八〇　擊日刺宮路を行くに吾が裳は破れぬ、玉の緒の思ひ亂れて家に在らましを

三二八一　君が爲め手力勞れ織りたる衣を、春來らば如何なる色に摺りてば好けむ

一二八二　橋立の倉椅山に立てる白雲、見まく欲り我がする並に立てる白雲

一二八三　橋立の倉椅川の石の橋はも、壯子時に我が渡せりし石の橋はも

一二八四　橋立の倉椅川の川の石著菅、我が刈りて笠にも編まず川の石著菅

一二八五　春日すら田に立ち疲る君は悲しも、若草の妻なき君が田に立ち疲る

一二八六　山城の久世の社の草な手折りそ、己が時と立ち榮ゆとも草な手折りそ

一二八七　青角髪依網の原に人も遇はぬかも、石走る淡海縣の物語せむ

一二八八　水門の葦の梢葉を誰か手折りし、吾が背子が袖振る見むと我ぞ手折りし

一二八九　垣越ゆる犬呼び來せて鳥獵する君、青山の葉繁き山邊馬安め君

一二九〇　海の底沖つ玉藻の莫告藻の花、妹と吾此處に在りと莫告藻の花

一二九一　此岡に草刈る兒等然かな刈りそね、ありつゝも君が來ますむ御馬草にせむ

一二九二　江林に宿る猪鹿やも求むるに能き、白妙の袖纏き上げて猪鹿待つ我が夫

一二九三　霰降り遠江の阿渡川楊、刈れゝども又も生ふ云ふ阿渡川楊

一二九四　朝月日向ひの山に月立てり見ゆ、遠妻を持たらむ人し見つゝ偲ばむ

右の二十三首は、柿本朝臣人麿の歌集に出づ、

一二九五　春日なる三笠の山に月の船出づ、遊士の飲む酒盃に影に見えつゝ

右の一首は古歌集に出づ、

行旅

一二九一　遠くありて雲居に見ゆる妹が家に早く到らむ歩め黒駒

右の一首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ、

譬喩歌

寄レ衣

一二九六　今造る斑の衣目に就きて吾は思ほゆ未だ着ねども

一二九七　紅に衣染めまく欲しけども着て匂はゞや人の知るべき

一二九八　かにかくに人は云ふとも織り次がむ我が機物の白麻衣

右の三首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ、

一三一一　橡の衣は人の何事なしと曰ひし時より着欲しく思ほゆ

一三一二　凡に吾し思はゞ下に着て穢れにし衣を取りて着めやも

一三一三　紅の濃染の衣下に着て上に取り着ば言なさむかも

一三一四　橡の解濯衣の怪しくも殊に着欲しけき此夕かも

一三二五 橘の島にし居れば河遠み曝さず縫ひし吾が下衣

寄レ絲

一三二六 河内女の手染の絲を絡り反し片絲にあれど絶えむと思へや

寄二日本琴一

一三二八 膝に伏す玉の小琴の事なくば甚だ許多吾戀ひめやも

寄レ弓

一三二九 陸奥の安太多良眞弓弦矧けて引かばか人の吾を言なさむ

一三三〇 南淵の細川山に立つ檀弓弓束纏くまで人に知らえじ

寄レ玉

一三九九 味鳥群の群れ寄る海に船浮けて白玉採ると人に知らゆな

一三〇〇 遠近の磯の中なる白玉を人に知らえず見むよしもがも

一三〇一 海神の手に纏き持たる玉故に石の浦回に潜きするかも

一三〇二 海神の持たる白玉見まく欲り千度ぞ告げし潜きする海人

一三〇三 潜きする海人は告ぐれど海神の心しえねば見えむとも云はず

右の五首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ、

一三二七 海の底石著く白玉風吹きて海は荒るとも取らずば止まじ

一三二八 底清み石著ける玉を見まく欲り千度ぞ告げし潜きする海人

一三二九 大海の水底照らし石著く玉齋ひて採らむ風な吹きそね

一三三〇 水底に石著く白玉誰れ故に心盡して吾が思はなくに

一三三一 世の中は常斯くのみか結びてし白玉の緒の絶ゆらく思へば

一三三二 伊勢の海の海人の島津が鰒玉取りて後もか戀の繁けむ

一三三三 海の底沖つ白玉緣を無み常斯くのみや戀渡りなむ

一三三四 葦の根の懃思ひて結びてし玉の緒と云はゞ人解かめやも

一三三五 白玉を手には纏かずに箱のみに置けりし人ぞ玉溺らする

一三三六 照左豆我手に纏き古す玉もがも其緒は替へて吾が玉にせむ

一三三七 秋風は繼ぎてな吹きそ海の底沖なる玉を手に纏くまでに

寄レ山

一三三一 磐疊む恐き山と知りつゝも吾は戀ふるか準へなくに

一三三二 岩が根の凝しく山に入り始めて山懐しみ出でがてぬかも

一三三三 佐保山を凡に見しかど今見れば山懐しも風吹くな努

一三三四　奥山の石に苔生し恐けど思ふ心を如何にかもせむ
一三三五　思ひがて痛も術なみ玉襷畝火の山に吾標結ひつ

寄レ木

一三〇四　天雲の棚引く山の隱りたる吾が下心木の葉知りけむ
一三〇五　見れど飽かぬ人國山の木の葉をし下の心に懷しみ思ふ

右の二首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ、

一三五四　白菅の眞野の榛原心よも思はぬ君が衣に摺りつ
一三五五　眞木柱造る杣人假初に假廬の爲めと造りけめやも
一三五六　向つ峰に立てる桃の樹成りぬやと人ぞ耳言きし汝が心努
一三五七　足乳根の母が其業る蠶すら願へば衣に着る云ふものを
一三五八　愛しきやし吾家の毛桃本繁く花のみ咲きて成らざらめやも
一三五九　向つ岡の若楓の木下枝取り花待つい間に嘆きつるかも

寄レ草

一三六〇　冬隱り春の大野を燒く人は燒足らねかも吾が心燒く
一三六一　葛城の高間の草野早領りて標指さましを今し悔しも

一三六二　吾が宿に生ふる土針心よも思はぬ人の衣に摺らゆな
一三六三　鴨頭草に衣色どり摺らめども移變ふ色と謂ふが苦しさ
一三六四　紫の糸をぞ吾が搓る足引の山橋を貫かむと思ひて
一三六五　眞珠付く越の菅原吾刈らず人の刈らまく惜しき菅原
一三六六　山高み夕日隱りぬ淺茅原後見む爲に標結はましを
一三六七　言痛くば左も右も爲むを石代の野邊の下草吾し刈りてば
一三六八　眞鳥住む卯名手の神社の菅の實を衣に摺著け着せむ兒もがも
一三六九　常知らぬ人國山の秋津野の杜若をし夢に見しかも
一三七〇　女郎花佐紀澤の邊の眞葛原何時かも絡りて我が衣に着む
一三七一　君に似る草と見しより我が標結し野の上の淺茅人な刈りそね
一三七二　三島江の玉江の薦を標結しより己がとぞ思ふ未だ刈らねど
一三七三　如是してや尙や老いなむ三雪ふる大荒木野の篠にあらなくに
一三七四　淡海のや矢橋の篠を矢矧かずて眞實ありえむや戀しきものを
一三七五　月草に衣は摺らむ朝露に沾れて後には移變ひぬとも
一三七六　吾が心ゆたにたゆたに浮蓴邊にも沖にも依りがてましを

寄レ花

一三〇六　此山の黄葉の下に咲く花を我はつ〳〵に見つゝ戀ふるも

右の一首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ、

一三六〇　氣の緒に思へる吾を山萬芹の花にか君が移ろひぬらむ

一三六一　住吉の淺澤小野の杜若衣に摺り著け着む日知らずも

一三六二　秋來らば移しもせむと吾が蒔きし韓藍の花を誰か摘みけむ

一三六三　春日野に咲きたる萩は片枝は未だ含めり言な絶えそね

一三六四　見まく欲り戀ひつゝ待ちし秋萩は花のみ咲きて成らずかもあらむ

一三六五　吾妹子が宿の秋萩花よりは實に成りてこそ戀ひ益りけれ

寄レ稲

一三五三　石の上振の早稲田を穗出ずとも標繩だに延へよ守りつゝ居らむ

寄レ鳥

一三六六　明日香川七瀬の淀に住む鳥も意あれこそは立てざらめ

寄レ獸

一三六七　三國山木末に住まふ鼯鼠の鳥待つが如吾待ち痩せむ

寄レ雲

一三六八　石倉の小野よ秋津に立ち渡る雲にしもあれや時をし待たむ

寄レ雷

一三六九　天雲に近く光りて鳴る神の見れは恐し見ねば悲しも

寄レ雨

一三七〇　許多も降らぬ雨故庭潦疾くな行きそ人の知るべく

一三七一　久方の雨には着ぬを恠しくも吾が衣袖は干る時なきか

寄レ月

一三七二　御空行く月讀壯士夕さらず目には見れども寄る由もなし

一三七三　春日山山高からし石の上菅の根見むに月待ち難し

一三七四　闇の夜は辛苦しきものを何時しかと吾が待つ月も早も照らぬか

一三七五　朝霜の消易き命誰が爲に千歳もがもと吾が思はなくに

右の一首は、譬喩歌の類にあらず、但闇夜の歌の人、所心の故に并に此歌を作る、因りて此歌を以て此次に載す、

寄二赤土一

一三七六　大和の宇陀の眞赤土のさ丹着かば其もか人の吾を言なさむ

寄レ神

一四〇三　御幣帛取り神の祝が鎭齋ふ杉原、薪木伐り殆々しくに手斧取らえぬ旋頭歌

一三七七　木綿懸けて祭ふ御室の神さびて齋むにはあらず人目多みこそ

一三七八　木綿懸けて齋ふ此神社越えぬべく思ほゆるかも戀の繁きに

寄レ川

一三〇七　此川よ船は行くべくありと雖ど渡瀨毎に守る人あるを

右の一首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ、

一三七九　絶えず行く明日香の川の淀めらば故しも有る如人の見まくに

一三八〇　明日香川瀨々に玉藻は生ひたれど筈あれば靡き遇はなくに

一三八一　廣瀨川袖漬くばかり淺きをや心深めて吾は思へらむ

一三八二　泊瀨川流るゝ水脉の絶えばこそ吾が思ふ心遂げじと思はめ

一三八三　嗟きせば人知りぬべみ山川の瀧つ心を塞かへたるかも

一三八四　水隱りに氣衝き餘り早川の瀨には立つとも人に云はめやも

寄二埋木一

一三八五　眞鉾持ち弓削の河原の埋木の顯はるまじき事とあらなくに

寄レ海

一三〇八　大海神は水門を守る事しあらば何方よ君が吾を率隱れむ

一三〇九　風吹きて海は荒るとも明日といはゞ久しかるべし君が隨意に

一三一〇　雲隱る小島の神の恐けば目は隔つれど心隔つや

右の三首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ、

一三八六　大船に眞楫繁貫き漕ぎ出にし沖は深けむ潮は干ぬとも

一三八七　伏超よ行かましものを守らふに打ち沾らさえぬ浪數まずして

一三八八　石隱り岸の浦廻に寄する浪邊に來寄らばか言の繁けむ

一三八九　磯の浦に來寄る白浪反りつゝ過ぎがてなくば岸に躊躇へ

一三九〇　淡海の海浪かしこみと風伺り年はや經なむ搒ぐとはなしに

一三九一　朝和に來寄る白波見まく欲り吾はすれども風こそ寄せね

寄二浦沙一

一三九二　紫の名高の浦の愛子地袖のみ觸りて寢ずか成りなむ

一三九三　豐國の岐久の濱邊の愛子地眞直にしあらば如何で嘆かむ

寄レ藻

一三九四 潮滿てば入りぬる磯の草なれや見らく少く戀ふらくの多き
一三九五 沖つ浪寄する荒磯の名告藻の心の中に靡き相ひにけり
一三九六 紫の名高の浦の名告藻の磯に靡かむ時待つ吾を
一三九七 荒磯越す浪は恐し乍然海の玉藻の憎くはあらぬを

寄レ船

一三九八 神樂浪の志賀津の浦の船乘に乘りにし心常忘らえず
一三九九 百傳ふ八十の島廻を榜ぐ船に乘りにし心忘れかねつも
一四〇〇 島傳ふ足速の小船風守り年はや經なむ逢ふとはなしに
一四〇一 水霧ふ沖つ小島に風を疾み船寄せかねつ心は思へど
一四〇二 如是離かば沖よ離かなむ湊より邊附かふ時に離くべきものか

挽歌

一四〇四 鏡なす吾が見し君を阿婆の野の花橘の玉に拾ひつ
一四〇五 秋津野を人の懸くれば朝蒔きし君が思ほえて嗟は止まず
一四〇六 秋津野に朝居る雲の失せぬれば昨日も今日も無き人思ほゆ

一四〇七 隱口の泊瀬の山に霞たち棚引く雲は妹にかもあらむ
一四〇八 狂語か妖言や隱口の泊瀬の山に廬せり云ふ
一三七〇 隱口の泊瀬の山に照る月は滿缺しけり人の常なき
一四〇九 秋山の黃葉賞愛みうらぶれて入りにし妹は待てど來ませず
一四一〇 世の中は眞二代は經行かざりし過ぎにし妹に逢はなく思へば
一四一一 福の如何なる人か黑髮の白く成るまで妹が聲を聞く
一四一二 吾が背子を何處行かめと辟竹の背面に宿しく今し悔しも
一四一三 庭つ鳥鷄の垂尾の亂尾の長き心も思ほえぬかも
一四一四 薦枕相纏きし兒もあらばこそ夜の更くらくも吾が惜しみせめ
一四一五 玉梓の妹は珠かも足引の清き山邊に蒔けば散りぬる

或本の歌に曰く

一四一六 玉梓の妹は花かもあしひきのこの山かげに蒔けば失せぬる

卷七終

卷八

春雜歌

志貴皇子の懽の御歌一首

一四一八　石激る垂水の上の早蕨の萌え出る春に成りにけるかも

鏡女王の歌一首

一四一九　神奈備の伊波瀬の杜の喚子鳥痛くな鳴きそ吾が戀まさる

駿河采女が歌一首

一四二〇　沫雪か離々に降ると見るまでに流らへ散るは何の花ぞも

尾張連が歌二首

一四二一　春山の岬のたをりに春菜摘む妹が白紐見らくし好しも

一四二二　打靡く春來るらし山の間の遠き木末の咲き行く見れば

中納言阿倍廣庭卿の歌一首

一四二三　去年の春い掘じて植ゑし吾が宿の若樹の梅は花咲きにけり

山部宿禰赤人が歌四首

一四二四　春の野に堇摘みにと來し吾ぞ野を懐しみ一夜寢にける

一四二五　足引の山櫻花日並べて如是咲きたらば甚戀ひめやも

一四二六　吾勢子に見せむと念ひし梅の花それとも見えず雪の降れゝば

一四二七　明日よりは春菜摘まむと標めし野に昨日も今日も雪は降りつゝ

草香山の歌一首

一四二八　忍照る難波を過ぎて、打靡く草香の山を、夕暮に吾が越え來れば、山も狹に咲ける馬酔木の、惡しからぬ君を何時しか、往きて早や見む

右の一首は作者微しきに依りて名字を顯はさず、

櫻花の歌一首幷短歌

一四二九　少女等が頭挿の爲に、遊士の鬘の爲と、敷き座せる國の限に、咲きにける櫻の花の、匂ひはも鳴呼

反歌

一四三〇　去年の春逢へりし君に戀ひにてき櫻の花は迎へけらしも

右の二首は若宮年魚麻呂誦へりき